となりの相模さん

ぶーちゃん☆

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

３学期を迎えた２年Ｆ組は席替えを行うことに。　そんな席替えイベントにうんざり気味な八幡だが、予想外の新たな隣人の予想外の行動にさらに戸惑うことに…

目次

席替えと相模さん ―― 1
忘れ物と相模さん ―― 13
アメと相模さん ―― 25
回顧と相模さん ―― 40
心配事と相模さん ―― 55
道草と相模さん ―― 70
憩いの場と相模さん ―― 83
招かれざる来客と相模さん ―― 95
となりの相模さん ―― 115
【特別編】バレンタインと相模さん　上 138
【特別編】バレンタインと相模さん　中 151
【特別編】バレンタインと相模さん　下 168
からかい上手の相模さん【攻撃編】 187
からかい上手の相模さん【反撃編】 202

席替えと相模さん

冬休みが終わると、学校生活の新たな1年の始まりであると同時に、2年生としての最後の学期でもある3学期が始まる。

てかなんで日本て年度の始まり4月なの？ややこしくない？

そんな、残すところあと僅か3ヶ月弱の高校2年生生活だというのにも関わらず、うちのクラスは席替えを行う模様である。

いや本当に意味が分からない。今それを行う意味ってなに？

ご存知の方も多いかもしれないが、この席替えというイベント、我々のようなスクールカーストの日陰者にとっては、クラス替え初日に並ぶほどの残虐イベントである。

もうこれは本当やめた方がいいと八幡思うの。幸せになるのは極々一部のリア充共だけで、ほとんどの人間にとってはロクなイベントじゃないからねコレ。

「うっわー、マジ席替えとかやだわー！マジ勘弁して欲しいっしょー」

「それな」

「ホントそれ」

ああやって嫌だ嫌だと言いながらもどこか楽しげにしてる連中（主に戸部周辺）だけだよ喜んでんの。

あとはああやって口には出さなくても、秘かに思いを寄せてる相手の隣の席になれたら…なんて微かな望みを抱いている青春謳歌な恋愛脳な奴らだけ。

でもそいつらこそが俺らのような日陰者にとっては一番の加害者だったりするから手に負えない。

だってそいつら、いざ隣の席が俺だと分かると露骨に嫌な顔すんだもん。どれくらい露骨かといえば、新しいラジコンを買ってもらったスネ夫が、初めて遊び始めた直後にジャイアンに遭遇しちゃった時くらいの露骨さ。

あれって、ある意味ジャイアンの鋼メンタルを尊敬しちゃうよね。

そんな、ジャイアンの大物ぶりに感動しちゃってる俺の思いとは裏腹に、席替えイベントは着々と遂行されていく。

教卓の上に置かれた担任お手製のボックスから、クジ引き方式で新たな席へと充てがわれていくか弱い俺たちは、さながら出荷を前に仕分けされていくだけの家畜のようだ。

「うわー！俺、お前の隣かよー」

「えー……？あんたが隣なのぉ？」

などとそこかしこでテンプレのように行われるやりとりをしているお前らは、なんでぶつくさ文句を言いながらもそんなに楽しそうにしてるのん？

そりゃそうだ。お前らはまだ知らない。真に嫌がる時ってのは、そんな風にバカみたいに騒げはしないものなのだ。

真に嫌がる時、それはＭＵ・ＧＯ・Ｎ。人って、本当に嫌な時って絶句しちゃうのよね。

八幡知ってるよ？だって、数えきれないくらいの経験談だもの。

しかしそんな俺にも唯一の望みがあるのは言うまでもない。

なにって？そんなの決まっているだろう。この席替えイベント発表と同時に、キラキラした目を俺に真っ直ぐ向けてきた天使のそばに、毎日居られるかもしれないという望みだよ！

そんな天使が今まさに担任お手製ボックスからクジを引く。

天使は引き当てたクジの数字を一瞥すると、クルリと俺が居る方向に身を翻し、両手で持ったクジを胸元にかざして頬を染めて恥ずかしそうにはにかむ。

やだもう可愛すぎじゃないかしら戸塚たんったら！わざわざ俺に数字を見せてくれたんですけど！

「はちまーん！僕は１番だからねっ」

って声が聞こえてくるようだ。
よし、2番、もしくは隣の席を引き当てたら戸塚に結婚を申し込もう。俺、この戦いが終わったらあいつと結婚するんだ！
そして遂に俺にクジ引きの順番が回ってきた。
神よ、俺の残りの寿命を全て捧げてもいいから、どうか戸塚のそばへ！神じゃなくて悪魔に祈っちゃった。
しかし引き当てた数字を目の当たりにした俺は力なく崩れ落ちる。なぜなら、戸塚の引き当てた数字とは真逆。そう、このクラスの総人口の数と同じ数字だったのだから…。
俺は生涯忘れる事はないだろう。遠目から俺の数字を確認した戸塚のシュンとした哀しげな顔を。俺の戸塚にあんな顔させるとは、神も悪魔も絶対に許すまじ。
＊
俺は自分が充てがわれた席へと向かいつつ途方にくれていた。
この席は窓側最後列。常であれば誰しもが歓喜するであろう特別席である。
だがしかしそれはあくまでもリア充限定での話。なぜならこの席は、そのリア充の溜まり場になりやすい席だからである。
つまりは2学期まで、休み時間や昼休みにいつも三浦達が騒いでいた場所なのよね、

ここ…。

これでもし隣やその周辺に三浦、もしくは前に葉山でも来ようものなら、この場所は間違いなくトップカーストの社交場と化すであろう。ちなみに由比ヶ浜だと逆に気を使っちゃいそうだからマジ勘弁。

いや、なにも三浦や葉山、由比ヶ浜だけではない。たとえ戸部や大岡たちであろうとも、この（リア充限定で）居心地の良い場所ならば、わざわざ女王ご一行様が遠征してくる可能性さえありうる。

そのさい下民はただ遠くへと追いやられるのみ。

昼休みはどうせベストプレイスだろうって？

馬鹿を言っちゃいけない。さすがの俺も、雨の日は自分の席で食うんですよ。どんなに居心地が悪かろうとも、雨の日ばかりは自分の席しか居場所が無いんですよ。

つまり雨の日はトップカーストに囲まれながらメシを食うしかないという地獄。ていうか、購買から帰ってきた時に俺の席って残ってるんだろうか…？

頼む！戸塚と真逆の席になってしまうという憂き目にあったんだから、せめて隣の席に来るのがトップカーストグループではありませんように！

その願いが叶うのであれば、新たな隣人女子からの露骨なガッカリ視線などいくらでも我慢しますから！

そんな願いを、今度こそ神か悪魔が聞き入れてくださったのであろう。
幸いにして俺の隣の席にやってきたのは、トップカースト女子［では］無かった。
隣の席で、俺の存在を確認して愕然と佇むそのトップカースト［では］ない女子。
そこには、トップでは無く序列2番目のカーストグループの中心人物たる相模南が、顔を真っ赤に紅潮させて俺を見下ろしていたのだった。
あかん、これもう終わりのやつや…。

＊

相模南。俺とこいつには浅からぬ因縁がある。
因縁もなにも俺が一方的に忌み嫌われてるだけだけど。
ぶっちゃけ俺は相模に対して、特にこれといった感情を持ち合わせてはいない。ただ、役立たずで使えない相模を罵倒して嫌われたってだけの、単なる他人という関係性だ。
ただしそれは俺から見た場合である。相模から見たら、俺は間違いなく忌むべき相手。
自分よりも遥かに下の地位の分際で、クラスで上位の自分を罵倒して人前でみっともなく大泣きさせた憎むべき相手に他ならない。
つまりなにが言いたいのかと言うと、俺の新学期は早くも終了しました。

だってそうだろう。この窓際最後列の席はトップカーストないし高カーストグループの溜まり場であり社交場。

相模がこの席に着くということは、つまり休み時間や昼休みに、こいつの取り巻き共がこの場に集合するという事なのだ。

うっわ…想像しただけでも息が詰まりそうだわ。文化祭直後、俺の悪口を学校中に垂れ流したグループが隣の席に集まるとか、それなんて拷問？これから俺は休み時間の度に、これだけの至近距離からどんだけの蔑みの視線と嘲笑を受けて過ごさなきゃならないの？

ハァ…これは昼休みに限らず、休み時間の度にどっか行かなきゃならないのかもな…。

俺は未だ隣で真っ赤になって憤怒の表情を浮かべている相模の熱のこもった視線をヒシヒシと感じつつ、頭を抱えて机に突っ伏すのだった。

＊

あの悪夢の席替えから数日。結果から言えば、俺はかなりの肩透かしを食らっている。

なぜかといえば、隣の相模さんが休み時間の度に自ら取り巻き共の席へと向かうからだ。それ故にこの席は休み時間になると不可侵の空間となる。つまりは誰も近寄らな

い俺のボッチプレイス。席替え前と変わらないでやんの。
まあそこは俺が死ぬほど嫌いな相模である。極力俺の近くには居たくないのであろう。
授業中とかは隣からちょくちょく視線を感じるものの、基本的に一切関わることなく、予想に反して快適な毎日を送れている毎日に、俺はすっかり油断していた。
その日も授業はつつがなく進んでいき、次は数学の時間。
数学ということは、すなわち睡眠時間とイコールで繋がる俺である。
当然ながら俺は授業開始と同時に惰眠の体勢を取ったのだが、そこで事件は起きた。
不意に弱々しくクイクイと引っ張られたブレザーの袖。
はて？授業中だと言うのに、戸塚が愛らしく俺を呼んでいるのだろうか？
なんだよ戸塚～、今はまだ授業中だぞ～？仕方ないな、結婚するか…なんて無益な妄想をしながら引っ張られている方に視線を向けると、そこには…。
「……は？」
そこには、林檎のように顔を赤々と染め上げた我が隣人相模南が、もじもじと俺の袖をクイクイ引っ張っていたのだった。
＊
「…なんだよ」

「…あ、や」

まさか相模から話し掛けられる日がこようとは夢にも思わなかった上に、なんだか遠慮がちなこの態度。

なんなの？同じ空気吸うのそろそろ限界だから、ちょっと5時間くらい息止めててくんない？とか言うつもりなのかな？

訝しげな視線で相模を見ていると、相模は相変わらずもじもじしたままスカートをギュッと握り、分かりやすいくらいにゴクンと喉を鳴らした。

「あ、あの…ウ、ウチ、その…きょ、教科書忘れちゃって……ちょっと見せて欲しいな、と…」

「は？」

まさかの青春イベント『教科書見せて』である。

嘘だろ？あの相模が、俺に教科書を要求してくる…だと？

「…あ、ご、ごめん…無理なら、いい…です」

えっと……誰？なんか俺の知ってる相模じゃないんだけど。なんでそんなに見るからにシュンとしちゃってんの？

あまりにも予想外な相模の応対に、軽く呆気にとられて固まる俺ではありますが、こういう態度をとられちゃうと、悲しいかな小町に訓練されたお兄ちゃんスキルが自動的

に発動してしまうのですよ。
「……チッ、ほらよ」
　ポイッと相模の机に数学の教科書を放ってやると、相模は俺の顔をポカンと見つめる。
「…え、い、いいの…？」
「あ？お前が見せろって言ってきたんだろうが」
「そうだけど……ホ、ホントに…？」
「…いらねぇんなら返せ」
「いやいやいや、いるいるいる！あ、ありがと」
「おう…」
　なんだよこれ、すっげぇ調子狂うんだけど…ホントこの子どちらの相模さん？
　嬉しそうに照れ臭そうにホッと胸を撫で下ろしてる相模の姿は、あの文化祭での蛇を思わせる狡猾さとか一切感じない。
「あ、でも比企谷は…？い、一緒に見ないの…？」
「ああ、俺は数学捨ててるから気にすんな。授業が終わったら、適当に机に置いといてくれりゃあいい」
「そ、そっか、その…ありがと…」

あまりにも調子の狂う相模の素直さに、俺はそのまま無視して机に突っ伏す。
てか、こいつヒキタニじゃなくて比企谷って言ったか…？
ハァ…本当によく分からん。
こういうよく分からん時はとっとと寝るに限るな。
俺はいくら考えても無駄だと悟ると、即座に意識を放棄するのだった。

――目が覚めるとすでに授業は終わっていた。
机には、遠慮がちに置かれた数学の教科書が一冊。どうやら相模は休み時間に入ったと同時に教科書を俺の机に置いて、取り巻きの所に向かったようだ。
あ、これあれかな？もしかして酷い落書きとかされてるやつかな？まぁ数学の教科書を使うことがない俺には大した痛手にはならんからいいけども。
何の気なしにペラペラと捲った教科書には、落書きではなく一枚のメモ用紙が挟まれていた。
はて？俺の教科書に見覚えのないメモ用紙？なんだこれ？
そのメモ用紙には、とても女の子らしいカラフルな色で書かれた可愛い文字と顔文字が。その書かれた内容を確認した俺は、さらなる思考の迷宮に足を踏み入れざるを得ないのだった。

［ありがとっ（＊^▽^＊）］

忘れ物と相模さん

隣人に教科書を貸してやった翌日、俺はさらなる衝撃の光景を、今まさに目の当たりにしている。

「あ、あの…比企谷、きょ、教科書忘れちゃったから、見せて欲しいんだけど…」

え、どゆことなの…？

＊

昨日は本当に意味が分からなかった。あの相模が俺に教科書を見せて欲しいと懇願してくるなんて、どう考えても有り得ない。

いや、この世の中には有り得ない事など無いのだと言う人も居るように、たかがあれしきの事を有り得ないなどと言うこと自体がナンセンスなのかも知れない。

だがしかし、普通に考えたらやはりどうしても有り得ない事なのだ。

――相模ってああ見えて実は勉強の虫だったりとか？だから教科書を忘れたくらいで授業が疎かになるのがどうしても許せない、とか…？

――もしくは実は進級がヤバいくらいの成績で、いま授業を疎かにしている場合じゃない、とかか…？

ふむ、まぁどちらかと言えば後者の方が実にらしい気がするのだが、それでもあの相模だよ？

たぶんこの学校内で、一番俺を嫌っているであろうあの相模。

無駄にプライドばかり高く、そのくせどうしようもないヘタレ。仕事も責任も他人に押し付けてすぐ調子に乗る、自分を可愛がりが過ぎるあの相模が、大嫌いな俺なんかに頭を下げてまで教科書を見せてもらおうとするだろうか？

あまつさえ素直にゴメンと謝ったり、ありがとうとお礼を言ったり、トドメは可愛い顔文字メッセージときたもんだ。

ハァ…なんか逆に恐くて教室入りたくないわー。相模の隣に座りたくないわー。

などと登校中ずっと不毛な思考にとらわれながらも、気付けば俺はしっかりと自分の席に着席していたのだった。

ここまでどうやって辿り着いたか記憶が全く無いんですけど。いやー、習慣って恐いよね。

「お、おはよ…」

なん…だと？なんか隣から挨拶が聞こえてきたんですが。戸塚か？戸塚なのか？

だがしかし、この声は悲しいかな戸塚の声とは違うんだよね…。

そう、きのう不覚にも俺にお兄ちゃんスキルを発動させやがったあの人物の声であ

る。

恐る恐るではあるものの、そちらの方向へとチラリ一瞥してみると、相模はすでにこっちは向いていない。

が、俯き気味のその顔から覗く頬と、ショートカットから覗くその耳は、昨日と同じように朱色に染まっているのだった。

「…うす」

――は？なに俺挨拶とか返しちゃってんの？バカなの？バーカバーカ!!くそ、朝から顔も体も超熱いわ。

なんかもう相模の方を向くのが照れ臭くなってしまった俺は、極力そちらを見ずに鞄から教科書やらノートやらを机に移す。

でもちょっとだけ気になってしまい、ついチラリと横目で見てしまった相模の俯きっぱなしの横顔が、なんか嬉しそうにニヤニヤしてたんだけど。「なにこいつマジで挨拶返してきてやんの。笑えるんだけどー、キモッ」とか嘲笑ってたのかね～（白目）

それから授業を1つ2つこなし、次は3時間目の現国か。平塚先生だから絶対に寝れないやつね。

目を完全に覚ます為にトイレに顔を洗いに行き、予鈴と共に席へと戻ってきた俺に、

あの衝撃の光景が待ち受けていたのだ。

「あ、あの…比企谷、きょ、教科書忘れちゃったから、見せて欲しいんだけど…」

――だからどゆこと…？

＊

「…は？なんでだよ…今日も忘れたのか…？」

「…うん。昨日家で予習してたら、また忘れちゃったみたいでさ」

「ほーん…」

なんなの？相模っていつからドジッ娘属性とか身に付けたの？

こいつはドジッ娘じゃなくてダメッ娘だろ？ダメダメっ娘まである。

他人（俺）を見下す事しか脳がないような、あの高慢ちきな相模が実はドジッ娘だったとか、なんだよ少しだけ萌えちゃうじゃんかよ、などと頭の片隅で思いつつも、それとはまた別の思考も頭を過らざるを得ない。

なぜなら次の授業はしつこいようだが現国なのだ。

昨日であれば捨ててる数学の教科書だったから貸してやれたけど、今日はそれは無理。絶対無理。

だって貸しちゃったら俺が教科書忘れたって見られちゃうんでしょ？あの独身に。

寝たらファーストブリット。起きててもセカンドブリット。なにこの積みゲー。

ちょっとゲームバランスが悪いんじゃないですかね。
「あ、ごめん…やっぱいいや。迷惑掛けちゃうの悪いし…あ、あはは」
あまりにも理不尽なクソゲーレベルのゲームバランスに悩んでいると、相模が申し訳なさそうに自身の願いを取り下げた。
…だからそのシュンとした苦笑いは俺を容易に殺すんですよホント。
小町ちゃん？君の日頃のスパルタ訓練のおかげで、今日はお兄ちゃん、無事にお家に帰れそうもないよ…。
「…ほれ」
仕方がない。今日は平塚先生と生徒指導室でとことん語り合うか（拳で一方的に語りかけられるだけだけど）…と半ば人生を諦めた俺は、昨日同様に相模の机に教科書を放ってやるのだった。
「え、マジで…？いいの…？」
「いやだから見たくないんならいいから」
「いやいやいや、いるいるいる！」
なにこれデジャヴ？こんな光景昨日も見たよ？
「で、でも今日は現国だよ…？比企谷だって教科書ないとマズくない？ウチに貸しちゃったら、平塚先生に怒られちゃうって！」

――こいつ…それ分かってんなら教科書見せてとか言ってくんじゃねーよ…。

「あ？仕方ねーだろ。教科書は1冊しかない。使用者は2人いる。だったら解は1つしかないだろが」

…だよね？それで間違ってないよね？こういう経験に乏しいもんで、これ以外に答えが分からないんだよ八幡は。

そんな俺の台詞を聞いた相模は、スッと俯くとポツリとなにかを呟いた。

「…そっか、やっぱアンタって、こういうやり方で人を助けちゃうんだ…」

生憎俺は難聴系主人公ではない。ちなみに難聴でもなければ主人公でもないという意味である。

耳聡いモブキャラなどうも俺です。

そんな耳聡い俺でさえも聞き取れないくらいの小さな小さな囁きを放った相模は、次の瞬間ガバッと顔を上げる。

その表情はどこか悲しげでもあり悔やんでいるようでもあり、また、恥ずかしいながらも決意を固めたような、そんな表情だった。

「…アレだよね、比企谷っていつもボッチだからこういう発想ってないよね。よいしょ！」

そう言った相模は、自身の机と俺の机をピタリと合わせる。

え、なにしてはりますのん？近い近い近い。なんかいい匂いがしちゃうから！

「…ま、まぁアンタと肩寄せあって授業受けるとか超嫌だけど、ウチが見せて貰う立場なんだからしょうがないよね」

そう憎まれ口を叩きつつ、相模は教科書を並んだ机の真ん中に広げる。

「ホ、ホラ、こうやって一緒に見ればいいじゃん。平塚先生に聞かれたら、ウチが忘れたから見せて貰ってるってちゃんと言うし」

「お、おう」

いや、「おう」じゃねーから。こんなの恥ずかしすぎんだけど。

「比企谷が忘れたなんてなると平塚先生にキツいお仕置きされるだろうけど、ウチなら大丈夫だしさ。ね？」

…チッ、なんだよその笑顔。相模がそんな笑顔を俺に向けてくるとか、すげー気持ち悪いんだが。

どんくらい気持ち悪いかというと、真っ赤な顔した俺が、頭をガシガシ掻きながらこんな台詞を吐いちゃうくらいに気持ち悪い。

「……好きにしてくれ」

――あ、気持ち悪いのは俺でした。てへ！

その後、平塚先生がＦ組にご到着と同時に窓際最後列を驚愕の眼差しで凝視した挙げ句、ページを捲ろうとする度に手やら肘やらが当たっちゃって、授業中も気持ち悪く照れ続けている俺に向かって呪咀の念を送り続けてきたことは言うまでもない。

お願いだから誰か幸せにしてあげてください。

＊

現国を終えたあとは、昨日の数学を終えた時と同様、特に相模と関わることなく１日が過ぎていった。

その間チョコチョコと隣の席の方向から視線を感じたのは気のせいのはず。

てかなにちょっと意識しちゃってんの？俺って結構キモくない？あ、それはいつものことでした。

帰りのホームルームまで無事に終わらせると、クラスメイト達は各々が思い思いの青春という名の放課後を過ごす為のゴールデンタイムがやってくる。

教室に残って騒ぐ者や部活動へと向かう者。

そんな中で俺はその中間をゆく者なのである。騒がず教室に残って部活動に勤しむのだ。

要は部活までのボッチな時間潰し。だってあんま早く行っちゃうと、ホームルーム後

しばらくのあいだ三浦達とお喋りする事が定例化してる由比ヶ浜に怒られちゃうんだもん。

なんで先行っちゃうし！って怒るくらいなら、その偏差値低そうな身の無いガールズトーク（笑）を早めに切り上げてもらえませんかね。

そんなわけで、俺はある程度の時間が過ぎるまで、いつものようにボーっと教室内を見渡していたのだが、不意に隣人と目が合ってしまった。

「……あ」

「……あ」

突然俺と目が合ってしまった相模は、フイッと前を向くと所在なさげに教科書やノートを鞄に仕舞い出した。

なんていうのか、あたふた？って言葉が良く似合うくらいの慌てっぷり。

てか、俺は適当に教室内を見渡してる内にたまたま目が合っただけだが、それってつまり相模はその前から俺を見てたってことだよな…？

なんだ？俺、またなんか相模に恨まれるようなことしたっけ？

わちゃわちゃと荷物を仕舞い終えた相模は、もう一度改めて俺の方へと視線を寄越すと、ちょっと不満げな表情？…いや、違うな。なんか照れくさそうな表情を浮かべ、なんと手を胸の高さで小さく振ってこう言ってきたのだ。

「…じゃ、じゃあね」
「え…あ、ああ、おう」
まさかの別れの挨拶である。急な挨拶とかに対応できないエリートボッチな俺は、もちろんキモくどもりまくったけれども。
しかしこれで今日は朝の挨拶と別れの挨拶を相模と交わしてしまった事になる。
なんだよこのまさかの隣人付き合い。俺史でも稀に見る光景なんだけど。
すみません嘘吐きました。ちょっと見栄張っちゃったんですけど、実はこんなの初めて！
その初めての隣人付き合いを、まさかあの相模とする事になるだなんてな。人生って分かんないもんだぜ。
俺からの挨拶の返事を受け取った相模は、またフイッと顔を逸らすとギクシャクとした謎の動きで教室をあとにしようと動き出す。
が、しかし今日のイベントはこれでは終わらなかった。ふぇぇ、もうお腹いっぱいだよう…。
「きゃっ」
ガチャンという音と共に相模の小さな悲鳴。あまりにも慌ただしく動いた為に、どうやら自身の椅子に足をぶつけてつまずいたらしい。

そしてその勢いのまま相模は鞄を落としてしまい、中の教科書等を床にぶちまけてしまったのだ。

なんだよマジでドジッ娘萌えとか狙ってんの？

しかしここで助けになど入れるわけもないコミュ障な俺は、隣で恥ずかしそうに鞄の中身を拾う相模をただ眺めるのみ。

下手に拾うの手伝ったら「ちょっと！勝手にさわんないでよキモい！もう最悪…あんたなんかに触られたらキモくてもう使えないじゃん……！」なんて、通報の危機も待ち構えてるしね！

「…ん？…あれ？……お、おい、それって…」

そんな自身の悲しすぎる想像に密かに涙していると、拾っては鞄へ、また拾ってはまた鞄へ…と片付けられていく内に次第に減ってきた散乱物の中に妙な物を発見してしまい、俺はつい声を上げてしまった。

「あ”」

相模が素の声を出して光の早さで拾ったソレは……そう。なぜか忘れたとか言ってたはずの現国の教科書だったのだ。

焦って鞄へとソレを詰め込んだ相模は、なんともバツの悪そうな苦笑を浮かべて一言。

「ア、アレ～…？おっかしいな～…。な、なんかウチ、忘れちゃったと勘違いしてたみたい…。も、もしかしたら鞄の奥に入ってたのかも、ア、アハ…」

などと宣うと、逃げ帰るようにピューっと走って行ってしまった。

――なんだこれ？…どんだけドジッ娘さんなんだよ相模さん…。

アメと相模さん

新たな年、新たな学期が幕を開けてから早3週間ほど。俺のボッチライフは通常営業で平和である。

ほんの僅か変わった所と言えば、ここ2週間ほどで6日くらいは隣人に教科書を見せたということくらいか。

いやいや全然通常営業じゃねぇよ、大変革だよ。

てかこれちょっとおかしくないですかね。2週間と言ってみても、週末を除いてしまうと登校日は10日なわけだ。

そのたった10日中の6日教科書忘れるとか、ちょっと異常じゃね？この隣人。

もうドジッ娘じゃなくてアホの子のレベルだよ。

いや、由比ヶ浜だってこんなに教科書を忘れる事なんてない。だってあいつが教科書持って帰ってんの見たことないもん。それもう本末転倒だよ！少しは勉強して！

しかし教科書を見せる意外は特に交流は無い。多少あると言えば、あの日からは毎日朝と夕の挨拶を欠かさずに交わすようになったってことくらいだな。

あ、あともう1つあったわ。それは今まさに、この授業の終わりと共に交わされるで

あろうやりとりだ。
授業終了のチャイムと共に、相模は満足そうなホクホク顔でガタガタと机を元の位置に戻す。これはもう見慣れた光景のひとつなのだが、そのあとに続くこのやりとりこそが、俺と隣人の挨拶以外のもう1つ交流と言えるだろう。
「…比企谷、その…今日もありがと。はい」
こいつはここ最近、そう言って胸ポケットからガサゴソと小さな包みを俺に手渡してくるのだ。
それは、どうやら教科書を見せることに対しての対価らしい1個の飴玉の包み。
教科書を見せるようになってからどれくらい経った頃だろうか。こいつはその授業が終わると、こうやって飴玉をくれるようになった。
「…だから別に要らんっつーに…。てか飴玉忘れずに持ってくんなら教科書忘れずに持ってこいよ…」
そう言いながらも右手を差し出すまでがここ最近のデフォである。
だってこいつ、最初のころ拒否したら、またあのシュンとした顔したんだもん。
あれ反則だろ…。
「バ、バカじゃないの…？飴はウチの重要なエネルギー源なんだから、忘れる忘れない以前に自然と持ってきちゃうに決まってんじゃん」

と、相変わらず意味の分からない理論を振りかざして悪態を吐きながら、俺の手に触れないよう少し高い場所からポトンと落とされた飴玉は、今日もいつもと同じようにほんのり温かい。

…ぐ、だからこれホントやめて欲しいんだよね。なんで飴玉が胸ポケットから出てくんだよ…普通そこに入れなくない…？

胸ポケットから出されたほんのり温かい飴玉とか、なんかちょっとドキドキしちゃうじゃん。

こいつ、この思春期の男心とか分かってんのかねぇ。

「…まぁ、明日は忘れないようにするから。……でも、もし忘れちゃったらまた見せてよね」

俺に飴玉を渡し終えた相模は、プイッとそっぽを向くとテテッと取り巻き達の席へと走っていく。

そんな相模の背中を見つつ、今日も俺は飴玉の包みを解いて、まだほんのりと温かさの残る飴玉を口に放り込んでこうひとりごちるのだった。

「アホか…忘れる気まんまんじゃねーかよ」

あれかな？もしかして通学中の鞄を少しでも軽くしたくてわざと置いてきてんのかな？

ま、相模の体温で少し温かいこの飴玉が結構美味いから、そんなに悪い気はしないけれど。

――しっかし、なんか俺と相模って、こうして考えると意外と交流持ってんじゃん。

＊

「ついにこの日が来てしまったか…」

４時間目の途中だというのに、ボーっと窓の外の寒々しい景色を眺める俺は、常であれば頭の中だけで考える思いを、つい口に出して呟いてしまうほど憂鬱な気分に支配されていた。

なぜなら新学期が始まりこの席替えが行われてから、幾度となく悪夢として思い描いていたこの日が、ついに今日来てしまったのだから。

今日は朝から…いや、厳密に言えば昨夜からずっと冷たい雨が降り注いでいる。

これは数日前から予報されていた事である為ある程度は覚悟していたのだが、いざこうして現実にこの日が来てしまうと、やはり目の前が真っ暗になってしまうというものだ。

つまり何が言いたいのかと言うと、今日はこの席になって初めての教室でのランチタイムなのである。

これはかなりキツい。なにせ俺は未だにマイスペースの昼事情を一切知らないのだから。

以前の俺の席は昼休みに入ると、序列何番目か知らん女子グループの荷物置き場という大役を果たしていた。

雨の日に購買から戻ってくる度に「え…？今日教室で食べんの…？」と語る目に晒されて、自分の席だというのに申し訳ない気持ちで一杯なまま、黙々とパンを咀嚼したものだ。なんだよ涙、まだお前の出番は早えーよ。

だが果たして今はどう使われているのだろうか？

普通に考えたらグループリーダーである相模がここの地主な以上、昼休みはやはりここが相模グループの溜まり場なのであろう。

その場合、俺の席はやはり荷物置き場として使われているのか？それともバイ菌の如く触れないように扱われているのか？

やだ！どちらにせよ俺に居場所無いよ！

だがしかし！俺には若き日から培ってきた苦い体験での経験値があるのだ。そんな嬉し恥ずかし体験での経験値を多く積むと、ある程度の自衛策は身に付くというもの。

そんな幾度の経験で今やかなりのレベルアップを果たした俺は、すでに自衛の為の策

は打ってある。

なんと！俺は今日！すでに朝からコンビニでパンを購入済みなのだ！

フハハハハ！雨など恐るるに足りぬ！これならもう購買から戻って来た時の、あの気まずい空気に晒されずに済むぜ！

まぁ唯一弱点があるとすれば、昼休みスタート直後から「早くどっか行けよ」という視線に晒されてからの、「…は？…今日教室で食うのかよ…居なくなればいいのに」までのコンボが待ち構えているという点だろう。

あれ？むしろ状況が悪化してない？

だが仕方ない。今は以前のどこぞのグループとは違い、序列２番目、相模グループの溜まり場となっているであろう以上、こちらから先に動かねば俺の生きる道は無いのだ。

最近なぜか相模とはあまり悪い関係では無いものの（俺の一方的でお花畑な思い込みじゃなければね？）、それはあくまでも相模個人の問題であって、グループ内には適用されないのだ。

普段は挨拶しちゃったり、肩寄せあって教科書見ちゃったり、おっぱい温度の飴もらっちゃったりはしていても、ひとたびグループが集まりグループ内で俺の悪口が始まってしまえば、そんな相模も一瞬で敵に回るであろう。まぁもともと敵視しかされて

ないのだから当然なのだが。
だが幸いな事に、俺の近くに居る事をなによりも嫌う相模は、休み時間の度に自ら取り巻きのもとへと赴くという行動原理を基本としている。
であるならば、昼休みに入っても一向に動き出さず、あまつさえ一方的に食事を始める俺を見れば、休み時間と同様相模も諦めて取り巻きのもとへと向かうに違いない。
それにより例え遠くの席から「今日あの人どっか行かないんだけどー…ウッザ」「えー…」「南ちゃん可哀想～」なんて会話が聞こえて来たのだとしても、そんなのは俺に言わせりゃ負け犬の遠吠えと一緒なんですよ！
どうよこのパーフェクトプラン。敗北を知りたい。

4時間目の授業も残すところあと僅か。
そんな完璧な作戦に酔い痴れている俺なのだが、先ほどから多少気になっている事が1つあるんですよね。
それは…隣人の様子がおかしい。
いや、ここ最近相模の様子がおかしくない事なんて無いのだが、今日の相模は今までに無いおかしな空気を放っているのだ。
なんか昼休みが近づくにつれて、妙に落ち着きが無いんだよね、この子。

ちなみに今日の相模はまだ忘れ物の申告はしてきていない。つまりお互いの机は本来あるべき姿の距離感ではあるのだが、それでも視界の端にチラつくんだよ。

ちょくちょく感じる視線はいつものことなのだが（いつものことなのかよ）、なんかモジモジソワソワしてんのが丸分かりなんだよね、こいつ。

どうしちゃったのかな？トイレ我慢出来なくなっちゃったのかな？これって今の時代セクハラ発言になっちゃうみたいだから気を付けて！

が、いまさら相模の乱心を気にしても仕方ないって事くらいは理解している。

なので俺は、相模からの視線も相模から発っせられるモジソワ空気も意識の外に弾き出して、また窓の外の景色を眺めながら深く溜息を吐くのだった。

＊

日本全土でお馴染みのチャイム音が校内に鳴り響き、ついに食事の時間が幕を開ける。

やっべー…なんで俺、自分の席で昼飯食うだけでこんなに緊張してんの？俺にだって安らぎの時間くらいあったってバチは当たらないと思うんだけどなぁ…。

まぁここまで来たら気にしていてもしょーがない。

先手必勝、俺は周りを気にする素振りなど一切見せずに、黙々と鞄からコンビニパンとマッ缶を取り出して机に並べる。

さぁ相模よ、俺はここで食事をとるぞ！早くここから立ち去れい！
さぁ相模の取り巻き達よ、俺の捨て身の姿を確認したのであれば、今日は大人しく己の席にとどまるがよいわ！
そんな俺の願い通り、しばらく待っていても相模の取り巻き達はこの不可侵の領域へと赴いて来る事は無かった。
しかしここで想定外の事態が起きる。取り巻きは来ないのにメインが動かない。なぜか相模はずっとモジモジソワソワしたまま自席にとどまったままなのだ。
まぁ気にしてもしょうがない。とりあえずここが溜まり場になる危機は回避出来たっぽいし、とっとと次の行動に移ってこの態勢を磐石のものとしようではないか。
俺は相模を無視してパンの包装紙を破ろうと手をかけ…
「ひ、比企谷…！」
「ひゃいぃ…？」
あまりにも突然声を掛けられたものだから、とんでもなく気持ち悪い声を出してしまった。
「あの、さ…こ、これっ」
気持ち悪すぎる声を発っしてしまった自責の念に悶えている俺には一切目もくれず、相模はおどおどと立ち上がると、俺の机の上に少し乱暴気味になにかを置いた。

「…は？なにこれ」
それは、とても可愛らしい布に包まれた、１つの箱らしき物だった。
「…そ、その…ホラ、最近たまに教科書とか見せて貰っちゃってるからっ…お礼…？ってゆーか…？まぁ……そ、そんな感じ…」
たまに…だと？
いや、今突っ込むべきはそこではない。尋常じゃないくらい真っ赤な顔してそう言い切った相模は、すごい勢いでプイッとそっぽを向くとそのまま着席して、なんとそのまま弁当箱を広げだしたのだ。
その相模の弁当箱は、俺の目の前に置かれた謎の箱と同じ布で包まれている。

――謎の箱…いや、これは間違いなくアレなのだろう。ここで無駄に自分を誤魔化そうとしたって、そんなのただの茶番だろ…。
相模は一切こちらを向かずに弁当を食べ始めると、まるで何かの言い訳でもするかのようにぽしょぽしょと呟き始める。
「きょ、今日さぁ…ウチの友達、なんか他のクラスの子と約束あるらしくてさー…し、仕方ないから今日は１人で食べてる、みたいな…？」
隣人に気が行ってしまっていて気が付かなかったが、そういや確かにいつも相模と一

緒に居る連中が教室に居ない。
「あと、なんかお礼とか言ってもいつも飴ばっかじゃ、ウチのプライドが許さないし…？あ、あとホラ、…あんたいっつもパンじゃん…？だからまぁ、たまには米くらい食べたら…？って…か、感じ…？」
なんか全て疑問形で慌ただしく捲くし立ててくんなこいつ…。
「い、いやしかしだな…お前にこんなもの恵んでもらう謂われがだな…」
「……」
あ、これまたあかんやつや…。こいつずりーよ…。
「…じゃあ、いいや。…食べないんなら、そのまま返してくれればいいから…ウチの夜食にでも、する…から」
なんなんだよもう…これで俺が折れちゃうまでがワンセットなの？
やれやれ…と頭をがしがし掻きつつも、こうなってしまっては俺の負けですはいはい認めますよ。
「あっ…」
いつものごとくシュンとしちゃった面倒くさい相模だが、黙ってお弁当包みを解きだした俺を見て嬉しそうに声を漏らす。

そんな相模からの緊張の視線をガンガンに受けつつ、お弁当包みの中からひょっこり顔を出したこれまた可愛らしい弁当箱の蓋を、少しだけ震える手でそっと開けてみた。

「おお…」

「……っ!!」

なんだかちょっと恥ずかしそうな相模からの熱い視線の中、ついに封印から解き放たれた箱の中から出てきたのは、……うん。正直に言ってしまえば、多少不恰好なおかずが所狭しと並ぶ弁当だった。

多少焼き過ぎだったりいびつな形だったりする卵焼きやハンバーグ等々。

一目見て「スゲー美味そう」とはお世辞にも思えない弁当ではあるのだが、逆にこの慣れて無い感がなんとも味わいがあり、なんつーか…一生懸命さがヒシヒシと伝わってくるというか、冷めきった弁当のはずなのに、なんだか温かい。

「け、結局食べんなら、始めっから有難くいただけっつーの…!バーカ…」

弁当の蓋を開けるまで、とんでもない不安感と緊張感を漂わせていた相模なのだが、俺が食べるのだという事を確認出来た途端に、得意の悪態を吐いて視線を正面に戻す。

正面を向いたあとも相変わらず小声で「ったく…」「マジムカつく…」とかボソボソ文句言いながら自分の弁当を食べ始めたお隣さん。

でもね、「もうそっちなんて全然気になりませーん」みたいな態度でおかずを口に運ん

でるみたいに装ってるけどさ、言っとくけど全然バレバレだからね？俺が一口目を食べ始めんのをソワソワと気にしてんの。

「…じゃあ、その……頂きます」

「うん…」

そして俺はいびつなハンバーグを口へと運ぶ。

やめて！気にしてないフリしてるくせに、そんなにガン見しないで！こんなに緊張感のある食事初めてぇ！

ついには口に放り込まれたハンバーグをむぐむぐと咀嚼してみる。

多少焦げちゃってて舌触りはよろしくないのだが…。

「あ、普通に美味い」

見た目や舌触りはよろしくなくても、味に関して言えば十分及第点である。なんで俺こんなに偉そうな上から目線なのん？

俺の口から出た褒め言葉なんだかなんだか良く分からないそんな一言に、お隣さんが不満そうに噛み付いてきた。

「…は、はぁ？普通にとか酷くない？マジ有り得ないんですけど。てかウチが作ったんだから、美味しいのなんて当たり前だっつーの。バ、バカじゃないの…？」

そうぶつくさ文句を言いつつ、こちらを一切見ないで自分の弁当を食べ進める相模の

横顔は、そんな悪態を吐いているとは到底思えないようなニヤケ面だったのは、武士の情けで見なかった事にしてやろう。

その後も2人して黙々と食事を続ける俺と相模。

会話するわけでもない。机がくっついているわけでもない。

一緒に昼飯を食べているというよりは、個別にボッチ飯をしているという風情の2人。

隣同士で個別にボッチ飯をしているというのに、食べている弁当は一緒という奇妙な絵面ではあるのだが、意外と悪くないかもな。

「…あ、比企谷」

そのとき不意に相模が語りかけてきた。

「あん？」

チラと横目で一瞥すると、相模はなんとも気まずそうにぽしょりとこぼす。

「…ご、5限の歴史なんだけどさ、教科書忘れちゃったからまた見せてね。…それ、今日の分のお礼って事で…」

「は？」

いやもう開いた口が塞がりませんよ。なんで教科書忘れんのに他人の弁当作ってく

んだよ。
それもう忘れるの前提で、先にお礼という名の賄賂を準備しといたって事じゃねーかよ…。
唖然としている俺に、相模はさらにこんな謎の契約を勝手に押しつけて、あとは知らん顔で弁当をむぐむぐと食べ進めるのだった。
「あー、あとさ……どうせ比企谷って、雨の日の昼休みは肩身の狭い思いして教室で食べるじゃん？…だからま……隣人のよしみで、しょーがないから雨の日はこうやって隣で食べてあげてもいいけど？…あと、どうせ自分の作るついでだし、あんたのも作ってきてあげる。教科書のお礼って事で」
…ったく、知らん顔してるくせに、その耳の色はマズいんじゃないの？

――俺と隣人の不思議な交流。
朝夕の挨拶、教科書の閲覧許可、あとはお礼の飴玉。
そしてこうして、今日からさらに不思議でさらに謎の交流が追加されたのだった。
それは、お礼の飴じゃなくて、お礼の雨の日のお弁当。

回顧と相模さん

一口、また一口と、むぐむぐおかずを咀嚼する隣人。

ハンバーグに卵焼き、唐揚げ、タコさんウインナーと、何かしら口に放り込む度にウンウン頷くその姿に、ひとつひとつをちゃんと味わってくれているのであろう事が窺えて、ついつい口元が緩んでしまう。

大丈夫だよね？こんなみっともないニヤケ面、こいつに見られてないよね？

今まで料理なんかした事が無かったウチだけど、この日の為に何度も何度も練習を重ねて、いくぶん不恰好とはいえ遂にこうして形になったお弁当を、心から食べてもらいたかった男の子にこうやって味わってもらえて、さらに美味いと言ってもらえたって事は、本当に天にも昇ってしまうくらいの喜びなのだ。

まぁ『普通に』が余計すぎてやっぱムカつくけどね。ムカつきすぎて、また顔がニヤケちゃうっつうの。

本当にこいつはどこまでも素直じゃない。こういうヤツだからこそ、ああいう形で他人に手を差し伸べてしまうのだろう。その為に自分が痛い思いをしてしまう事など厭わずに。

――あれはそう。2学期の終わり。

2年生になって2度目の終業式を迎えたあの日、ウチは比企谷に恋に落ちたのだ。決して実るはずのない悲恋に落ちてしまったのだ。

＊

2学期の終業式。体育館で校長のつまらない長話に耳を傾けながら、ウチは今日もチラチラとある人物に視線を向けていた。

ウチには今、とても気になる男子が居る。気になるとはいっても、それは嫌悪の対象であり憎むべき相手。ウチの華やかだったはずの高校生活を台無しにしてくれた最低の男。

あいつのせいで全校生徒の前で大失態をやらかしてしまった。大恥をかかされてしまった。

本当に大嫌いで本当に憎い相手のはずなのに、ウチは体育祭の後くらいから、気が付くとあいつを目で追っていた。

――ウチは体育祭で犠牲になった。ウチが運営委員会で泣き叫んで恥を晒す事によって、崩壊寸前だった委員会がギリギリのラインでまとまる事が出来た。

あはは…犠牲だなんておこがまし過ぎるっての。あれはウチが色々とやらかしてし

まったが為に起きた自業自得、因果応報。
それでも敢えて犠牲などと言ってみたのは、自分がその立場に立ってみて初めて気が付けたからだ。文化祭でのあいつの行動の意味を。
いや、あの時点ではまだきちんと気付けてた訳じゃない。なんなら今だってちゃんと理解なんて出来てない。
ただ、何となく頭の片隅でモヤモヤしてる思考の中で唯一理解出来てる事は、あの文化祭で比企谷が犠牲にならなかったら、たぶんあの文化祭はとんでもない事になってたんだろうな…っていう漠然とした思いだけ。
でもそれは単なる偶然のはずなのだ。比企谷が最低の事をして、自業自得で犠牲になって、それがたまたま文化祭にとっての良い方向に進んだだけのはずなんだ。
だからウチが比企谷を嫌いな事には何一つ問題がない。
ウチは自分にそう言い聞かせながら、今日も体育祭以来なんとなく日課となってしまっていた比企谷ウォッチングに勤しむのだった。

――そんな終業式も終わり、学校をあとにしようと校門をくぐった時だった。
「さーがみさんっ！お疲れさまー」
「…え？」

不意に背中から掛けられたふんわりとした声。
その柔らかな声、優しい雰囲気は、わざわざ振り向かなくてもその声が誰の物なのか、ウチに如実に教えてくれていた。
「こ、こんにちは。…お疲れさまです、城廻先輩…」
城廻めぐり元生徒会長。
苦いあの思い出。比企谷と奉仕部、あの人達と共に常に中心に居た、ウチにとっては容赦なく深く傷を抉ってくる、とても優しい先輩。
＊
――明日から冬休みだし、私たち3年生は3学期に入ったら殆んど学校に来なくなっちゃうんだ～。だから帰り道でせっかくこうしてご一緒出来たんだし、どこかでお茶でもしていこうよ～――
そんな誘い文句で、ウチはあえなく捕まってしまった。
こんなに物腰の柔らかな優しい女性なのに、こういう時は有無を言わせぬ何かを持ち合わせている。
さすが元生徒会長。やっぱウチみたいな一般人とはどこかが違うんだろうな…。
学校からの最寄り駅、適当なカフェでお茶をするウチと城廻先輩。

ウチは先輩と何を話せばいいんだろう。てかなんでウチを誘ったの？

城廻先輩がウチをあまり良く思っていないことくらいは理解している。

そりゃそうだ。生徒会活動をとても大切にしていたこの元生徒会長からしたら、文化祭と体育祭を滅茶苦茶にしかけたウチは、無能で無力で無責任のどうしようもない後輩のはずだよね。

こうしてニコニコとウチに話し掛けてきてくれること自体が不思議なくらいなんだから。

だからこそ分からない。元来の優しさで、こんなウチにも分け隔てなく接してくれる素敵な人だってことは分かるけど、でも…それでもわざわざウチをお茶に誘うだなんて、とてもじゃないけど考えらんない。

…唯一、もし唯一考えられる理由があるとしたら、それはたぶんウチにとってあまり好ましくない会話をしたいから。

あの文化祭や体育祭をウチに振り返えらせて、反省を促す為。たぶんそれこそがこの先輩の優しさ。

席に着いてからずっとニコニコと世間話をしているものの、未だ核心に触れてこない城廻先輩に内心緊張しつつ、そんなどうでもいい世間話に相槌を打ち続けている時間がただただ過ぎていく。

ウチの考えすぎなのかな？このまま世間話だけで終わるのかな？なんて、気持ちが弛緩しかけていた時だった。

ホットココアを一口飲んでふぅと深く息を吐いた先輩が、不意に真剣で哀しげな表情を向けてきたかと思うと、ガラリと雰囲気を変えて核心を突く。

「あの、ね…？相模さん。いきなりこんなこと言っちゃってゴメンね。…たぶん私がこれから話すお話は、相模さんにとって、とっても辛いお話だと思うの。…でも、私は先輩として、元責任者として、そして……相模さんと同じ1人の加害者として、ちゃんと話しとかなきゃいけないって思うんだ…」

「……え」

やっぱりそうか。城廻先輩がウチにとって辛いお話と言う以上は、それは間違いなく文化祭と体育祭でのウチの失態の話なんだろう。うん、それは予想通り。

…でもなんで？ウチと同じ加害者って、どういうこと…？

緊張で強張るウチの顔を見ながら、城廻先輩は哀しそうな笑顔を浮かべる。

その弱々しい顔は、自分への失望、怒り、悲しみ、後悔、そんな負の感情がありありと窺えるものだった。

「…比企谷くん」

先輩がぽしょりと呟いたその名前に、ウチの心臓はドクンと飛び跳ねる。口から飛び

出ちゃったんじゃないかと思ったほどに。
「…比企谷くんのお話なんだ。もしかしたら…もしかしたらなんだけど…、私から比企谷くんのお話をする事に、相模さんも心当たりがあるんじゃないのかな…」
「……は、い」
ゴクリと喉を鳴らして力なく首肯するウチを見て、「そっか」と頷く先輩。
そして城廻先輩は語り始める。自身の後悔の念を。

「…私ねー、あの文実の時、比企谷くんにすっごい期待してたんだ～。日に日にバラバラになってく文実で、いっつも面倒臭そうにしながらも、なんだかんだいって一番一生懸命お仕事をしてくれてた比企谷くんの事、すっごく頼もしく思ってたし、こんな後輩が居てくれるんだなぁって、すっごく嬉しかった」
あの会議室での毎日を思い出してるみたいに、城廻先輩は遠くを見ながら言葉を続ける。
「それなのにあのスローガン決めの時の比企谷くんの発言で、私…ガッカリしちゃったの…もっと真面目な子だと思ってたのにな、って、比企谷くんに言っちゃった」
辛そうに顔を歪める城廻先輩の目尻には、うっすらと光る物が溜まっている。
「…でね？…あのエンディングセレモニーの後にね、私はもっと酷い事を言っちゃった

の。君は最低だねって」

エンディングセレモニー。ウチの最低最悪な思い出。

そしてその裏で城廻先輩は、比企谷にそんな事を言ってたんだ。

「…ホント駄目駄目な先輩だよね、私。何にも知らなかった癖に表面だけしか見ないで、あんなに真面目な子にあんな心ない事を言っちゃうなんて……ホントは私がもっとしっかりして、私が比企谷くんがしたみたいにあの場をまとめなきゃいけない立場だった癖に、何にも知らずに彼1人を犠牲にして……！」

――もうここまで聞けば嫌でも分かってしまう。城廻先輩がウチに何を言おうとしているのか。

あの体育祭以来、ウチが密かに考え続けていた事だから。

そして城廻先輩は言う。苦しく潤んだ瞳で、苦しい胸の内を。

「…相模さん。私達はさ、比企谷くんに助けられてたんだよ」

＊

ああ、やっぱそうだよね。そうだろうなって思ってた。

でも認めたくないから、認めちゃったらウチのチンケなプライドが傷ついちゃうから、だから気が付かないように自分を誤魔化してただけなんだろう。

もしかしたら、誰かにこうやって指摘されるのを、心のどこかで待ってたのかもね。

なんにも言わずにただ俯くウチを見て、城廻先輩はキョトンと首をかしげる。

「もしかして…相模さんは、気が付いてた？」

「…あ、いえ。気が付いてたというよりは、城廻先輩のお話を聞いて、今ようやく…理解出来たって、感じです…」

すると城廻先輩は両手をポンッと合わせ、優しそうな笑顔で感嘆の声を上げる。

「そっか。相模さんは凄いね！ちゃんと自分で気付けてたんだね…。私なんて、文化祭のあとに1人でガッカリしてたらはるさんに怒られちゃったんだから。「あの程度の事も分からないなんてめぐりもまだまだだね～。ま、お姉さんに言ってあげられるのはここまで。あとは自分の目で見て自分で考えてみな？」って。だから私はまた奉仕部に依頼を持ち掛けたの。もう一度比企谷くんを近くで見たかったから。そして体育祭運営を一緒にやって、ようやく気付く事が出来たんだー。……たぶん私じゃ、はるさんが言ってくれなかったら分からず仕舞いだったんじゃないかな…」

そう言う城廻先輩は、本当に心から自分に失望してるって感じだ。

でもそんなこと無いです。城廻先輩は自分の事をウチと同じ加害者って言うけど、あの件での加害者はウチ1人。先輩はウチの被害者でしかないです。

比企谷に対して罪悪感を抱いてそんなにも胸を傷めているのも、それはウチからの被

害です…。

「…だからね、私は比企谷くんにちゃんと謝ろうって思ってるんだっ。卒業式のあと比企谷くんの所に行って、そしてお話するの。…あの時は本当にダメな先輩でごめんなさいって。そしてあの時は本当にありがとうねって。……でもね、もっと自分を大切にしなきゃダメだよ!?って、ちょっとだけ怒っちゃうの」

そう言って城廻先輩はようやくこの人らしい笑顔を見せてくれた。

心の底から謝罪するのに、心の底からお礼を言うのに、それでも自分を大切にしない比企谷を叱るってのが、なんとも城廻先輩らしい優しさだよね。

「だからね、いつか相模さんが気が付いた時に後悔しちゃわないように、ちゃんとお話しておきたかったの。比企谷くんの不器用な真面目さと優しさを。…ふふっ、でも余計な心配だったね。私なんかが言わなくたって、相模さんは自分でちゃんと分かってたんだもんねっ」

そんな嬉しそうな城廻先輩の微笑みを向けられて、ウチは胸が痛くて堪らない。

――そんなこと無いです、城廻先輩。

ウチはなんとなく気付いていながらも、自分のチンケなプライドを守る為に見てみぬフリをしてた卑怯者なんですから。

そんなに優しい微笑みを向けてもられるような資格は、ウチには無い…。

そして胸が痛くて堪らない理由がもうひとつだけ。

自分のチンケなプライドを守る為に誤魔化してた気持ちを自覚してしまったから。

たとえ比企谷がどんな気持ちでウチを救ってくれたのだとしても、いや…別にウチの為なんかじゃなくて、ただ文化祭を、雪ノ下さんを助けたいって思ってただけなのかも知んないけど、それでもやっぱりウチからしてみれば、あいつは間違いなく捨て身でウチを救ってくれた、腐り目だけど素敵な白馬の王子様なのだ。

――そう。城廻先輩に自覚させられてしまったこの瞬間から、ウチは恋に落ちたのだ。決して実るはずのない悲恋に落ちてしまったのだ。

…本当は、もっとずっと前から恋してた癖にね…。

＊

あの終業式から2週間。ウチは冬休みのあいだ中、ずっと比企谷の事ばかり考えていた。

クリスマスも大晦日も、年明けもお正月も、ウチの頭ん中はずっとあいつの事ばかり。

ウチは……一番恋なんかしちゃいけない相手に恋をしてしまった。恋なんてする資

格のない相手に恋してしまった。
出来ることなら謝りたい。全部謝って全部吐き出して、そして……ありがとうって言いたい。
でも…ウチにそんな度胸なんてあるわけ無いよね。
謝る？ありがとう？…バッカじゃないの？そもそも話し掛けられるワケないっての…。
ウチが話し掛けたら、比企谷はどんな嫌な顔するだろう。どんな嫌な態度を取られるだろう。
それを想像しちゃったら、ヘタレのウチには声なんて掛けられるはずがない。
文化祭の時とおんなじ、体育祭の時とおんなじ。どうせウチはまた逃げ出すだけに決まってる。

そんな不毛な思考に囚われていたウチの冬休みはあっという間に過ぎ去り、気が付けば今日からもう新学期。
好きだって、恋しちゃってるって自覚出来てから、初めて比企谷に会えるんだ！
そしてそんな比企谷に話し掛ける事も出来ずに、また1人バカみたいにこっそり眺め続ける日々が始まるんだ…。

なんだよ、この落差、なんだよ、この酷すぎる悲恋、あんまりだよ…。

…でもま、ウチにはこんな惨めな末路が相応しいんだろうね…。自業自得、因果応報。

自嘲気味で卑屈な笑みを浮かべながら、ついに3学期を迎えたウチを待ち構えていたのは、どうやら想像してたよりもずっと好きらしい、久しぶりに見た比企谷の横顔と、そしてまさかまさかの席替え。

本当にまさか過ぎる。まさか今さら席替えを行うなんて。

でも席替えを言い渡されてから、ウチの思考はさらに比企谷で一杯になる。

――もし比企谷の近くになれたら、もし比企谷の隣の席になれたら、どれだけ嬉しくて…そしてどれだけ切ないだろう。

いや、いつまでいじけてんのよ相模南！

もし！もしも奇跡が起きて比企谷の隣になれたとしたら、その時は頑張ろう。比企谷に話し掛けてみよう。

いつかあの時の謝罪が心から出来るように、あの時のお礼を心から言えるように…！

別にこの切ない恋を実らせて下さいなんて言わないから、だから神様、お願いします！

そんな『もし当たったらなに買おう！』なんていう想像してる時が一番楽しい、当たりもしない宝くじに夢見てる人のように、ウチは担任お手製のボックスをジィっと見つめる。

――あっ…比企谷の順番だ。…なんでだろ？２学期に毎日目で追ってた時よりもずっと格好良く見えてやんの、ウチ。…ああ、やっぱ、こいつ好きかも。…あれ？くじを見た瞬間に目がどんよりと濁っていったぞ？そんなに嫌な席だったのかな。あ、戸塚くんと離れちゃったからか。ホントこいつ戸塚くん大好きだよね。そこは流石に引くかも。まぁでもやっぱ好きだけど。

――ヤッバい、ついにウチの順番だ。どうせ近くになんて…ましてや隣になんてなれるはずもないのに、なにこんなに馬鹿みたいに緊張してんの？ダサすぎだっての。…ア、アレ？この数字って窓側後列の方だよ、ね…？さっき比企谷の奴、死にそうな顔して窓側後列の方向に向かってったように見えたけど、も、もしかして意外と近くだったりして…!?

――この新たな学期、新たな新年を共に過ごす事になった、ウチの新たな居場所。

その席へと辿り着いたウチの心臓がヤバい事になっている。どうしよう、バクバクと騒がし過ぎて周りの音が何にも聞こえてこない。

顔が…身体が燃え上がりそうなほどの熱を帯びて全く動かない。

情けない事に、身体が全く動かなくなってしまったヘタレなウチでは、残りの3ヶ月弱を共に過ごす事になる新たな隣人の愕然とした視線から、しばらくのあいだ目を逸らす事が出来ずにいたのだった。

……神様、お願いしといてなんだけど、ウチ、こんなんじゃちょっと頑張れないかもしんないです…。

心配事と相模さん

「あー…身体痛てぇ」

ホームルームも終わり、部活へと向かうために立ち上がった俺がボソリと呟く。

昨日のマラソン大会はマジでキツかった。葉山の野郎速すぎだっつの。

あのあとにあれ以上のペースで全員ごぼう抜きとか、どんだけ化け物なんだよ。

まぁなんとか依頼はこなしたものの、元々だらだら走るつもりだったマラソン大会を１２０％の力で走る羽目になった為、身体中が軋むように痛くてたまらん。

１２０％っつっても半分までだけどね。

「あ…」

すると重々しく立ち上がった俺を見て、お隣さんが何かを言いたそうに小さく声を漏らした。

普段とはちょっと違う弱々しいその声に訝しげな視線を向けてみると、なんだか物凄い遠慮がちな相模が俺を見上げていた。

「…あ、や…」

どうしたんだ？コイツ。てかこんな感じちょっと久しぶりだな。コイツがこんなに

遠慮がちな態度してるのなんて、隣人になった当初以来な気がする。
「…どうかしたか」
「あ、んと…」
まごまごと慌てる相模は、目を泳がせまくってあはは～…と卑屈に笑う。
マジでどうしたコイツ。
「バ、バイバイ……」
「へ？」
蓄めに蓄めた末にそれ？
いやだって、一昔前なら有り得なかった相模からの別れの挨拶も、今や毎日行われるやりとりだろ。
なにをそんなに言い淀む必要があったんだよ。
――とはいえ、たぶんコイツは他に何か言いたい事でもあるのだろう。ひと月の付き合い（隣人付き合い）の経験は伊達じゃない！
だから俺は相模にこう言ってやるのだった。
「お、おう……また明日な」
挨拶返すだけかよ。

＊

まぁ相模が何かを言いたそうにしていたのは良く分かる。
だってあいつ、俺が教室出るとき頭抱えてたし。
だが所詮は俺と相模の謎関係。どんなに毎日のように教科書見せようとも、何度か弁当貰って一緒にランチタイムを過ごそうとも、それでも未だに俺達の間には会話らしい会話は殆ど無い不思議な関係なのだ。
どんなにあいつがおかしな態度だろうとも、あいつ自身が言ってきてくれなけりゃ、俺から詮索なんて出来るわけないじゃない。
いやホントすげー気になってますよ?でもやっぱり恥ずかしいんで無理ですごめんなさい。
と、我が校の小悪魔生徒会長が脳内に降臨しながらも、俺が向かうのは昇降口。
部活じゃないのかよって?
いやだって部室行ったら雪ノ下が「昨日の疲れも残っている事だし、今日はお休みにしましょうか」って顔面蒼白で言ってきたんだもん。
君どんだけスタミナ値低いんだよ。昨日最後まで走ってないよね?
まぁ正直な話、俺としても願ったり叶ったりな展開ではある。なんか由比ヶ浜も三浦達と用事があるみたいだしね。
ま、なんにせよ突然休暇になってラッキーって感じだな。身体痛いし、今日は早く

帰ってソファーでのんべんだらりと過ごそうぜ！
そう意気揚々と昇降口に到着した時だった。
「あっ」
そこで掛けられた驚きと喜びを孕んだ声。
見ると、ちょうど帰宅するところだったのだろう件の相模が、下駄箱から靴を取り出している所だった。
＊
「…おす」
モジモジして「おす」とか言う女の子って可愛いよね。オラわくわくすっぞ！
「…お、おう。いま帰りか」
「うん…えと、比企谷、は？…部活行ったのかと思ってたんだけど…」
「ああ、部室行ったら今日は休みなんだと」
「そうなんだ」
そこで打ち切られる会話。
ここ最近はたまに話すようになったものの、やはりこうした不意の邂逅は苦手なんだよなぁ…。
身構えておけるか否かってのは、コミュニケーションが苦手な人間にはかなりでかい

要素らしい。
と思ったらそんなこと無かった。ソースはコミュニケーションが豊富そうな目の前の相模。
こいつもどうやらそういうのが俺並みに苦手みたいで、髪を弄ったりモジモジしたりと、この不意の邂逅に結構テンパっているらしい。
なんだよ、コミュニケーション豊富なヤツも俺と大して変わんないんだね。八幡安心！
…ふむ、このままでいたらどちらも幸せにはなるまい。
そう考えた俺は、とっととこの場から離脱する事にした。
「…んじゃ帰るわ」
靴を履き替えて相模に帰宅を伝える。
俺が空気を読める男で良かったね。感謝しろよ、相模。
「そだね」
そのまま振り向きもせずに昇降口を出て駐輪場へと向かう俺なのだが、あれ？なにかがおかしいよ？
なにがおかしいって、背後に気配を感じる辺りがとてもおかしい。
立ち止まったりせずに恐る恐るチラと振り向いてみると、なんか相模さんがとてとて

と付いてきてますね。なんでー？

ああ、コイツがどこら辺に住んでるとかこれっぽっちも興味が無かったから知らなかったが、もしかしたら相模も自転車通学なのかな？だったらしょうがないよね。

なのでとてとてとくっついてくる相模など気にせず、俺は一路愛車を停めているポイントへと向かうのだった。

＊

「……いやなんでだよ」

「なにが？」

きょとんと首かしげて「なにが？」じゃねーよ。なんでお前、俺がチャリの鍵を開けてんのをピッタリと後ろで待ってんだよ。

「…何してんの？お前」

「は？何もなにも、あんたが鍵開けてるから待ってんじゃん」

そりゃそうだよね！ごめんごめん！

いやいや違うから。

なんで待ってんだよって話でしょ？

「そうじゃなくてな……お前も自分のチャリんとこ行けよ」

「は？」

え？なんかおかしなこと言ったかな、俺。なんでそんなバカを見るような目で見られてるのん？

「ウチ別に自転車通学じゃないんだけど」

…ああ、そりゃバカを見るような目で見ますよね。だって、存在しない物の所に行けって指示されるんだもの。

「いやいや違げーから。じゃあなんでお前駐輪場に来てんだよ」

「…っ!?」

すると相模はビクッとして、所在なさげに髪を撫で始める。

俯いた顔を真っ赤に染め上げたコイツは、唇をとんがらせて不満げに小さく呟く。

「だって…たまたま昇降口で顔合わせたんだから、一緒に帰るでしょ…普通」

そうなの？リア充の間ではそういう習わしがあるものなの？そういう経験が無いから知らないんだけど、それが普通なのか。

もちろん断ってすぐさま帰りたい所ではあるが、俺のような世間のつま弾き者がリア充様の習わしに逆らえるはずなどないのだ。

「……さいですか」

そう答える事しか出来ない俺に、相模はなんだか恥ずかしげに髪を撫でながらも、「ん」と嬉しそうに返してきた。てかなんでさっきからずっと唇とんがりっぱなしなん

だよ。
…あーもう、コイツが相模じゃなかったら、確実に勘違いして告白して翌日クラスで晒し者になってるとこだったわ。晒されちゃうのかよ。
そんなちょっとだけ可愛……いくもなくもなくもない相模と、並んで校門まで歩き始める。
ん？歩くの？なんで俺チャリ通なのに歩いてんの？
「……てか一緒に帰るっつっても、チャリも無いのにどうやって一緒に帰んだよ」
なんなの？二人乗りとかいくらなんでも恥ずかしすぎて無理だからね？
そもそも俺の後ろは小町の指定席だし。
「そ、そんなの駅まで一緒に歩けばいいだけじゃん。いちいち当たり前のこと聞かないでくんない？バ、バカじゃないの……？」
「ああ、そう……」
…リア充ってのは面倒くさい人生送ってんのね。
チャリで来たのにわざわざ歩かなきゃなんないとか、どんだけ時間を無駄に使わなきゃなんないんだよ。タイムイズマネーって名言知らないの？
やはりボッチは常人よりも効率的に進化した優れた生命なのか。
つーか前々から気になってたんだけど、なんでコイツって俺を罵倒したあとに頭を抱

えるのん？たまにぽしょりと「またやっちゃった～……！」とか聞こえてくるし。
しつこいようだけど俺は難聴系じゃないから、ボソボソ呟いたって結構聞こえちゃってんだかんね？

＊

そんなこんなで、駅までの短い距離とはいえ、なぜか相模と一緒に帰る事になってしまった帰り道なのだが……えっと、なんなんすかね…。
一緒に帰る事を強制してきた相模が、校門を出てからもひとっことも喋らないで俯いたままなんですよね。
これって一緒に帰る必要なくない？
いやまぁガンガン話し掛けてこられても対応できなくて困るから結果オーライっちゃ結果オーライなんだけどね。
だがそれだけならまだいいのだ。コイツとはいつも一緒に居ても（語弊がありますね。あくまでも教室内で隣同士って話ですよ？）こうして一切会話のない事なんて良くあることだし、最近ではそれは不思議と気まずいものでは無くなって来ている。
認めたくはないが、コイツと無言で教科書を見てる時とか無言で弁当食ってる時とかは、まるで部室で文庫本読みながら美味い紅茶すすってる時のような、暖かく安らいだ空気を感じる時さえある。なんでかは知らんけど。

だが今はまったく安らがない。超気まずいまである。
だってさぁ…さっきから相模が尋常じゃなく落ち着かないんだもの。
何か話し掛けてこようかとモジモジしては、あうあう言って俯く。さっきからそのループがずっと視界の端に入ってくるこの状況で、心が安らぐはずがないのである。

――あぁ、面倒くせぇ…何か話したい事があんならとっとと話してこいよ…。
と、そこでふと先程の教室での光景が頭をよぎった。
そういやコイツ、俺が部活行こうと立ち上がった時も、こんな風になにか言いたげにモジモジしてたっけか。
あの時は恥ずかしいからこっちからは何も聞かなかったが、これはこっちから聞いてやった方がいいのかしらん？
くっそ…心の底から聞きたくないんだけど、正直このまま駅まで歩くのはかなりキツい。…はぁ、仕方ねぇなぁ…。
「…なぁ」
「…っへ!?」
いや、いくらなんでも驚き過ぎだろ…。そりゃ俺の方から話し掛ける事なんてかなりレアだけども。

ドギマギと目を白黒させてる相模を無視して、俺は質問を続ける。
「…あー、なんだ…、なんか、言いたい事とかあんのか？」
「っ！」
ベベベ別に言いたい事なんてっ！……とかなんとかボソボソ言いつつ、相模は足を止めて固まってしまう。
どんだけ嘘が下手なんだよ。
このままフリーズしちゃって、さらに貴重な時間を潰してしまうのか…と嘆いていると、俯いたままではあるが、意外にも相模は早々に口を開いた。
「…べ、別に大して聞きたくもないし、気になってもいないんだけど…」
おん？結局話すのかよ。だったら最初っから話せよウゼェな。
「ま、まぁせっかくだし、聞いといてあげる…」
「あ、ありがとうございます…？」
なにこれ？なんで俺お礼言ってんの？
「あんた、さ…、そのぉ……け…」
毛？ここでまさかのムダ毛処理事情トーク？
俺男の子だからそういったアドバイスとか出来ないよ？てか男の子だから、あんま女子のムダ毛処理事情とか聞きたくないんだけど。

ってそんなこたぁ無い。

そのあと相模が紡いだ言葉は、俺の予想とは１８０度ほど違っていたのだった。

「けっ…ケガとか、大丈夫なの……？」

「は？」

＊

ケガ？なんだケガって。

コイツなんの話してんだ？

「…えと、なんの話？」

あまりにも斜め過ぎた相模からの質問に間の抜けた質問返しをしてしまった。

そんなポケ～ッとした間抜け面を晒す俺に、相模はなんとも気まずそうに目を泳がせて弱々しく呟く。

「だ、だからさぁ…き、昨日のマラソン大会でのケガよ…。だって比企谷、かなり最後の方にようやくとぼとぼゴールしたかと思ったら、足引きずって保健室に歩いてったじゃん…？だ、だから……平気、なのかな～って…」

え、なにコイツ。あれだけずっと何か言いたそうにモジモジしてたかと思ったら、言いたい事ってソレなの？

てかそんなとこ見られてたのかよ…。

――アホか。…まさかあの程度の事を気にしてくれてたのかよ。てかケガ気にしてんなら駅まで歩かせんなよ…バカだなコイツ。

それにしてもたかが隣人というだけの間柄なのに、どんだけ心配性なんだ？コイツ。

こんなに良い奴だったっけ。バカだけど。

だから俺は、上目遣いで不安そうに見つめてくるバカで心配性なこの隣人に、満面の笑顔でこう言ってやるのだ。心配すんなって、大したことないぞって。

「…おう、大丈夫だ。別にケガ自体はなんてことない。ま、身体中筋肉痛でバッキバキだけどな」

そんな俺の優しく素晴らしい神対応に相模は…。

「ぷっ！あはは！」

笑った。もう超爆笑。

…あっれぇ？そこは「良かったぁ！」って笑顔を返してきてくれるトコじゃないのん？

「なにそれオヤジ臭っ！つうかなんでそんなキモいドヤ顔!?ホント比企谷って笑えるよ

ねー！」

そうでしょうそうでしょう。どうですかこの八幡の見事な道化っぷりは。

ふはははは！不安そうな女子に笑顔を取り戻させる為に、あえてピエロを演じてやったんですよ（白目）

…ちくしょう、俺の満面の笑顔ってキモいドヤ顔なのね…。

「大体さぁ、なに比企谷のクセに葉山くんに張り合っちゃってんの？比企谷なんかが敵うはずないじゃ～ん。身の程知らず過ぎー！」

引きつった半目になって睨む俺を横に、相模は未だに腹を抱えて笑い続ける。楽しそうでなによりです。

…ったくよ。心配してくれてたんじゃねーのかよ。

あまりにも不安そうに心配してくれてっからって、無駄に気を使っちゃって損したわ…。

しかし、はぁ～…と深い深い溜め息を吐いてガシガシと頭を掻いていたのだが、しこたま笑ってようやく落ち着いたらしき相模が、目元を拭いつつぽしょっと漏らした言葉が俺の鼓膜を揺らし、なんとも居心地悪く、なんともむず痒くなるのだった。

「……良かったぁ……」

…バッカ、だから俺は難聴系じゃねぇって言ってんだろが…。

道草と相模さん

人生初、異性との二人きりの下校。

……すいません見栄張りました。異性どころか同性とも二人で帰ったことなんて無かったです。

え？戸塚？そりゃ戸塚とは一度学校帰りにムー大寄ったことあるけど、戸塚の場合は性別を語ること自体がナンセンスだし恐れ多いんで、ノーカンてことでオナシャス。あれは一緒に下校したんじゃなくて、天使にパラダイスへと導かれたと言った方が正しいのである。

とまぁそれはさておき、そんな異性との初めての下校、その相手がまさか相模になるだなんて、一体だれが予想出来ただろうか？

…と、チラと隣を盗み見ると、未だ楽しそうにニコニコしている相模の横顔を見た俺がそんなことを思うのだった。

＊

そんな帰り道もようやく終わる。もう駅は目と鼻の先。

駅で相模と別れてしまえば、そこからは通常通り、愛するマイホームへと自転車を走らせればいいだけの話だ。

ようやく…か。ぶっちゃけた話、ようやくだなんてこれっぽっちも思ってないんだよなぁ。なんていうか、意外と悪くなかった。

結構いいもんなんだな。俺と話して笑ってるヤツが隣に居る帰り道ってのは。

ま、こんなのは今日限りの特別だ。こんなイレギュラー極まりない下校がもう終わるからといって、別段どうということもない。

べ、別に終わっちゃう事が残念だなんてこれっぽっちも思ってないんだからね！

などと一人ツンデレ劇場を開演している内に、気付けば駅前に到着していた。

朝から雨でチャリで登校できなかった、という日でもなければ、こんな時間に近寄る事などない学校からの最寄り駅。

さすが最寄り駅だけあって、駅前は結構な量の総武生で溢れている。時間的に帰宅部組なのだろう。

そこで俺はふと気付く。そういや、この状況って…ヤバくない？

どうしよう、もしも今の状況を友達に見られたら、誤解されてからかわれちゃって恥ずかしいよぅ…！

あ、からかってくる友達なんて居なかった。エリートボッチの僕には余計な心配でし

たね！

――違うのだ。そんなお決まりの自虐ネタで笑いを取っている場合ではないのだ。

これは俺だけの問題ではない。というよりは、むしろ俺などどうでもいい。

問題なのは相模だ。こいつ、俺と一緒に帰ってる所なんて誰かに見られても大丈夫なのか？

最近は悪くない間柄ではあるものの、周りから見たらやはり俺と相模というコンビはどう考えても異常だ。

なにせ絶対的な加害者と絶対的被害者の俺とこいつ。

席替えしてからこいつがあまりにも自然に隣に居過ぎて忘れそうになっていたが、俺は相模に心ない罵倒を吐いて泣かせた加害者なのだ。

そんな二人が一緒に帰ってる所など見られたら、どんな下らない噂を立てられるか分かったものではない。一時期の雪ノ下と葉山の低俗な噂などとはまた違う、下手をしたら相模に災いが及ぶ可能性のある下卑た噂になりかねない。

まぁ教室であれだけ教科書一緒に見たり、たまに隣同士で弁当食ったりしてりゃ、そんなの今更だろ…と思わなくもないが、あれはあくまでも教室内で一番目立たない、一番後ろで一番隅の席だからこそ出来る事。

伊達に高度な一人遊び大会を毎日催すヤツが現われたりなどしない、スペシャルな特等席なのだ。

ちなみに俺のとなりの相模さんは、そんな高尚な趣味は持ち合わせてないからね？

あそこで馴れ合っているだけならば（馴れ合ってるとは言ってない）誰も見ていないはずだ。うん。見てない見てない。見ていないはずだと思いたい。

しかしこの有象無象の目がある駅前という空間ではそういうわけにはいかない。

文化祭から続く俺たちの暗い関係を知っている人間は言うに及ばず、仮に俺たちの関係を知らない人間だったとしても、腐ってもカースト上位を誇るルックスの女子が、腐るまでもなく腐った目のキモい男子と一緒に帰ってる所を見られるのは、こいつにとってかなりのマイナス評価に繋がる事は間違いない。

半年ほど前、由比ヶ浜と行くことになった花火大会。あの花火大会で会った相模は、俺ごときと一緒に居た由比ヶ浜を見て優越感を抱いていた。

たかだか俺と一緒に居たってだけで由比ヶ浜にあんな蔑んだ笑みを浮かべられるような相模なんだから、そんな俺ごときと一緒に帰ったらこういう事態になることくらい、きっちり計算しとけよ…。

隣の相模を見ると、やはり先ほどまでの楽しそうな笑顔はすっかりと消え失せ、緊張

と不安で表情を強ばらせ俯いていた。
　こんな人目のつく所で俺と二人で歩いているというリスクに気付きはしたものの、自分から一緒に帰ると言い出した手前、それを言い出しづらいのだろう。
　これは早く退散するべきだな。別に相模がどうなろうと知ったこっちゃないが、知ったこっちゃないはずなのだが、でも……周りから蔑みの視線を浴びて嘲笑われるこいつの姿を想像すると、正直あまり面白くない。
　だからこれは相模の為ではない。俺が気分が悪くならない為の、つまりは俺の為の行動なのだ。
「…じゃあな、俺帰っから」

　そうと決めたら即断即決行動あるのみ。
　俺はなるべく相模とは無関係な空気を装い、周りの連中から相模の連れと見られないよう気配を消してその場を去
「…ね、ねぇ比企谷」
　れませんでした。
　え？なんでこいつ話し掛けてくるのん？
　アホだろこいつ。いま話し掛けて来ちゃったら、俺とお前が連れだと思われちゃうよ

？

そんな心配を余所に、相模は耳まで赤くなった顔を俯かせたまま、俺のブレザーの袖をちょこんと摘んでクイクイと引っ張ってくる。

なにそれ可愛…いやいやそんな場合じゃないから。え、ちょっと意味分かんないんですけど。俺と一緒に居る所を周りに見られたく無かったんじゃないの…？

「あの…さ」

ゴクリ……と相模の咽喉が鳴る。

「お、おう」

次になにが起こるのか一切想像出来ない恐ろしさに、俺の咽喉もゴクリと鳴る。なにこのすげぇ緊張感。

しばらく固まる二人。マジヤバいって。注目集めちゃってね？これ。

すると相模ははぁぁ…と深く息を吐きし、ようやく意を決したのか、真っ赤な顔を俺に向け、ついに口を開いたのだった。

「…あの…その……ウ、ウチちょっとお腹空いちゃったんだけどさ、その…ど…どっか寄ってかない…？」

「……は？」

＊

えーと…今こいつなんつった？

いや、本当にしつこいようだが俺は耳聡い。だからなんて言ったのかなんて余裕綽々で聞き取れてます。

じゃあなぜ『こいつなんつった？』などと不毛な思考に陥ったのかと言えば、それはもちろん理解が出来ないからに他ならない。

お腹空いた→分かる

どっか寄って行きたい→分かる

なんでそれを俺に訊ねたのか→理解不能

「言いたい事は理解した。…で、なんでそれを俺に言うの？」

「全然理解してないじゃん!?」

思いのほか激しいツッコミが返ってきました。

だから目立っちゃうってば。

「……な、なんで聞くもなにも…あんたに合意を得なきゃ行けない…じゃん」

そう言ってまたモジモジし始める相模さん。

あ、もしかしてトイレに行きたいのかな？だからセクハラでお縄になっちゃうって

ば。
「だって、お前が腹減ったからどっか寄りたいっつーなら、好きにどっか寄ってけばいいだけの話だろ。なんで俺の合意を得る必要あんの？」
「あんたも行くかどうか聞かなきゃ寄るに寄れないでしょうが！」
「……へ？」
さらに激しいツッコミに一瞬たじろいだのだが、あまりにも理解不能な相模の台詞に脳がクリアになっていく。
ん？俺も行くの？
「えっと、俺も一緒に行くのか？」
「だからそう言ってんじゃん！てか、一緒に行く気ないんならわざわざお腹空いたなんて報告しないから！」
ああ…な、なるほどそういう事か。
そういう展開なら、そりゃ俺に聞くよね。
「すまん。その発想は無かった」
「その発想以外なくない!?」

――この幾度のやりとりでいくつか分かった事がある。

どうやら相模は俺を放課後デー…げふんげふん。放課後の道草に誘っているらしい。
俺が放課後の道草に誘われる……だと？しかも相模に……？
だってそれってあの噂の青春（笑）イベントでしょ？そんな日陰者とは無縁のイベントに、まさかこの俺が誘われる日がこようとは……しかも相模って。

そしてもうひとつ分かった事。
どうやら相模はなかなかのツッコミタイプらしい。
あっぶね！もしこれ教室でやられてたら、クラスの連中に仲良しなのかと思われちゃうとこだったわ。
教室ではツッコまれないように発言に気を付けないとね！

…しかしまさか俺が相模に誘われるとは…これ、どうしたらいいんだろう…。
「あー…っと……い、行かなきゃダメなのか？」
そこはもちろん俺である。
気を使って誘ってくれたら、迷惑かけないように体よく断るのが礼儀だよね。
だがしかし、なのだ…こいつの場合は…。
「…っ！」

やはり来たか…。そう訊ねた俺にビクッとした相模は、なんとも哀しそうに目を潤ませる。

やめて！その顔だよその顔！

そんな捨てられた子猫みたいな弱々しい眼差し向けてこないでよぅ…！

「…あ、や……べ、別にもし良かったら、ってだけの話であって……む、無理に誘ってるってワケじゃ…ない…から」

シュンと目を伏せてしまった相模。

もうそれ反則でしょ相模さん…。

「あはは…ご、ごめん、なんでもないから…っ」

「や、やっぱ行こうかなー…？つ、つーか超行きたいまである？」

くっそ…やっぱ無理だろコレ。

小町に鍛え上げられたこのオートスキル。とはいえ本当に嫌なら俺は余裕で断るだろう。

だが、シュンとしたあとのこいつの卑屈な笑顔だけは、どうしても堪えらんないだよなぁ。

多分だけど、それはちょっと昔の俺に被るからだと思う。まだ色々と諦めてなかった中学時代。そん時にクラスメイトの前で無理して笑ってた、あの気色の悪い愛想笑い

に。
「…え、マジで…!?」
そしてそのあとのこのパァッと花が咲いたような笑顔を見せられちまったら、そんなの即落ち安定ですわ。
「お、おう…別に腹なんか減ってねぇかと思ってたんだが、なんかそう言われたら小腹空いてきちまったわ」
「だ、だったら最初っからそう言えばいーじゃん……ばーか…」
なんだよ、結局罵倒されちゃうのかよ。
ちょっとだけ膨れっ面の相模だけど、その頬は今にもニヤニヤと緩んでしまいそうなほどにヒクついている。
そしてそれを誤魔化すように手でぐにぐにとマッサージ。なにそれ可愛い。
――はぁ～、たくしゃーねぇなぁ…面倒くさいけど、ここは付き合うとしましょうかねぇ。
「あ」
そこで思い出す。
そういやこいつ、こんなやりとりを周りに見られちゃってもいいのかよ？

駅前に到着した時、顔すげー強ばってたじゃねーか。
「ど、どうかした？」
「な、なぁ」
「え、な、なに…？」
「あー、なんだ……その、いいのか…？周りに総武の生徒たくさん居んだけど…」
たぶん腹減りすぎてすっかりその事を失念していたのだろう相模は、その言葉に辺りをキョロキョロと見渡す。
果たして、ようやくマズい事態であると再確認したであろう相模の言葉とは？
「は？なに言ってんの？学校からの最寄り駅なんだから、総武生がたくさん居るのなんて当たり前じゃん。あー、ビックリしたぁ。ウチてっきり、用事あったからやっぱり帰るとか言いだすのかと思っちゃったじゃん……！ホントムカつくー。……ていうか、そんな意味分かんないこと言ってないで早く行こっ」
あ、あれ？ちょっと予想してた反応と違うんですが…。
これ、あとちょっとでスキップしちゃうんじゃないの？と思えるくらいの軽い足取りで勝手に歩みだす相模の背中を眺め、俺は頭をガシガシと掻きながら思うのだ。
――先ほどの緊張で強ばった顔は、俺と一緒に居る所を見られるのが嫌だから強ばっ

てたんじゃなくて、どうやら俺を道草に誘うのに緊張してたから強ばってたっぽいな。
まったく…たかだか俺ごときを道草に誘うだけで、お前みたいなリア充がなにをそんなに緊張してんだか。
そんなことを考えながら、さっきの相模を真似るように左手で頬の筋肉をぐにぐにとほぐしつつ、あの軽やかな背中をゆっくりと追うのだった。

憩いの場と相模さん

駅前の喧騒を抜け、未だなんとも嬉しそうに先を行く相模のあとを追うように自転車を押していると、不意に相模がくるりと振り返る。

「ねぇ比企谷」

「…おう」

「……どっか行きたいとこ……ある？」

どっか行きたいとこ…？

ふむ。それはこれからどの店に入りたいのかを問い掛けてきてるのだろう。

こういう経験があまりにも少なすぎて、最初意味が分からずにポカンとしてしまった。

ちなみに〝少なすぎて〟でさえも盛りすぎなのは重々承知しているが反省はしていない。

「…相模はどこがいいんだ？」

質問を質問で返すという愚行を犯してしまうのも無理はない。なぜならこの質問は

非常に危険だからに他ならない。思い出すのはいつかのダブルデート（笑）

まぁ、いま考えればあの時の折本には悪気など一切なく、生来のからかい気質からくる、ほんの茶目っ気だったのだという事は良く分かっているのだが、少なくともあの時の俺には悪魔の質問であった。

相模は折本と違ってからかい気質では無いだろう。どちらかと言うといじめっ子気質？より一層酷くなっちゃった。

だからこそ、この質問には出来る限り答えたくない。答えたが最後、瞬時に顔を歪められて嘲笑されるであろう事は目に見えているのだ。

それ故の掟やぶりの質問返しなのである。まぁどうせアレを言われてしまうのだろうけども。

「…比企谷が居るなら、ウチはどこでもいいけど…」

はいコレ来ましたよ、必殺どこでもいいよ。

世の中には『どこでもいい』なんて都合のいい事柄などどこにも存在しない。

どこでもいいよイコール私の行きたい所を言い当ててみてよゲームなのである。その答え如何によって男のレベルを測るというゲームなのである。

なんというクソゲー。ゲームをスタートした時点ですでに詰んでいるというね。

ただ相模の答え方が、俺の想像していた答え方とは若干ニュアンスが違ったように聞

こえたのは気のせいのはず。
そしてそのニュアンス違いの答えを発した相模が、ハッとして両手で口を押さえて真っ赤になったのも、また気のせいのはず。

しかしどこでもいいよと聞かれたら、答えてやるのが世の情け。どうせ嘲られると分かっていながらも、そんな自然の摂理に逆らう事などできようか？
であるのならば仕方がない。俺が答えられる最上級の答えを持ってして、お前の嘲りを真っ向から受けてやろうではないか。さぁ、笑えよベジー…相模！
「サイゼとか…？」
「ぷっ、あはは！　サイゼね。ま、そこら辺の方が比企谷らしくていいんじゃない？」
…あれ？確かに軽く笑われたけど、別にどうという事もない程度の笑いだったぞ？
おいおいマジかよ、折本なら呼吸不全になっちゃうくらいに爆笑が取れるとこだぞ？
いや、決して笑いを取りに行ったわけじゃないんだよ？アイラブサイゼ。
「どうかした？早く行こ」
言うが早いか相模はとっととサイゼへと歩きだす。軽くスキップ気味で。
なんだ、お前もサイゼ大好きなんだな。ちょっと好感度あがっちゃうよ？
「おう…」

そして俺もそんなサイゼ好きな隣人の千葉愛に負けるまいと、千葉県民の憩いの場へと足を向けるのだった。

＊

「な、なに…？ウチ見てた…？」

「いや、別に見てねーし…」

綺麗な顔を紅潮させて、モジモジと上目遣いでそう訊ねてきた隣人…いやお向かいさんに必死で弁明を試みる。

「…そ」

「…おう」

…あれだな。普段は常に隣にいるから、チラッと盗み見てもあんま目が合う事は無いが、やっぱ向かいに座ってると見てる事がバレバレになっちゃうな。見てたんじゃん。

まぁそりゃついつい見ちゃうよね。だって異常事態なんだもん。

なんで俺、相模と二人でメシ食ってんの？意味分からん。

そう思いつつ目の前に置かれたミラノ風ドリアをひと掬い。うむ。やはりうまい。

熱々トロトロのドリアをはふはふと咀嚼し、俺はフォークにクルクルと巻き付けたカルボナーラを口へと運ぶ相模に、またもや自然と目を向けてしまう。

やっぱこいつって、なんだかんだ言って綺麗だよな。

ほんの僅かの差で三浦に選ばれなかったとは言え、一年の時は由比ヶ浜と一緒にトップカーストグループを形成していただけの事はある。まぁ間違いなく美少女の部類と言ってしまっても差し支えのない容姿なのだ。

勝ち気で強気そうな切れ長の目と形の整った鼻。そして今まさにカルボナーラを放り込もうとしている艶やかな唇。

出会いの印象が酷すぎた為に――一学期を同じ教室で過ごしておきながら八月に出会いというのもアレな話だが――きちんと見もしようとしなかった相模の顔。

加えて隣人となってからも常に隣であった為に、ほとんど正面から見る機会は無かった。

こうして改めて正面から見る相模についつい目が行ってしまっても、それは仕方の無い事だろう。

「…ねぇ、だから絶対ウチ見てるでしょ、キモいんだけど」

「だから見てねーっつってんだろが」

「…絶対見てるし」

そうぽしょりと呟いて、恥ずかしそうな顔をぷいっと横に向けると、なんかにまにましながら相模はまたもカルボナーラをフォークに巻き付けだした。

てかさ？目が合う時点でお前だって俺をチラチラ見てるって事だろうよ。

にしてもだ。サイゼに入店してから料理を注文して、料理が届いてこうして食い始めるまでの間での会話がこれだけっておかしくない？これじゃさっきまでの帰り道と一緒じゃねーか。

隣合わせで教科書見せてる時や弁当食ってる時は相模とのこういう沈黙も悪くないのだが、緊張感もあるのかもしれないが、この初めての向かい合わせという状況だとなかなかに気まずい。

一緒に道草食うってこういうもんなの？教えて偉い人！

まぁベラベラ話し掛けてこられても、やはりぼっちには対処出来ないけども。

「あの、さ……比企谷」

そんな思いが通じたのか、ようやく話し掛けてきた相模。

いや、実際は話し掛けてこられても困るんだけどな。あまのじゃく乙。

「…どうした」

「比企谷ってさ…ドリア、好きなの……？」

ほう……会話に困った時としてはいい質問だ。

現状俺達の間で会話のネタがあるとしたら、今まさに繰り広げられている食事の話くらいのものだ。

この当たり障りの無い質問が、今後の新たなるネタに繋がるかもしれない。
そうと決まれば話は早い。このビッグウェーブに乗せてもらおう。
「…おう、美味いからな」
「…そ」
会話終わっちゃったよ。どんだけ小波にして返しちゃったんだよ俺。
くっそ…またもや沈黙の食事のスタートか……と半ば諦めかけていると、意外にも相模はそれだけで終わらせなかった。
「…じゃ、じゃあ今度雨降ったら……作ってみようか…な」
まさかの弁当の話題へのシフトチェンジである。
そんな弁当の話題が出た途端、俺の心臓はドキリと跳ね上がり、顔が熱くなっていくのが分かる。
まぁぶっちゃけて言うと、未だに相模からの弁当の差し入れは照れ臭くてむず痒いのだ。
テレビから「明日は雨模様の一日となるでしょう」なんて女子アナの声が聞こえて来た瞬間から、包まる布団を求めてベッドに直行してるまである。
…だってさ? 雨の日はコイツ、一日中こっちをチラチラ見てくんだもん。すげーモジモジして。気恥ずかしいったらありゃしない。

だからちょっと弁当の話題に弱いんですよ。
マジで勘弁してくれ…照れ臭さを押さえて相模を盗み見ると、これまた恥ずかしそうにチラチラと上目遣いで俺の様子を窺ってますよこの子。
そんなに恥ずかしくなるんなら言わないで！
「…あのな、ドリアは熱々トロトロだから美味いんであって、冷めきった弁当で食ったって美味いわけねぇだろ…」
…確かに相模の厚意は有難いのだが、冷めきったドリアを食いたいかどうかはまた別問題なのである。
苦手な弁当の話題が出てしまった事によるむず痒さも手伝って、至って真面目な返答を返してしまった。
「ぷっ、バッカじゃないの？冗談に決まってんじゃん。レンジでもあったら話は別だけど、さすがに学校にそんなの作って来るわけないじゃん」
あ、冗談だったんですね。そりゃそーじゃ。
「…で、でもさ、その言い方だと、熱々でトロトロなドリアなら食べたいって事…だよ、ね…？」
「あん？そりゃまぁ美味けりゃな」
「…じゃ、じゃあ……さ」

なんだか今までに無いくらいの蚊の鳴くような小さな声で会話を続けてくる相模さん。

どしたのん？と視線を向けると、相模は耳まで真っ赤になっていた。

「……そ、それじゃ…さ。…比企谷がどうしても食べたいんなら……今度ウチの家に、食べに来ればいいじゃん…？」

…は？なに言ってんのコイツ？

おいおい、冗談にしては悪質すぎんだろ。冗談じゃ無かったらさらに悪質だけども。なんなの？隣人を殺す気なの？

すでに恥ずか死寸前ですがなにか？

しかしそこはさすが俺。パニックになり掛けながらも、勘違いしない為の訓練はバッチリなんですよ。

よし俺、とりあえず一旦落ち着いて、つい今しがたの相模のセリフの裏を読め！

『今度ウチの家に食べに来ればいいじゃん…？』

…ハッ!?そうか、コイツは今度と言ったのだ、今度…と。

今度…それは約束の言葉でありながら非約束の言葉でもある。ある意味なによりも固い約束の言葉と言えるかも知れない。

『今度遊ぼうぜー！』『今度飲みにでも行きますか！』『今度お食事でもどうですか？』

これらのセリフに次への再会に希望を抱く者よ、今すぐその希望を捨てよ。
なぜならこれらのセリフが叶う事などほぼほぼ無いのだから。
社会生活に置いて、今度という言葉はなんら意味を成さない。むしろ体のいいお断わり用語なのだ。
つまり先ほどの相模のセリフは来ることのない未来の約束……つまりは「ウチの家にお前が来ることなんてあるわけねーだろプゲラw」と訳されるわけだ。
……ふぅ、あっぶね、危うく騙される所だったぜ。
危うく来もしない未来にドキワクになってしまう所だった。許すまじ相模。
俺クラスの鍛えぬかれたボッチじゃなかったら数ヶ月後に絶望してるとこだったわ。
罠を未然に防げた昂揚感とほんのちょっぴりの寂しさを胸いっぱいに感じながら、こちらも体よく返そうではないか。それが大人の嗜みってもんだろう。
「…おう、ま、今度な」
まさに完璧なる返しである。なぜか相模は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているが。
どうしたのだろうか。比企谷ごときがこんなに完璧な大人の対応をしてくるとは！
とかってちょっとビックリしたのかな？
しかししばらくのあいだ間抜け面を晒していた相模ではあるが、ようやく事態を飲み

込めたようでハッとする。
　そして次の瞬間、コイツはリンゴのように紅潮した顔をこれでもかと破顔させて、元気に頷くのだった。
「…う、うん！…今度、ねっ…！」
　ぽしょりと小声で……しかしとても力強く「…やったぁ…！」と見えないように（丸見え）小さくガッツポーズしている相模を眺めながら俺は思うのだ。
　――これ、正解だったのん？
＊
　そこからはまた無言ではあるものの、相模が謎の上機嫌であった為に、むず痒く照れ臭くも、なんとも和やかな食事が続いていた。
「～♪」
　鼻歌混じりにサラダをいじる相模と、そんな相模を見ながら、マックスコーヒー擬きの茶色い液体の入ったカップを口に付けて、口角の上がってしまった口元を誤魔化そうと必死な俺という不思議で穏やかな時間。
　認めたくはないが、至福…に近いような時間を完膚なく打ち砕く事件が起きたのはそんな時だった。
「…うっわ、さがみんだ…」

「…うわぁ…やっぱこういう事だったんだぁ、南ちゃんって…」
不意に頭上から降り注いで来た蔑みを多量に含んだそんな二つの声。
マズい…やってしまった…また油断していた…。
思い起こされるのはいつかの花火大会。
あの時と違うのは、あの時は蔑む側だった相模が、俺の向かいに座っているという事。
恐る恐るそちらを見やると、どこか見覚えのある二人組が、まるで俺と相模を見下すように立っていた。
そしてそんな見覚えのある二人組の不快でいやらしい声がした方向へと顔を向けた相模の顔は、見るからに青ざめていったのだった。
「は、遥……ゆっこ」

招かれざる来客と相模さん

予期せぬ、そして招かれざる来客の登場により、相模は焦りを隠せない。

…それはそうだろう。だってコイツ等は文化祭での俺の悪評を相模と共に学校中にバラ撒いた張本人なのだ。

そんな張本人の内の一人が当事者と二人で仲良く飯を食ってる所なんて見られたら、これからどんな悪質で下世話な噂が広まる事か。

それを思えば相模も顔面蒼白にもなるだろう。

なにせコイツは周りからの目を人一倍気にする、どうしようもないヘタレなのだから。

――遥とゆっこ。この二人はかつて相模と薄氷のように薄っぺらい友人関係を持っていた。

文実でたまたま知り合いが居たから。その知り合いの仲良しも居たから。だから仲良くした。仲が良いように振る舞った。つまりは利害が一致したのだ。

そうした方が周りから充実した青春を謳歌しているように見えるから。
しかしその実この三人の関係は所謂よっ友であった。
それゆえ一度利害が分かれれば、関係が砂の楼閣の如く一瞬で瓦解する事など目に見えていた。否、瓦解では無く崩壊と言った方がしっくりくるか。
なにせ瓦解する程の関係性さえ築けていなかったのだから。
だから相模とこの二人は一瞬で敵対した。正確にはこの二人が一方的に相模を見放しただけの話ではあるが。
もちろん見放された原因は調子に乗った相模の浅慮によるものであるし、それに関しては一切の同情の余地は無い。
唯一同情するに足りうる点があるとすれば、そんな薄っぺらな人間関係を真に受けてしまった相模の浅はかさという点くらいだろう。
つまり当時の相模は本当にしょーもない奴だった。その一言に尽きる。
ただしそれはあくまでも〝当時〟は、だ。
少なくとも今の相模はあそこまで酷くはない。酷くないどころか随分と良くなったと思う。アホだけど。
毎日のように教科書忘れるくせに、毎日飴を持ってくるのは忘れないわ雨の日は忘れず他人の弁当は作ってくるわの大アホだ。

でも悪い奴では無い。嫌な奴では無い。

教科書見させられるわ隣で一緒に弁当食うわお兄ちゃんスキルをくすぐるような逆らい難い目で見つめてくるわ、ぶっちゃけ以前よりもかなり面倒くさい奴になっちゃった気がしないでも無いけれど、でも……俺はそんな相模を嫌いではない…。

だったら、そんなアホで面倒くさくて嫌いじゃない奴が、見てるだけでも胃がムカムカするような、こんな焦燥感溢れる顔をしないで済むようにするには、やはりこんな手段しか無いではないか。

これは俺の責任でもある。自分の立ち位置も相模の立場も理解していながら……先ほどの駅前でこういう事態を招いてしまうかもしれないという危険性を理解していながら、俺はそういった危惧への警戒よりも、相模とのなかなか悪くない道草を選んでしまったのだから。

…こんなやり方したら、またあいつらに怒られちまうかな。あと、もう相模に教科書見せる事も隣で弁当食う事も無くなるだろうな。

でもまぁ仕方ない。今この場を切り抜けるには、これしか方法は無いのだ。

いや、俺にはこんな方法しか思い浮かばないだけだな。

そして俺は自分の出番が来る隙をじっくりと観察して待とう。

さぁ、とくと御覧じろ、俺の生きざまを。

この生きざまで、この状況を打破してみせようではないか、出来る限りの矮小さで、出来る限りの卑屈さで。

「やっぱ体育祭んトキから怪しーって思ってたんだよねー」
「ねっ、この人と南ちゃん、ちょっと怪しかったよねー」
「…え、なに?…べ、別に怪しい事なんて…」
「だってさー、さがみん文化祭んトキはあんだけこの人の事めちゃくちゃ言ってたのに、体育祭になったら見るからに超頼っちゃってんだもん」
「ねー、この人…ヒキタニとか言ったっけ?この人もあれだけ南ちゃんに暴言吐いて嫌われ者になった癖に、体育祭では妙に南ちゃん庇ってたしさー」
「…そんな事」
まるで相模を責めるような言い回しの言葉が続き、そしてどっちが遥なんだかゆっこなんだか分からない片方のモブが、決定的なセリフを吐く。
「…この人とさがみんって、やっぱ付き合ってんだねー」
言いやがったな、そのセリフを。
一緒に飯食ってるだけで付き合ってるとか、発想が小学生かよ。そりゃ雪ノ下と葉山も、千葉で二人で歩いてただけで恋人認定されちゃうわ。

「べっ、別にウチと比企谷はまだ付き合ったりとかは……！」

真っ赤になって必死で否定を始める相模。

おい、いくら慌ててるからって『まだ』とか付けんなよ。変な勘違いされちゃうだろうが。

まぁいい。今の俺に必要なネタは揃った。『付き合ってるだろ』って低レベルなセリフと、必死で否定する相模というネタが。

だったらここそが俺の出番。俺だけの出番だ。

俺は普段よりも目を腐らせ、普段よりも嫌らしい笑顔を顔に張りつけ、矮小に卑屈にこう言ってやるのだ。

「…そ、そうなんだよ～、俺と南、実は付き合ってんだよ～…！」

その瞬間、この場は凍り付いた。

＊

俺と相模が付き合っているだなんて、遥とゆっこからしても単なる弄りだったのだろう。〝悪意の籠もった〟という注釈付きだが。

単にあまり良くない関係の同性を馬鹿にしたいだけ。本気で付き合ってるなんて思ってないが、せっかく目の前に弄れるネタがご丁寧に転がっているのだ。それを使わない手など無い。

だからコイツ等はただ相模を馬鹿にする為だけにわざと言ったのだ。付き合ってんじゃないの？と。

だからこその衝撃。まさかこう返ってくるとは全く想像していなかったのだろう。

俺からの予想外の返しに、これでもかってほど慌てふためく。相模が。

お前がかよ。

「なっ！なななな……！」

本日最大級の赤面を見せる相模。あまりにも動揺しすぎて「な」しか言えないでいる。

いやホントごめんね？でもまだ終わりじゃないから、そんなに涙目になってまで嫌悪しないで！

ただちょっと欲しかった反応と違うんだよなぁ。ホントは「はぁ？あんたなに言ってんの？マジキモいっつーの！」とかって相模らしい罵倒が欲しかったのだが、まぁ致し方ない。このまま進めさせて貰おうか。

「もうずっと前から付き合ってんのに、南の奴が「あんたなんかと付き合ってない」ってしつこいんだよ～。まぁちょっと拗ねちゃってるだけだとは思うんだけどさぁ」

まるで夢物語でも語っているかのような虚ろな表情を作って、そんな危ないセリフを吐く俺に怪訝な表情をあらわにする遥とゆっこを見やり、内心ほくそ笑む。絶対に顔には出さないけれど。

「だから今日はきっちりと話を付けようって呼び出されちまって、ちょっと困ってたんだ。拗ねてっからってここまでくると結構大変だろ？あんたらからも南に言ってやってくれよ～」

……まったく。

普段無関係の他人と話す時は緊張して噛んだりどもったりしちゃう癖に、こういう時だけはペラペラと回る自分の口に呆れてしまう。

これだけ滑らかに喋られるポテンシャル持ってるなら、普段からその能力を遺憾なく発揮しろよ。

そんな自分に対して思わず苦笑を浮かべてしまったのだが、その笑い顔でさえもこの場においては効果的だったらしい。

遥とゆっこは俺の歪んだ笑顔を心から気持ち悪そうに一瞥すると、不快感をあらわにボソボソと会話を始めた。

「…え、キモ……な、なにこの人……ヤバくない…？」

「…なに……？もしかして南ちゃんのストーカー……？」

――おお、モブの割には状況把握が早くて正確じゃねーか。

…正解だ。俺は相模のストーカー。

一方的に想いを寄せ、自分と付き合っているものだと錯覚しているヤバい奴だ。
重度のストーカー心理ってのは確かこういうものなんだろ？
これならばここで二人で食事をしていた事にもそれなりの信憑性が生まれる。
相模とヒキタニは仲良しとかではなく、話し合いの場として食事の席を設けていただけだ。
あくまでも相模は被害者でしかなく、今後下世話な噂を流される事もない。
まぁ下手したら俺の名声（ストーカー）は広がってしまうかもしれないが、文化祭であれだけの噂が流れて一躍時の人となったにも関わらず、７５日を待たずして飽きられ、以前と変わらず存在を認識されなくなった程の逸材である俺からしたら、その程度の事はどうということもない。
「なぁ、なにボソボソ言ってんだよあんたら。早く俺と一緒に南を説得してくれよー」
「…うっわ、さすがにコレはヤバいって～…」
「ゆっこ、もう行こ…？み、南ちゃんも早く帰った方がいいって…！」
「ね！うちらと一緒に帰ろ…？」
…よし、この二人、予想以上に上手く釣れた。
ただ恐がって帰るだけでは無く、被害者である相模に対しての同情心まで芽生えたようだ。

動揺からか俯いたままの相模と、そんな相模に同情して手を差し伸べようとしている遥とゆっこ。

心配ではなくあくまでも同情。

同性としてこの境遇を〝憐れ〟と、この瞬間だけ感じた程度の一過性の感情では、この三人のわだかまりが解けるような事は無いだろう。

他者を想う尊い感情ではなく、あくまでもキモい男に付き纏われて可哀相という憐れむ感情なのだから。

だがこれならば、少なくとも相模が不利益になるような噂をコイツ等によって流される心配は無いだろう。

あとはコイツ等に手を引かれて一緒に帰る相模が、後で上手く話を合わせてさえくれれば万事解決だ。

今は多少混乱しているかも知れないが、人の目を人一倍気にする相模なら、この事態を把握して上手く話を合わせる事くらい出来んだろ。

そう。俺のこの計画は完璧だった。完璧なはずだった。

この茶番劇の主役の、この苦しげな言葉さえ無ければ…。

「…やめてよ、もういいよ比企谷……。もうそういうの……ウチ、やだ…」

そう弱々しく呟いた相模へと視線を向けると、その頬には一筋の雫が流れていた。

＊

――もうウチそういうのやだ――

遥とゆっこの手を払った相模はそう言った。

そんな相模の台詞と一筋の雫を目の当たりにした遥とゆっこは、怪訝な表情を相模にぶつけた。

前々からほんの少しだけ考えていた。なぜ相模は俺に対して突然軟化したのかを。

始めは単に教科書の貸し借り――一方的に貸してるだけだが――から始まった俺達の不思議な関係性ではあるが、そもそもそのスタートからしておかしいのだ。

例えどんな理由があろうとも、〝あの〟相模が俺に助けを乞うはずなどないのだ。

それからはなし崩し的に少しずつ距離が縮まっていったが、それもまたおかしな話なのだ。

なにせ〝あの〟相模が〝この〟俺との距離を縮めようとするわけが無いのだから。

そこで出る結論はたったひとつだけ。

『相模はいつの間にか〝あの〟相模では無くなっていた。つまり相模はあの文化祭での真実に気がついている』

…いや、正確には気がついているのでは無く、勘違いしていると言った方が正しいのかも知れないが。

だからこそ相模は俺なんかに優しくなったのだ。勘違いしているから。

だが今はとりあえずそれはいい。そんな勘違いはあとからゆっくり解けばいいのだから。

いま考えなくてはいけない事は、今から相模がやろうとしている事は、この場において悪手でしかないという事。

せっかく遥とゆっこの誤解を解く為の下地を準備したのに、相模がその行動を起こせば全てが台無しになってしまう。下手したらあの時の…文化祭後の俺以上の悪意に相模が晒されてしまいかねない。

「お、おい、なに言ってんだ相模…」

「…比企谷は黙ってて。…大体さっきまでキモく勝手に南とか言ってた癖に相模に戻っちゃってるし。バカじゃん…？」

「…」

語るに落ちるとはこの事か。

あれだけペラペラ回ってた口と頭も、不測の事態であっさりと元通りじゃねーか。

そして相模は遥とゆっこに向き直り語り始める。カタカタと肩を震わせながら。
「…遥、ゆっこ。今のはコイツの下らない冗談だから忘れて…？」
「え？」
「なに言ってんの？さがみん…」
俺の迫真の演技（ストーカー）を真に受けて相模を憐れんだ二人は、予期せぬ展開に理解が追い付かない。
相模はそんな二人の様子など気にも止めずに話し続ける。震える掌を落ち着かせるように、ギュッとスカートを握り締めながら。
「…ホラ、もしウチと比企谷が一緒にごはん食べてる上手い言い訳が出来なかったら、遥とゆっこはウチ達の関係を面白可笑しく噂話として流しちゃうかもしんないじゃん…？だから比企谷はそうならないように、自分をストーカー扱いさせようとしただけ。…そうすればウチは被害者になるから、遥たちに変な噂を流されないで済むって思ったんだと思う」
始めは呆然と聞いていた二人も、相模の台詞を頭の中で噛み砕いていく内に徐々に理解出来てきたらしい。
つまり今の俺のストーカー的発言は、本気ではなく相模の為に泥を被ろうとしたのだと。

しかし噛み砕けたのはそれだけでは無い。むしろ今の相模の台詞は、この二人にはどうしても看過できない内容が含まれていたのだ。

「は？なにそれ!?その言い方じゃ、まるであたし達が悪口言い触らすみたいじゃん」

「だよねー！なんかやなカンジなんですけどー」

顔を真っ赤にして激昂する遥たち。

そう。今の相模の台詞は、「あんた達は噂を広めて相手を貶めるでしょ？」と言外で言っているようなものだったのだ。

これは相模の失言だろう。確かにそれは本音なのだろうが、人間関係では決して表には出さない本音。

だから俺はてっきり相模は「そういう意味じゃないけど……」等と言い訳するものとばかり思っていた。

だが現実は違った。

「…だって、それは事実でしょ…？文化祭での比企谷の悪口を学校中に広めたんだもん」

コイツなに言ってんだ…失言ではなく確信犯だったのかよ…。

これには遥とゆっこも黙っていない。まぁもともと一切黙っちゃいないけれども。

「…はぁ？なにそれムカつく！なに他人事みたいに言ってんの!?それはあんたもじゃん！」

「そうだよ！なんか知んないけど、仲良くなったら自分は棚に上げちゃうの!?超サイアクー」

――遥達の肩を持つわけでは無いが、コイツ等の言っている事はもっともだ。

別にあの文化祭で俺の悪評が校内に広められたのは、あくまでも俺の自己責任だと理解している。だから俺自身はこの三人にはその件に関しての悪感情は一切無い。

だが今の相模の台詞だけはそうはいかない。なぜなら今の相模の台詞はブーメランなのだ。相模の意見は相模自身にも適用されるのだから。

だから今の台詞で遥とゆっこだけを責めるのは、自身を棚に上げた筋違いな意見でしかない。

…しかし、そんな事は他の誰でもない、相模自身が一番理解していた。

「…そう。ウチはサイアクなの。…なんにも知らない癖に、自分の為に比企谷の悪口を広めたのはウチだから。確かに遥とゆっこもウチの為に悪口を広めてくれたけど……でもその原因を作ったのはウチ自身。……一番悪いのは、ウチ…」

俯いて弱々しく語る相模に、遥達は黙り込んでしまう。

「…でも、今の比企谷のやりかた見て遥とゆっこも解ったでしょ…？コイツがどういうヤツかって。文化祭の時に悪かったのは比企谷じゃなくってウチだって。…あのとき

比企谷がああしてくれなかったら、ウチがみんなにメチャメチャ責められてたって…

ホントは遥達だって分かってたんでしょ…？だって、体育祭の時ウチに言ったじゃん、『文化祭の時あんなに適当にやってた癖に』って…」

そう言われてしまった遥とゆっこは絶句する。

…そうか、あの時は特になんとも思わずに聞き流したが、あの時コイツ等が相模を責める為に吐いたあの台詞は、実は自分たちの非を認めてたって事になるのか。

「だから……ごめん、遥、ゆっこ。結局一番悪いのはウチだから、ウチを責めるのはいい。ウチの悪い噂話を広めたって構わない。それはウチの自業自得だから…。でも、比企谷の悪口は言い触らさないで欲しい。比企谷は…ホントはウチに暴言を吐いた最低の嫌われ者でも、キモいストーカーでも無いの。捻くれてるけど、ホントは結構良い奴。

……だからウチはもう比企谷の悪い噂とかやなの……比企谷は、ウチの……ウチの大切な…」

相模は相変わらずカタカタと震えたままだ。

弱々しく震え、弱々しい涙目でスカートをギュッと握ったまま。

それでもコイツは僅かに残った勇気と根性で、真っ赤な顔で遥とゆっこをしっかりと見据えてこう言うのだ。

「ウチの大切な……お、おとなりさんだから……っ」

……大切なおとなりさんってなんだよ。教科書？教科書見せてもらえる的な？

危うく勘違いしちゃうとこだったわ、あっぶね！

「な、なにそれバッカじゃないの…？」

「なんか、超つまんない……。い、行こ行こ…？」

そうして招かれざる来客は舞台袖へと捌けて行く。なんとも言えない気まずさを残して…。

気まずさだけを残してくとか、役者としては三流の大根役者だな。

しばしの沈黙。

そりゃそうだ。相模は俯いたままぷるぷるしてるし、俺は俺でどうしていいのか分からない。

この状態どうしてくれんの？

――どういう理由でかは知らないが、相模は文化祭での自身の過ちをきちんと見つめている。
そしてそれによって、俺のあのやり方に対して大変な勘違いを起こしている。
その勘違いは相模の為にもすぐにでも解かなくてはならない。その勘違いは相模にいつまでもまとわりついてしまうからだ。後ろめたさとして。

…が、それはそれこれはこれ。それはこのあと解けばいい。
だからそれよりもまずはこの新たなる問題へと発展しかねないこの問題を取り上げるべきだろう。
「…な、なぁ相模」
遠慮がちに訊ねた俺に、相模は口では無く、ビクッとした肩を持って応える。
「…今のでマジで良かったのか…？お前、マジで学校中に悪口言い触らされっかもしんねーぞ…？」
なるべく刺激しないよう柔らかい口調で言ってみたものの、やはり内容は一切柔らかくなかった。
もう直球。超ドストレート。
すると相模はぷるぷる震えながら涙目な顔をゆっくりと上げた。

「…ひ、比企谷～…！ど、どうしよう…？ウ、ウチやっちゃったかなぁ…!?今更ながらめっちゃ恐くなってきちゃったよぉ…！」

「……」

やっぱアホだろコイツ。

ヘタレの癖に、悪口を言い触らすような連中に啖呵切るんじゃねぇよ…。

「…やっばい…マジで学校中に変な噂流されたらどうしよう…どこ歩いてても笑い者とかになっちゃったらどうしよう…ヘタレなウチにはマジ無理だって…」

青ざめた顔してブツブツと独り言を呟くコイツには、さっきまでの堂々としていた男前な姿は一切見られない。

さっき、ちょっと格好良いなコイツ…とか思っちゃった気持ちを返してください。

「…で、でも…っ」

しこたま呟きしこたま後悔して満足したのか、相模はガバッと顔を上げた。

相変わらずヘタレ感丸出しの情けない涙目ではあるものの、ほんの少しだけ…本当にほんの少しだけ満足げに口元を緩ませた。

「……でも、比企谷がキモいストーカーとかって変な噂立てられるよりは……ずっとずっと、はるかに、マシ…？」

…なんで疑問系だよ。

お前いまちょっと自分と俺を天秤にかけたろ。
まぁそこら辺が卑屈で正直で、実に相模らしくてなによりです。

するとすっかりぬるくなってしまったであろう紅茶をこくこくと飲み干して気持ちを整えた相模は、一転真剣な眼差しを真っ直ぐに向けてきた。
「…ねぇ、比企谷」
「…おう」
「このあと、サイゼ出てから、あとちょっとだけ時間いい…？あんたに、話したい事あんの…」
ちょっとだけ時間いい？なんて言うわりには、俺には有無を言わせぬ瞳。
その目にはお兄ちゃんスキルをオートで発動させるようないつもの弱々しさは見られない。
さっきの今だ。コイツの言いたい事はもちろんあの話だろう。
そして俺にもコイツに用がある。相模の勘違いを解くという大事な用事が。
「…いいぞ」

そして俺達はサイゼをあとにして、隣の駅までゆっくりと歩き始めた。

これからの隣人付き合いを円滑に進める話し合いの為の、一駅分の長くて短い時間が始まる。

となりの相模さん

相模と並んで歩く帰り道。
先ほどまでの向かい合っての時間も悪く無かったが、やはり相模とはこうして隣り合っている方がしっくりくる気がする。
なにせこのひと月弱、毎日のように隣に居たんだもんな。
「…うー、さっむ～。あはは、こんな真冬にわざわざひと駅分歩くとかウチらどうかしてるよね。比企谷なんて自転車あんのに」
「……誰のせいでわざわざ歩いてると思ってんだ」
そんな軽口を叩きつつ、お互いに本題へと入る為のタイミングを窺う。
一度その話題に触れてしまったら、もうあとには引けないのだから。
下手したらこのままアレに触れないまま駅に着いちゃうんじゃね？なんて思い始めはしたものの、やはりそういうワケにはいかないようだ。
あと僅かで駅前かという所で相模の喉がこくりと鳴ると、なんとも言えない緊張感が二人の間を支配した。

「…あの、さ、比企谷」
「…おう」
ピタリと立ち止まる相模。
どうやら相模は、この話を歩きながらする事は容認出来ないらしい。
であるならば、俺も立ち止まらないわけにはいかない。押していたチャリを止めて相模へと振り返る。
「ごめんなさい……」
振り返った俺を確認した相模はそう一言だけ告げると深々と頭を下げた。
他には何も言わない。カタカタと震える細い体を折り曲げてのごめんなさいの一言に、相模の色々が詰まっているのを感じた。
「…別に、お前に謝られる覚えはない」
――覚えならある。ありすぎるくらいにある。
だがそれはもう済んだ話だし、そもそも謝られる覚えはあっても謝られる筋合いはないのだ。
なぜならあの事態を引き起こしたのは俺の意思なのだから。俺が勝手にやって、当然のようにそれに見合う結果が俺に降り掛かったというだけの単純なお話なのだ。
そこに相模の意思は存在しない。存在するのはあくまでも俺の意思のみ。

「お前がなにを言わんとしているのかはなんとなく分かる。だがな、アレは俺が勝手にやった事だ。そして文化祭後に起きた事はその結果だ」

そう言う俺に相模は哀しげな瞳を向けてくる。

せっかく気持ちを伝える決心をしてせっかく頭を下げたのに、ようやくごめんなさいを言えた途端にそんな返しをされてしまえば哀しくもなるだろう。

ここひと月弱の相模の行動や表情。そして、先ほどの自分の悪い噂を流されるかも知れないという危険を犯してまでも俺を守ろうとした相模の覚悟を見たら、コイツの謝罪の気持ちが上っ面のモノでは無い、本物の気持ちだというのは痛いほど伝わってくる。

だがそれでは駄目なのだ。

確かに相模の心からの謝罪の気持ちは嬉しくない事はない。でもそれでは駄目なのだ。

コイツの勝手な勘違いで、いつまでもコイツの心に後ろめたさを残したくはない。

だから俺は相模の勘違いを解かなきゃならない。例えそれでもう相模と関わる事が……相模が俺に関わろうとしてくる事が無くなろうとも。

「…お前はどう考えてどう勘違いしているのかは知らないが、言っておくがアレは別にお前の為にやった事じゃない。…奉仕部として依頼を受けて、倒れるまで頑張ってやり遂げようとした雪ノ下の努力を無駄にしたくなかっただけだ」

…確かにあの時の雪ノ下は間違っていたかもしれない。
奉仕部の理念に反するあんな依頼を受けたこと自体も、依頼の遂行の仕方も、そしてあの意地の張り方も、おおよそ雪ノ下雪乃という人間らしくない間違ったやり方だったと思う。
でも……いや、だからこそ無駄にしたくなかったのかもしれない。
密かに憧れていた雪ノ下雪乃の失敗を認めたくなかったから。ああまでして解決しようとした依頼を、相模なんかに台無しにされたくなかったから。
だから俺も、柄にも無く意地を張ってしまったのだろう。あんなしょーもない手段を講じたのだろう。
「…時間に余裕があれば、あのとき相模が一番欲しかった言葉を選ぶ事も出来た。まぁ俺が言った所でお前は聞きはしなかったかもしれんがな。…だが俺はお前をなじる事を選んだ。それはただ時間が無かったから。そうしなければ依頼が失敗していたからだ。つまりお前が泣こうが傷付こうが知ったこっちゃなかった。そんなものの優先順位は二の次以下にした」
…俺は誰も傷付かない世界の完成などとうそぶいて、真実から目を逸らした。しっかりと傷付いた、傷付けた人間が居たという事実から。
たぶん真相心理の中では『相模だからいいか。相模が悪いんだから俺が気にする事

じゃない』なんて、自分に都合のいい言い訳をして自分を誤魔化していたんじゃないだろうか。

「結果的に俺が責められてお前が助かったのは単なる副産物でしかない。お前の為にやったわけじゃないんだから。…その後お前らが俺の悪口を広めたのだって、お前を泣かせて傷付けてまで依頼達成を選んだ俺の自業自得でしかない。…そりゃ噂くらい広めんだろ、俺なんかにあれだけボロクソ言われりゃ。お前の立場だったら俺だってそうしただろう。なんてことはない、普通の行為だ」

…そう。別に相模が助かったのは単なる偶然。

俺はそこまで……相模の今後の立場まで考えて行動したわけじゃない。

そしてあんな風に罵倒されて泣かされたら、そいつの悪口を言い触らすなんて当たり前の行為だろ。その件に関しては、コイツ等に非はない。

「だからアレはお前に謝られる筋合いもなければ、お前がいつまでも気にするような事でもない」

つまりはそういう事だ。

たぶん相模は自分の為に俺が泥を被ったと勘違いしているのだろう。

だからその勘違いは正さなきゃ駄目だ。そんな勘違いを持ったままじゃ、相模はいつまで経っても俺に対して必要の無い後ろめたさを持ったままになってしまうのだから。

謝罪するべきなのは俺に対してではなく、自分自身に対してだと俺は思う。
全てをいい加減に、無責任にしてしまった自分に謝罪するべきだ。
だがコイツはもうその事実と向き合っている。きちんと自分の罪と向き合った上で反省している。
そもそも相模が仕事を放棄したのは、雪ノ下が副委員長をやったからだろうし。
優秀すぎる雪ノ下が無茶して全てをこなしてしまったからだろう。
もしも副委員長が雪ノ下でなければ、盛り上がりに欠けはするものの〝皆で協力（笑）〟して、当たり障りの無いつまらない文化祭として着々と進行していき、決して失敗にはならなかったと思う。それが成功と言うのかどうかは知らんけど。
そもそも文実がバラバラになった原因でもある〝クラスを優先しよう〟という発言も、雪ノ下を弄りたい陽乃さんに誘導されただけのものだし。
だからもうアレは終わった事なのだ。いつまでも相模が気にするような事ではないのだ。
…その事に後ろめたさを感じて、俺に優しくする必要など…同情する必要などないのだ。

コイツがいつから勘違いをしていたのかは分からないが、たぶん体育祭後くらいから

だな。

あれから約三ヶ月。三ヶ月もの間、コイツは俺に対して無用の感謝と反省をしていたのだろう。

でも今その感謝と反省は勘違いだと、意味の無かったものだと突き付けられたわけだ。

今の相模の心境はいかほどのものだろうか？

俺に対して落胆しただろうか？嫌悪しただろうか？…それとも、もう罪悪感を持たなくて済む事に安心しただろうか？

――しかし次に相模の口が開かれた瞬間、それらは全て違っていたのだと知った。

ちょっと俺の想像の範疇の言葉とは違っていたから。

「…ぷっ、謝ってる立場でこんな風に言うのもなんだけど……ホント比企谷ってバカで捻くれてて、そんで……優しいよね」

……は？

＊

コイツは一体なにを言っているのだろうか。

バカなのは分かる。捻くれてるのも…まぁ許容範囲だ。
だがなぜそこで優しいという単語が出てくると言うのだろうか…？
「…比企谷はさ、そういうこと難しく考え過ぎなんだよ。……勘違いとか誰の為とか、そんなのどうだっていいじゃん。例え比企谷にどんな都合があってウチを助けることになったからってさ……結局はウチが一番悪くて、それを比企谷が正してくれたって事に、何一つ間違いはないわけじゃん…？」
「……」
「たぶん比企谷は、その勘違いってので、いつまでもウチが後ろめたい気持ちを持ったままになっちゃうのを気にしてくれてるんでしょ？…だからウチにそれは勘違いだから気にするな、なんて言うんでしょ？」
…なんだろうか、無性にムカつく。相模ごときに俺の浅い考えを全て見透かされてしまっているようで。
「…でも、そんなのズルい…。謝るのなんてウチの単なる自己満かも知んないけど…、でもやっぱりズルいよ。…気にするななんて嫌、これで終わりなんて嫌だ…。比企谷ばっかり気にしないでよ…ウチにだって……気にさせてよ…」
――ああ、俺はまた間違えてしまう所だったのか。

今のコイツの顔は、いつかの由比ヶ浜の顔だ。

『…なんでそんな風に思うの？同情とか気を遣うとか、…そんな風に思ったこと、一度もないよ』

『もっと簡単なことだと思ったんだけどな…』

『でも、これで終わりだなんて…なんか、やだよ』

あの時は雪ノ下の言葉に…一度終わらせて、また始めればいい…なんて屁理屈めいた台詞に助けられたっけな。

「それに、ウチだって分かってるっての。比企谷がウチの為に泥を被ってくれたんじゃないって事くらい。だって、あの時のあんたには、あんなんなってまでウチを助けてくれるメリット無いじゃん。…だからなんとなく分かってたよ、依頼の為…雪ノ下さんの為にはああするのが一番効率が良かったからだろうなって」

相模は苦笑混じりにそう言った。

ま、それでもさっき比企谷はウチを助ける為に泥被ろうとしてくれたけどね～、なんて、照れ臭そうに頬を掻きながら。

ちょ、不意打ちで恥ずかしいこと言うのやめてもらえませんかね……バッカ違げーから！別に相模の為にあんな事したんじゃないんだからね！

「確かに比企谷に謝りたかったのはその理由もあるよ？…ウチのせいなのに、悪口言い触らしたり学校中の嫌われ者に仕立てたり……ホント最低だよね、ウチ。

…でも、それだけじゃない。ウチが比企谷に一番謝りたかったのは、〝それ〟に気付いたのは随分前なのに、ずっと言いだせなかったって事…っ」

「……」

「……ずっと言いたかった。言わなきゃいけないって思ってた。…でも言いだせなかった…。言っちゃったら色々と認めなくちゃならない事が恐かったから…比企谷なんかに助けられたって認めるのが悔しかったから……

でも一番恐かったのは、一番嫌だったのは……比企谷に拒否られる事」

…俺に拒否られるのが恐かった…？

なんだそりゃ、どういう意味だよ。

「…ウチから普通に話し掛けたら、たぶん比企谷は超嫌な顔したと思う。…そりゃそうだよね、だってマジで嫌だろうし……でもホラ、ウチってちょっとヘタレなトコあるじゃん…？」

……え、ちょっと？

「…だから、恐かったの……恩人の比企谷にあからさまに拒否られたらって…ウチの存在を否定されたらツライなって…」

だから恩人なんかじゃねーって言ってんだろ…。

「…だからね？席替えで隣になった時、なんとか話がしたいなって……せめて謝る時に拒否られたり存在を否定されないくらいの関係になれたらなって……そう思って、わざと教科書忘れた事にして話し掛けてみた……」

……んだよ、やっぱわざと忘れてたのかよ……まぁ気付かないフリしてただけで、さすがになんとなく気付いてたけれども。

「…でね？…それが上手く行ったら、今度はもっと話してみたくなっちゃって…飴あげたり…雨の日は友達に協力してもらって昼休みに違うクラスに行ってもらったりして、比企谷とお弁当食べたりした」

…そうか、友達に協力してもらってたのか……って、え？

「いやちょっと待て。なんだその友達に協力してもらってたとかなんとかって」

「いや、だから……ウチさ、比企谷と話せるようになってから、ハブられんの覚悟でクラスの仲のいい子達に全部話したんだよね。文化祭の時の事も……そ、その…ウ、ウチの気持ちも……ぜ、全部」

は？マジで？

てかなんでそんなに真っ赤になってんだよ。別にお前の気持ちを友達に伝えたって

ところは、そんなに照れる要素無くない？
「そしたら、ね……予想外にみんなすっごい協力的になってくれて…じゃあ雨の日は私達どっか行ってっからー、って…」
マジかよ……いや、そりゃおかしいなー、とは思ってたんだよね。
なんで相模の取り巻き共って、雨降る度に昼休み居なくなっちゃうのん？って。
「…い、いやいやいや、それじゃ俺と相模が仲良いとか思われちゃうじゃん」
「今さら!?…あんだけ教科書一緒に見たり隣り合ってお昼一緒に食べてればそう思うに決まってんじゃん…!?
…言っとくけどウチの友達だけじゃなくて、一応クラスではそこそこ話題になってるらしいからね…？最近ヒキタニと相模って仲良くない？って」
やだなにそれ恥ずかしい！
てっきり窓際最後列の恩恵受けられてると思ってたわ。クラスの皆さんから丸見えじゃないですかやだー。
……あ、あれ？それって最近部活行くと由比ヶ浜の機嫌がすこぶる悪いのと雪ノ下の視線が氷点下なのと一色がバイオレンス気味なのと関係があったりしますかね？
あ、雪ノ下の視線が氷点下なのはいつも通りでした。
あと俺は後輩に暴力でも振るわれてんのかよ。

そんな色んな感情が交ざり合い、俺はどよんと目の腐らす。
そしてそれを黙って見過ごすようなお隣さんではありませんでした。
「…ごめん、やっぱウチと仲良しに見られちゃうなんて……嫌、だよね…？」
出ました！最近の相模さんお得意の悲しげな笑顔からの潤々お目々。だからきたねぇよそれ…。
「べ、別に嫌じゃねぇけど…」
嫌なんじゃなくて恥ずかしいんです。
あと、「そっか…！」とぽしょりと呟いて、パァッと顔を綻ばせるのはやめなさい。悶えちゃうでしょうが。
「…ん！んん！と、とにかく…！そうやってちょっとずつ比企谷と仲良くなってきたら……今度は逆に文化祭の話に触れづらくなっちゃって……。せっかく仲良くなれたから、あの話になるのが恐くなっちゃった……ウチ、ホント身勝手だよね…」
――ああ、そういう事か。
俺としては決して仲良くなったつもりは無いが、仲良くなった相手とは触れたくない話ってあるよね。
俺としては仲良くなったつもりは無いが。大事な事なので略。
「だからね、ウチが一番謝りたかったのはそれなんだ……ずっと謝んなきゃって思って

たのに、ビビってこんなに先延ばしにしちゃった事。…こんなに卑怯でヘタレな事しちゃってた自分を謝りたかったの。だから……ごめんなさい」

だから謝る必要自体無かったって言ってんだろ……なんて、さっきの台詞を聞いてしまったら……そしてこの顔を見たらもう言えなかった。

悩んで悔やんで苦しんで……そしてようやく打ち明けられたという解放感を孕んだこの顔を見てしまったら。

「…そうか。ま、その…なんだ……了解した」

だから俺はコイツからの謝罪を素直に受け取る事にした。全然素直じゃなかったですねすいません。

「あと…」

謝罪を受け取ってしまい、なんだか照れ臭くて横を向いていたのだが、どうやら相模の話はまだ終わってなかったらしい。

「おう…」

「その……あ……ありがと」

「……は？」

ようやく恥ずかしくて気まずい謝罪が終わったと思ったら突然の謝意である。

なんで？

「…ホントはね？…ごめんなさいよりも、ずっとこっちの方が言いたかったんだよね、ウチ。…その、あの時ウチを捜しに来てくれて…ありがと」
「……は？だから捜したのは依頼の為だと…」
「分かってるってば。でもやっぱお礼言わなきゃ気が済まなかったのよ…！」
　なんでキレ気味なんだよ。
「…そりゃさ？あの時はマジで超ガッカリしたよ。なんでよりによってコイツが来んのよ…って」
　おい、それわざわざ本人に言わなくてもよくない？
　そりゃ王子様が俺じゃガッカリもするだろうけど。
「…でもね、それでもホントは安心したんだ。誰も捜してくれて無いんじゃないかって不安だったから。だから屋上のドアが開いた時は、ホント嬉しかった。…顔見てガッカリしたけど」
　だから言わなくていいから！二回言うほど大事な事なのん？
「お前な……お礼言うんだかディスんだかどっちかにしろよ」
「あはは」
　あははじゃねーよ。飴と鞭がどっちも強力過ぎて、俺のライフはゼロ間際だよ。
「だからもっかい言うね……その、ありがと」

「……おう」
なんだこれ恥ずかし過ぎんだろ。こんなの八幡らしく無いよ！
「で、なんだけどぉ…」
…え、まだ終わんないの？この時間。もうお腹いっぱいですよ…。
うんざり気味で嫌そうな顔して次の言葉を待っていると、相模は耳まで真っ赤になった顔を俯かせ、若干震える右手をわきわきとグーパーすると、スカートでゴシゴシと掌を拭いて俺の前に差し出してきた。
「……なので、も、もし良かったら……これからも……今までと変わらずに良き隣人付き合いをしてもらえない、かな…？あ、…も、もらえませんか…？」
まさかの握手である。
しかも友達とか恋人とかを申請する握手ではなく隣人付き合いの。
こんなの初めて聞きましたよ。まぁ友達も恋人も居た事ないから知らんけど。
「…えー」
握手とか超恥ずかしいから思わずそんな声が漏れてしまったのだが、そこはやはり相模さんですよ。
緊張で赤く染まっていた表情を一気に強張らせて、泣きそうな瞳で
「…ま、まぁ…り、隣人付き合いくらいなら…」

見つめられちゃう前にすぐさま僕と握手！
もうやだよコイツ…確信犯なんじゃないの？
…ああ、相模の手がスベスベで柔らかくてあったけーよチクショウ…。
なんでコイツこんなに指とか細せーんだよ。握手じゃなくて繋ぎたい（錯乱）
そして相模のこの嬉しそうな恥ずかしそうな破顔っぷりである。俺の方が八万倍恥ずかしいですから！
「と、とりあえず今はって事で……っ」
嫌がる俺に気を遣ってくれたのか、相模はなんだか名残惜しそうに手を離すと、左手で右手を大事そうに包みながら、そうぽしょっと呟いた。
「あん？とりあえず今はってどういう事だ？」
「な、なんでもない！こ、こっちの話っ…」
「？」
ホントどこまでも良く分からんヤツだな。顔も赤すぎるし高熱を疑っちゃうレベル。
まぁこれでようやくこの羞恥プレイから解放されるのだと思えばどうだっていいか。
「…えと、それじゃウチそろそろ帰るね、駅もすぐそこっぽいし…」
「おう」
「…その…今日は道草に付き合ってくれてありがとね。…ちょっと色々あったけど…比

企谷と一緒に帰れて……そのっ……ホント良かった」
「…お、おおおう」
そう言って相模は小さく手を振り、とてとてと駅へと歩いていく。八幡爆発寸前です。なにこれ青春謳歌しちゃってんの？
いやいや勘違いするな、単なる隣人付き合いだから。相模もそう言ってたし。
「…じゃ、また明日！」
小さくからブンブンに変わっていく手の振りを遠くに眺めながら俺は思う。
…ふぇぇ、恥ずかしくて明日から学校行きたくないよぅ…
＊
しかし世の中はそんなに甘く無い。
帰り道も夕飯時も入浴中も就寝中も、なんか知らんがひたすら悶えていたら気が付いたら教室の前に立っていた。ザ・ワールドが目醒めた瞬間である。
…入りたくねー。だってクラス内では普通に仲良しとか思われちゃってんでしょ？
てかクラスの連中も俺と相模が仲良くしてる事に疑問を持てよ。
だが今から帰るわけにも行かず仕方なく教室の扉を開けると、俺の隣の席にはすでにお隣さんが待機していた。

やべぇ…なんか超ソワソワしてんですけどあの子…。
ステルス全開で極力気付かれないように席へと向かうのだが、なんだかいつもより周りの視線を感じてしまう気がする。なんつーの？ニヤニヤしてるっていうの？
今まで気付かなかったってだけで、本当は毎日こんな視線を向けられていたのかと思うと余裕で死ねるよね。うん、気のせいのはず。
それでも俺はなんとか席へと辿り着く。ちなみに俺の気配を感じ取った相模の肩がビクッとしたのは内緒な。
「…お、おす」
席に着いて鞄から教科書を取り出していると、相模がモジモジと挨拶してきた。
最近は慣れたもんな朝の挨拶のはずなのだが、今朝はなんとも恥ずかしい。
「…おう」
チラリと目線だけを向けて挨拶とも言えない挨拶を返すと、相模はすぐさまプイッと顔を逸らした。そんなに恥ずかしいんなら、無理に挨拶してこないでもいいのよ？
しかしここにきてふと思う。
――そういや、良い隣人付き合いって……なに？

そう。これからどうすればいいのか分からないのだ。
相模はこれからも今までと変わらない良い隣人付き合いをお願いしますって言ってきたけど、じゃあ良い隣人付き合いってなんぞや…？
今までは相模が教科書を忘れてそれを俺が見せる。
その対価として飴やら雨の日の弁当やらを貰っていたのだが、もうそれは無くなるのだ。
だって教科書を見せる必要はもう無いわけだから、対価の飴も弁当も無いわけだ。
それならば、これからはどうやって隣人付き合いをしていけばいいのだろうか。相模とこういう関係になるまで、隣の席の女子と関わった経験が無いからまったく分からない。
てか、〝今までと変わらず〟なんて土台無理な話なのではないか？
だって俺と相模の関係なんて［挨拶・教科書・飴・弁当］の四つ程度の関係なのだ。そのうち三つは昨日で終了したんだし、あと残された関係は挨拶くらいのもの。
…ああそうか、つまり相模の言う〝今までと変わらない良い隣人付き合い〟とは、もうお互いに過去の件は忘れて、朝と別れの挨拶くらいはする、当たり障りの無い関係になりましょう…と言うことなのか。
なるほど、そういう事か。

そりゃそうだ。相模がずっと俺に伝えたかった事は昨日で済んだのだ。もうこれ以上相模が俺に関わる必要性なんて無いもんな。

…ふむ、緊張しちゃって損したぜ。要はほとんど関わりを無くせばいいってだけの簡単なお仕事なわけね。

「…」

肩の荷が降りた。三学期が始まってひと月ちょっと。フハハハ、ようやく至高のボッチ生活が再開されるのか！

……肩の荷が降りたはずなのに、降りた肩は次第に落ちていく。

んだよ…肩の荷が降りたんじゃなくて、肩を落としちゃってるだけじゃねぇかよ俺。

俺は、いつの間にか相模との隣人生活を結構楽しんでしまっていたのか。プロボッチ失格だろ。

……まぁいい。また元に戻るだけだ。今はちょっと寂しいとか感じちゃっててもその内すぐに慣れんだろ。

「…あの、ひ、比企谷…？」

「ひゃい!?」

ちょっと？急な声掛けはやめていただけないですかね…。不意打ち過ぎて気持ち悪

い声が出ちゃったじゃん。
もう朝の挨拶は済ませたし、あとは別れの挨拶まで用事は無いんじゃねぇの…？
しかしそんな俺のどんよりとしたしょーもない思考は、次の相模の台詞によって、どこか遠くに吹き飛ばされたのだった。

「あっ…と……今日、さ……二限の歴史と五限の現国の教科書忘れちゃったから……見せてもらえない…？」
「……は？」

――開いた口が塞がらないとはこの事である。
どうやらこの隣人付き合いはこれからも通常営業で行われていくらしい。
てか二科目に増えてるし。
「お前やっぱアホだろ…」
俺はそっぽを向いて、若干口角が上がって塞がらなくなってしまった口元をぐにぐにとマッサージしつつそう呟くのだった。

「……あ、あと、その……きょ、今日は雨降ってないけど……なんとなくそういう気分だったから……えと…お弁当作ってきたから……。だから、購買とか行っちゃわないでよね……！」

……どうやら相模さんは、今後の隣人付き合いに関して、今までと同じ通常営業どころか、さらに一歩先へと進む事をご所望なご様子です。

はぁ…こりゃ残り二ヶ月弱のおとなりさんとの隣人生活、なかなかに忙しい事になりそうだな…。

――そんな事を考えつつも、俺は早くも本日のさがみん弁当に思いを馳せるのだった。

了

【特別編】バレンタインと相模さん　上

二月半ば。世間ではなぜかキリスト教の聖人ヴァレンティヌス（英語読みバレンタイン）が時のローマ皇帝に処刑された日を、天にチョコレートを掲げキャッキャウフフと祝っているという、そんなカオス溢れる季節。

とまぁ、大抵そういう捻くれたこと言うヤツって、ただ羨まけしからんってだけの負け組なんだよね。

『クリスマス？　ハッ、俺んち仏教だし！（涙目）』的なやつとほぼほぼ同義。

そこへ行くと俺なんかは圧倒的な勝ち組といえる。だって小町にチョコ貰えるから大好きな日だし。

フハハハハ！　圧倒的じゃないか、我が妹は！

だがつい先日の生徒会主導バレンタインイベント、あれはいかん。

なんで三浦が葉山にチョコ渡したいってだけで、あそこまで大々的なイベントを催さねばならんのか……

まぁ俺の何気ない提案から発展しちゃったんだけどね、てへ！

おかげであの日は偉い目にあってしまった。なんで最近奉仕部周りはあんなに殺伐としてんですかね。

なにが殺伐としてるって、なんか雪ノ下と由比ヶ浜と一色がギラギラしてるんだよね。最近ってか、三学期が始まってちょっとしてからくらい。

三浦が葉山にチョコ渡す為に開かれたイベントだってのに、なぜ俺があの三人から執拗にチョコの味見をさせられなければならんのか……。あ、三人にプラスして川……川……川サキサキも交ざってきてたわ。

あいつら俺が涙目になってんのに、お互い張り合うように牽制するように、次から次へとチョコを口の中に押し込んできやがんの。

てかその押し込んでくるチョコの中に、たまにチョコに似せて錬成されたダークマターが混じってくるからタチが悪い……

あれで、元々誰も呼んでないのに勝手に来ちゃう予定だったらしい陽乃さんが病欠してなかったら、たぶん俺今ごろＩＣＵで、川の対岸の爺ちゃんに手を振ってるとこだったわ。あ、爺ちゃん父方も母方も健在だった。じゃあここはひとまず戸部で。

「……うぷっ……あぁ、思い出しただけでも気持ちわりぃわ……」

これは暫らくチョコとかダークマターとか食えねぇな。ダークマターは元々食い物

じゃなかった。

と、そんな事を思ってうなだれていると……

「ねえ、どうかした……？　体調とか、悪いの……？」

今日も今日とて絶賛教科書貸し出し中のお隣さんから心配のお声が掛かりました。

「……いや、ただの思い出し吐き気だから気にすんな」

「ぷっ、なによ思い出し吐き気って。思い出し笑いならともかくさ。まっ、あんたが授業中に思い出し笑いとかしてニヤついてたら、それはそれでヤバいけどー」

授業中ゆえに小声でそう言って、口元を押さえてクスクスと笑うお隣さん。

相模南は今日も元気です。

＊

あの千葉県民憩いの場での一件から二週間弱。幸いな事に俺の悪い噂はおろか、相模の悪い噂も広まらずにいてくれている。

なにせ相模があの遥とゆっこに啖呵を切ったのだ。だから俺はてっきり、その翌日くらいからは嫌～な噂……それこそ文化祭の真実やら体育祭の相模の泣き喚き騒動の顛末。最悪「相模さんってあのヒキタニと付き合ってるらしいよ～プークスクス」なんて、

有ること無いことエトセトラの下賤な噂が流れてしまうのかもしれないと、ある種の覚悟をしていた。それはもちろん相模も同様だろう。

だが蓋を開けてみれば、相模や俺の噂などは一切流れてはいない。これには些か肩透かし状態ではあるが嬉しい誤算だ。

これはあくまでも単なる想像にしか過ぎないのだが、あの遥とゆっこにも、なにかしら思うところがあったのではないだろうか。

確かにあの場では相模に対する不満を口にしてはいたが、ヘタレで狡猾で薄っぺらくてどうしようも無かったはずのあの相模の涙まじりの真っ直ぐな訴えに、あの二人もなにか感じるところがあったのだろう。

相模がこうして善くも悪くも変わったように、あの二人だって善くも悪くも変わっていく。

別にあいつらだって根っからの悪人なんかではないのだ。相模にしてもあいつらにしても、たまたま意見が食い違ったってだけの、どこにでもいる普通の女子高生なのだから。

と、ここまでで話が終われば単なるイイハナシダナーで済むのだが、別に遥とゆっこの件は、あの日から約二週間の間に起こった事例のほんの一例に過ぎず、むしろ一番の

問題はここからなんだよなぁ……

一番の問題。それは、こうして今日も今日とて机を寄せ合って、一冊の教科書を二人で見ているというこの状況。

こないだなんてあれだからね。相模が「忘れたから見せてくんない？」って言ってきた教科書を、たまたま俺も忘れちゃってた日があってね。そしたらこいつ……

『……あ、ごめん比企谷。忘れたって勘違いしてたみたい。持ってきてたから、今日はウチが見せたげる』

などと言って、結局机を寄せ合って一冊の教科書を二人で見た日があったからね。

なんなの？　俺のこと好きなの？　教科書なんてただの口実で、実はただ俺と机を寄せ合って一緒に授業受けたいだけなのん？　なんて、危うく勘違いして告白してＨＲで発表されちゃうとこだったわ。発表されちゃうのかよ。

さらにはあの雨の日限定の弁当。

憩いの場の翌日、雨でもないのに弁当を作ってきてくれたと思ったら、なんかそれから毎日弁当持ってくる気だったからね、この子。

３日目で気付いて流石にそれは勘弁してくれって止めたら、

『……だ、だよね。……ウチのお弁当、あんま美味しくない……もんね』

と、弱々しい笑顔でこう来ましたよ（白目）

ええ、もちろん言ってやりましたよ。美味いから。美味いに決まってんだろ、と。

俺を自殺に追い込む事が目的なのかな？

でもこの弁当はあくまでも教科書を見せる代わりの対価。そういう約束のはず。

なのにたかだか教科書見せるだけで毎日弁当貰うのは割りに合わない。等価交換にならないただの施しだ。それでも作ってきてくれるというのであれば、あまりにも申し訳ないから、お前がなんと言おうと金払うからな、って言ったら、ようやく……よ、う、や、く渋々折れて、毎日ではなく週一プラス雨の日で、との約束を取り付けられました。

やったね八幡！　……やったのか……？

……そりゃね。いくら俺が相模の卑怯なウルウル涙目攻撃に弱いとはいえ、こっちだって必死にもなりますよ。

教科書にしても弁当にしても、まだ以前は良かった。

クラスメイトの連中には大して気にもされていないはずだと、無理やり自分に言い聞かせていたから。言い聞かせていられたから。

しかし今では他でもない当の本人、相模の口から聞いてしまったのだ。

『相模と比企谷が最近仲が良いらしいと噂になっている』

と。

……そんなん無理に決まってんだろうが！

アホか！　そんなん聞いちゃった後に、毎日毎日何時間も一緒に教科書見るとか一緒に弁当食うとか、一体どんな拷問だよ！

ねぇ、俺を辱めたいの？　恥ずか死めたいの？

そんなこんなで、今日もとなりの相模さんと生暖かい視線を送ってくれるクラスメイト達に精神をごりごり削られながらも、俺　比企谷八幡もなんとか元気です。

＊

しかしそんなお隣さんだが、今日は朝から様子がおかしい。……またかよ。

ここ最近の相模は、なんだかんだで俺との隣人関係にも慣れてきていたようで、たまにもじもじはするものの、基本的には結構普通に接しられていると思う。

まぁ今まで他人と接した事がほとんど無い人生を送ってきたから、なにが普通かなんて知りませんけどね！

なのだけれども……今日の相模は朝から久しぶりにおかしいのだ。なんていうか、すっごく落ち着かない。

チラチラそわそわチラチラそわそわ俺を見てくるこの様子は、まるで初めて教科書閲覧を要求してきた日や初めて弁当を作ってきた日、そして初めて一緒に帰って一緒に道草食った日を思い起こしちゃうかのようなチラそわっぷり。

――あ、これめんどくさいやつだ。それもかなりの高レベルで。

それに気付いた時、途端に俺は早く帰りたくなった。どれくらい早く帰りたいかというと、金曜の夜に残業させられているサラリーマンくらい早く帰りたい。

最近はただでさえクラスメイト達からの生暖かい視線が痛くて堪らないというのに、ここへ来てのこの面倒臭そうっぷりは明らかに死活問題だ。よせ、その術は俺に効く。

そしてこの日1日、俺は相模からのチラそわ攻撃をなんとか耐え切り、帰りのHR終了と共に部室に逃げ込もうと即座に立ち上が……ろうとしたら、なんかブレザーの袖を摘まれててちょいちょい引っ張られてたんで立ち上がれませんでした。

なん……だと？　俺の動きを予想して先回りしていただと……？

くっそ、こうも簡単に捕まってしまうとは。仕方ないな、これは八幡検定3級を贈呈せねばなるまい。

「なんだよ……」

「あ、あの……さ」

おいやめろ。俺の袖を可愛く摘んだままもじもじすんな。

目がぁ！　周りの目がぁ！　……あ、ガハマさん、教室でその顔はマズイですって……

「お、おう」

「きょ、今日……部活終わったら……ウ、ウチんち来ない……？」

「」

＊

ウチんちってなんだろう？　初めて聞く単語ですね。ウチ＋んち。んち？　なにそれ下ネタ？　アラレちゃんが大好きなアレかな？

「ちょ、ねぇ……ひ、比企谷……？」

ウチんちについて深く深く思考を沈めてしたら、そんな不安そうな声と袖をちょい

ちょい引っ張られる感覚に、現実へと引き戻されました。
ウチんち……凄まじい破壊力だ……俺は一体どれだけの時間、この謎めいた単語に時を止められていたんだ。
「お、おうスマン。なんでもない……で、なんでいきなりお前んちに行かなきゃならんの……？」
やだ！　俺ってばウチんち超理解してるじゃない！
なんかアレだよね。ウチ呼び女子って、自分の家に人を誘うの難儀だよね。ウチのウチ来ない？　とか言われても「え、なに言ってんの？」ってなっちゃう。特に字面にしちゃうと、もうなんだかよく分からん。
「あ、いや……だ、だって」
俺の質問に、相模はびくんと肩を震わせた。だからその弱々しい表情はやめて！
「ほ、ほら……明日って学校休みじゃん……？」
「まぁ、……だな」
そう。明日2月14日は我が愛妹の入試がある為、平日にもかかわらず学校が休みなのである。まるで小町の為に休校になるみたいな言い方をしてしまったが、あながち間違いではないのでオッケーだろう。
「だ、だから、ほら。……前に約束した、熱々トロトロの手作りドリアとか……食べにく

ればいいんじゃん……？　とか……？」
「……は？　いや、だってアレはまた今度って」
「？　……だから今日がその今度なんだけど」
「？」
「？」
……あっれー？　なんか認識に隔たりがあるようだよ？
〝今度〟って、決して訪れる事のない幻の未来の約束の言葉なんじゃないのん？
「……ウチ、今日の為に何度か練習してみて、ようやく結構美味しく作れるようになったんだよね」
そう言って、チラチラと横目で窺うように覗きこんでくるお隣さんではあるが、俺としては「はいそうですか」と安請け合い出来るような簡単な案件では無いのである。
いやいや普通に無理でしょ……女子の家に手料理食いに行くとか、それどこのリア充なんですかね。
だから俺は、引きつってしまった顔でその申し出を……
「……そ、そか、やっぱ無理……だよね」
「やべ……！　なんか俺超ドリア食いたいわ。なんなら今日はドリア以外ノドを通らないまである」

即座の降伏宣言。もう無理ゲー。バンゲリングベイくらいクリア不可だよこれ。
「っ……!!　……ホ、ホント比企谷ってムカつくー……食べたいんなら、最初っからそう言えっての……っ」

――ほんの一、二ヵ月前までならば、相模南という人物とこういうシチュエーションが重なった場合、まず確実に疑ってかかっていただろう。
あの悲しげな笑顔も弱々しく遠慮する姿も全て計算づく。狡猾に回りくどく相手を陥れる為の、嘘まみれの狡賢い三文芝居に過ぎない、と。
でも今はこれが本気なのか芝居なのかもう分からん。完全なお手上げだ。
……だって、ムカつくだのなんだのと悪態を吐きながらも、俺の隣でパァッと花が咲いたような笑顔を浮かべつつ、心底ホッとしたように胸を撫で下ろしているこいつの姿を見てしまったら、これが嘘だの芝居だのなんて、軽々しく言えなくなってしまうから。

「じゃ、じゃあさ、比企谷が部活終わるまで教室で待ってっから、ウチんちまで一緒に行かない……？」
「……まぁ、お前んち知んねーし、しゃあねーな……」
「でしょ！　てか……ぷっ、あはは、これで家知ってるとか言われたらめっちゃキモいけ

どー。さ、ウチそれまで友達と話してよーっと。……ん、んじゃ、さ」

すると相模は頬を染めてニカッとはにかむと、胸の高さくらいで小さく手を振り、

「……ま、またあとでね、比企谷……っ」

一言そう口にするとニヤニヤしている取り巻き達の下へとタタッと走っていってしまった。

「……お、おおう」

果して相模の耳に、このどうしようもないくらいキモい返事が届いただろうか？

だってさ、またあとでね、って、なんかすげぇ照れくさくない？

――比企谷八幡。齢１７歳にして、初めて女子の家に手料理を食べに行く事が決定しました。

続く

【特別編】バレンタインと相模さん　中

「えと……家（うち）ここだから……」
「お、おう、そうか」
なにこの新婚初夜みたいな探り探りの照れ臭いやりとり。

――学校の最寄り駅から一旦千葉まで出て、そこから線を乗り換え電車に運ばれること数駅。
さらに到着した駅から市営バスに揺られることしばし。そこに相模宅はあった。
ここに辿り着くまでの道中もそこそこイベントまみれだったのだが割愛しておこう。
まぁ強いて言うなら、基本相模がモジモジしてて、それを見て俺が悶えてたくらいか。
……割愛じゃなくて説明するのも恥ずかしかっただけの話ですね。

にしてもこいつってなかなか遠いとこから通ってんのな。こりゃ毎朝弁当作ってく

るとか大変だわ。やっぱ断っといて正解だったな、などと思いつつ、ぼーっと様子を見ていると、相模はおもむろに鞄から鍵を取り出して玄関に差しこむ。

ん？　相模って鍵っ子なのか？

「あ、家って共働きでさ、ウチが帰って来た時は基本誰も居ないんだよね」

そんな俺の視線を感じ取ったのか、相模は自身の鍵っ子な生い立ちを説明しながらカチャリと鍵を回す。

「ほーん」

なんてことない空気を醸し出して適当な返事を返した俺ではあるが、実のところ内心超安心！

いやぁ、実は超緊張してたんですよね。促されるまま無抵抗でここまで来ちゃったけど、これ親御さんになんて言ってお邪魔すればいいのん？　て。

だって可愛い娘がある日突然目の腐った異性なんて連れてきたら、俺なら即始末する自信まである。

まぁ平日の夕方なら父親は居ない可能性が高いから、問答無用に始末されちゃう心配はないかもではあるが、母親は母親で通報の危険性もあるからね。

なのでとりあえず第一関門は突破だが……ん？

いや待て、じゃあこれから俺は知らない天井の下で、相模と二人きりで過ごさなきゃ

ならないの？

「……んで今日は両親とも残業らしくって、どっちも結構遅いみたいだから、あんま気にしないで遠慮しないで上がって」

マジかよ……ただ二人きりで過ごすだけじゃなくて、遅くまで誰も帰ってこないという新たな情報が追加されました。遠慮しないどころか相模宅にお邪魔するのをご遠慮させていただきたい気分です。

てかなんでわざわざそんなこと言うのん？　長居確定なのかな？

「……えと、ど、どうぞ」

「……ひゃい」

どうも。意識しすぎで超キモい自意識の化け物　比企谷八幡です。

若干の武者奮い（なにに対して猛ってるんですかね）を起こしつつ、相模が用意してくれた来客用のスリッパに足を通すと、なぜかクスリと隣から小さな笑いが聞こえた。

え、なに？　キモい噛みっぷりに鼻で笑っちゃった？　それともしかしてスリッパにアロンアルファーとか仕込んであった？　それを見た相模がほくそ笑んだの？　なにそれもはや陰湿な虐め！

「……んだよ」

「あ、ごめん！　……な、なんか、うわぁ、家に比企谷が居るんだーって思ったら、すご

い不思議な感じがして、思わず噴き出しちゃった……！」
やだ！　なにその眩しいくらいのはにかみ笑顔！
文化祭時の相模と別人過ぎて、さがみん宇宙人成り代わり説を唱えちゃうレベル。思わず惚れて告白して以下略しちゃうだろうがこのやろう。
「……ああ、そう。つうかお前が連れて来たくせに不思議もなにもねーだろが……」
とは言うものの、友達が初めて家に来た時って、なんか妙な違和感というか照れ臭さがあるよね。なんかコイツ俺ん家に居るんだけどー！　ってね。
もちろんお察しの通り、初めてもなにも友達を家に誘った事も来た事もありませんがなにか？　でも友達じゃないけど、知り合いが家に来て妙に照れ臭かった事ならあるんだからね！
……サブレ預けに来た由比ヶ浜だけど。
「だってしょーがないじゃん、比企谷がウチん家に居るって光景をいざ目の当たりにすると、やっぱ超可笑しいんだもん」
へへ～と悪戯っぽく笑う相模だが、なんだか嬉しそうに見えるのは気のせいでしょうか。はい、気のせいです。
「……さいですか」
「そそ、超笑えるー！　……って、いつまでも玄関で話してたってしょうがないじゃん

ねー。んじゃホラ、リビングこっちだから早く行こっ」
「へいへい」

――こうして、ぱたぱたと愉しげに鳴るスリッパの音に連れられて、俺は人生初の同級生女子のお宅訪問経験という快挙を成し遂げたのであった。

あ、文化祭ん時の雪ノ下んちへの訪問は経験から除外の方向でおなしゃす。だってあいつんち豪華すぎるわ綺麗すぎるわで、お宅訪問というよりモデルルーム見学にしか思えなかったんですもの。

× × ×

「……」

なんという所在の無さだろうか。やはりリビングでテレビでも観ときゃ良かったな……

相模にリビングダイニングに通された俺は、なんとも幸せな家庭のひとコマのような光景の中、とてもとても肩身の狭い思いで縮こまっています。

『比企谷ってもうお腹空いてる？』
『おう……まぁ、な』
『じゃウチさっそく作るから、比企谷はリビングでテレビでも観てたら？』
『……あー、いや、作ってもらってる間ひとりであっちに座ってんのもなんか悪いし、人んちでひとりでテレビ観てんのもなんか落ち着かねーから、なんか手伝える事あっかも知れんし俺もこっちに居るわ』
『そ？　たぶん結構時間掛かっちゃうし手伝いとかしなくていいからね？　比企谷って性格悪いくせに変なトコ律儀だよねー。お客さんなんだから気にしなくてもいいのに。んー、でもま、それならテーブル着いて待ってれば？』
『了解。あと性格悪いのくだりらへん、一言余計じゃないですかね……』
『ひひっ』

そんな流れで俺はダイニングテーブルの席に着いているのだが、なんだかとても居心地が悪い。……いや、居心地が悪いというよりは、なんとも気恥ずかしくて落ち着かない、という方が正しいのだろうか。
なにせ目の前では制服にエプロン姿の同級生が、なんとも幸せそうに、鼻歌を口ずさみつつフライパンとおしりを振っているのだ。

ミニスカートな制服にエプロンってなんかいいよね！　つい先日バレンタインイベントで雪ノ下達の制服エプロン姿を見たばかりだというのに、女子の家で二人きりでのミニスカエプロン姿という背徳感がなんかやばい。目のやり場と気持ちのやり場に困る事この上ない。

なんで俺もこっちに残っちゃったんだよぅ……今からやっぱリビングで待ってるとか言えないよぅ……

ダイニングに残った俺をそわそわと気にしつつ、エプロンを照れくさそうに装着した相模はレッツラクッキング！　と、てきぱきと作業を進めている真っ最中である。

まずはすぐさま炊飯器のスイッチを入れ、挽肉と刻んだ野菜を炒めてトマトを投入し、普通ならドリアには不要のミートソースを作る。

通常ドリアとは米の上にホワイトソースとチーズを乗せてオーブンで焼くだけの料理ではあるが、そこはさすがさがみん。サイゼのミラドリ風に、ちゃんとミートソースも掛けてくれるようだ。

そして現在、ヘラでフライパンの中身……弱火で薄力粉とバターを混ぜ合わせたものに、少しずつ牛乳を流し入れて激しく掻き混ぜている。その激しさは、あの頑丈なフライパンナちゃんが思わず悲鳴を上げるほどだ。「ふぇぇっ……そ、そんなに激しく擦ら

ないでよぉう……！　そんなに激しくされたら、自慢のお洋服（テフロン）がボロボロになってすっぽんぽんになっちゃうよぅ……！（ＣＶ寿美菜子）」

こいつなかなかやるな。まさかミートソースだけでなくホワイトソースまで一から作るとは思わなかったわ。どっちか、もしくはどっちも缶詰とかで済ますもんかと思ってた。

ほんのひと月前にはあんなにいびつな弁当作ってたくせに、いつの間にこんなに料理の腕を上げてたんだか。

いやまぁこいつの料理の腕が日増しに上がっていっていたのは、みるみる旨くなっていく相模手作り弁当を、こいつの隣で食っていた他ならぬ俺が一番よく知ってるんですけどね。

ったく。なにが手伝う事あっかも知れんだよ。小六家事レベルの俺には手伝える余地なんか全然ねーよ。

これは専業主夫を目指す者として一大事。このままでは家事は奥さん任せになっちゃって働きに出されちゃう危機が現実味を帯びてきたぜ。

……いやいや、べ、別に相模が奥さんになるとか、そういうんじゃ全然ないんだから

ね!?

そんな益体もない事を考えてひとり悶えていると、不意にピーピーと電子音が鳴り響き、気付けばダイニングは炊きたての米の甘い香りに包まれていた。

その電子音と共に相模の作業もタイミング良く終了したようで、彼女はパカッと炊飯器の蓋を開けるとグラタン皿に米を敷き、出来たてのホワイトソースを回し入れる。

そしてその上になんとも旨そうなミートソースを掛けると、たっぷりとチーズを乗せてオーブンレンジへＩＮ。

「比企谷お待たせ。あと十分もしたら出来るからね」

「おう……なんか悪いな、手伝えること無くて」

「だから最初っからいいっつったでしょ？　もうちょいだから大人しく待っててねー」

「……へーい」

お母さんと子供かよ。もちろんフォークとナイフを持った手でテーブルをばんばん叩くような真似はしません。ちゃんと大人しく待ってますとも。

包丁の音も炒める音も消失したキッチンでは、オーブンレンジが頑張ってドリアに焦げ目を付けてくれているうぉーんという音と、手際よく洗われていく調理器具たちの音だけがカチャカチャ響く。

……あ、じゃあその洗い物だけでも俺がやれば良かったじゃねーか。まぁだったらせ

めて食い終わった後の食器くらいは洗うかなー、なんて考えつつ、次第に辺りに充満し始めるドリアの旨そうな香りに鼻腔をくすぐられながら、ルンルンと食器を洗っている相模の後ろ姿を頬杖ついてぼーっと眺めていると、やべぇなんかこういうのが幸せとかいうやつなのかも……なんて事は一切頭によぎったりなんかしてません！

あっぶね！　俺ってばなに油断してアホなこと考えちゃってんでしょ！　やっぱ頭よぎっちゃってたんじゃねーか。

「どしたの？　なんか顔真っ赤だけど」

「ふぇ!?」

びびびびっくりしたわ！　悶々と下らないこと考えてたら、いつの間にか洗い物を終えた相模が顔を覗きこんでいたらしい。

なんだよふぇって。キモいな俺。

「もしかして調理熱でキッチンちょっと暑かったりした？　換気しよっか？」

「……いや、大丈夫だ。問題ない」

「そ？　じゃあやっぱ暑かったら言ってね」

そう言ってぱたぱたとオーブンレンジを覗きに行く相模さん。

いやマジでぼーっとしてる時に急に人の顔を覗きこむのは心臓に悪すぎるんでやめてね、いやマジで。

「あ、そろそろいい感じかもー」
するとレンジの中を覗きこんだ相模からそんな声が上がった。どうやらついに完成のようだ。
がちゃこんとレンジの扉が開け放たれると、キッチンはミートソースとチーズがとろけて混ざり合う、かぐわしいドリアの香りに包まれた。

× × ×

「いただきま～す」
「い、いただきます……？」
完成したドリアと、ついでに作ってくれていたポトフが並べられたテーブルで、お手々の皺と皺を合わせて幸せ☆ないただきますのご挨拶。
そこはいい。そこまではいいのだ。
……しかし、これは……
「な、なぁ相模」
「ん？　どうかした？　早く食べよ？　せっかくの熱々とろとろが冷めちゃうんだけど」

隣できょとんと可愛らしく小首を傾げる相模に、俺はどうしても言わなければならない事がある。

「……なんでお前、隣に座ってんの？　普通こういう場合って向かいとかに座るもんじゃねーの……？」

そう。料理を並べ始めた時点でそこはかとない違和感を感じてたんだけど、なんかこいつ、とても自然な流れでぬるっと隣の席に着いてるんだよね。カウンター席かよ。もしくはバカップル。

「え、……あ」

そう言われてハッとすりさがみん。あ、これ素のヤツや。

「ご、ごめん……！　ウチ超自然にこっちに自分のぶん並べちゃってた……っ」

あわあわとパニくる相模は、もはや真っ赤な茹でみんと化し動揺しまくる。

「……あ、や、別にそこまで気にしてるわけでは無いんだが……あ、あーアレか？　お前んちって、こうして食卓囲うのが普通とかなのか？　もしくはそこが普段のお前の定位置だから、そこに座るのが普通だったってだけなんだよな」

まぁ食事の席が二人の場合、向かい同士にポジショニングするのが一般的かもしれないが、もしかしたらそれは単なる思い込みなのかもしれない。二人きりの食事なのに、このポジショニングでは不自然だろと部外者の俺が果たして言い切れるのだろうか？

否。いま俺が座ってる席が相模の母ちゃんの定位置で向かいが父ちゃんの定位置。そして母ちゃんの隣が相模の定位置だとしたら、相模的にはこの位置取りはなんらおかしくもない自然なポジショニングなのだろう。ならば母ちゃんと二人で食事を採る際は、こうして横並びになったとしともおかしくないではないか。

むしろこの場で異物なのは俺なのだ。郷に入っては郷に従え。先人たちの教えに従うならば、いま俺はとても余計な事を言っているのではないだろうか？　たかだか異物でしかない俺が、勝手な思い込みでなにも知らない相模家の作法を否定しようとしたのだから。

なんという傲慢だろうか。その身勝手な傲慢さで、この家の住人たる相模南をここまであたふたさせてしまった己の矮小さに情けなくなると同時に、なんとも申し訳ない気持ちになってしまった。

すると相模はなんとも気まずそうな顔でおずおずと俺を見る。

やめてくれ、そんな顔すんな。お前がそんな辛そうな顔する必要なんてねぇだろ。申し訳ないのはこっちの方なんだ。

そう言おうと思ったら、相模は俺の向かいの席をぴっと指差した。

「……やー、別にそんな事ない……けど。……そもそもウチの普段の席ってそっちだし……」

違うんかい！　俺、ひとりでどんだけ無駄なこと考えてんだよ。なにが先人たちの教えだなにが傲慢だ恥ずかしい。

「……は？　じゃあなんでお前こっちに座ったの……？」

「あー、やー……」

相模は、林檎園に無数に成っている数あるリンゴの中でも、特に熟れきったリンゴの如く真っ赤に染まった顔を俯かせる。

「その……なんか最近、比企谷の隣が安心出来る……って、ぎゃー！　ち、違う違う！　安心とかじゃないから！　そそそういうんじゃなくって……！　ひ、比企谷と居るトキはなんか隣に居るのが当たり前みたいになっちゃってるから……だからつい自然に隣に座っちゃったというか……？　ま、まぁ……そんな感じ……です」

「そそそ、そうか」

「うん……」

ちょっと待って！　思ってたより八割増しの恥ずかしい答えが返ってきちゃった！

なんだよ俺の隣が自然って。しかも言い間違いとはいえ安心とか言い掛けちゃってたからね？　ドキドキしてハートがキャッチされちゃうわ。

「て、てかマジでごめんね、二人きりのテーブルでウチと隣同士とか嫌だよね……！

さ、移動移動……っ……」

そう言って相模はカチャカチャと自分の取り分け皿やらスプーンやらを移動させようと立ち上がる。

その表情はなんとも気まずそうでもあり……なんとも淋しそうでもある。……うん、アレだね。シュンて感じ。

「……はぁぁ～」

ホントこいつズルいよなぁ。セリフから表情まで全部卑怯。こんなの追い返せるわけねぇだろ……

いつもの事だからいっかーと、半ば諦めにも似た悟りを開いた八幡大菩薩たる俺は、深く溜め息を吐くとぶっきらぼうにボソリと呟く。

「あー、なんだ……めんどくさいし、別にわざわざ移動する必要も無いんじゃね」

「え」

「……グラタン皿とか超熱いし、移動すっためにに、またあっちからミトン持ってくんのもめんどくせぇだろ……。それに――」

そしてここで、今やお馴染みとなりつつある照れ隠し界の天地魔闘の構えが炸裂する。俺は頭をがしがしと掻いて、ぷいっとそっぽを向くのだ。

こんなん恥ずかしすぎて頭でも掻いてないと言えるわけねぇだろ。

「……お前の言いたい事も、まぁ分からんでもないしな。……なんつーか、俺的にも……相模は向かいに居るよりも隣に居る方が……その、なんだ、お、落ち着くわ……」

きゃー！　やだなにこれもう死んでもいいかな？

……許すまじ相模……！　この孤高のキングオブぼっちに、こんなハラキリモノの恥辱を味合わせるだなんてぇ！

「落ち……着く、の……？　ウチが隣に居る方が……？」

「ば、ばっかお前、そういうんじゃ無くてだな。学校では四六時中隣の席に居るお前が向かいに居ると落ち着かないっつーだけの話だかりゃ」

惜しい！　頑張ってたのに最後の最後でちょっぴり噛んじゃった！

「そ！　そっか！　比企谷も……隣の方がしっくりくるんだ……！」

でもこのお隣さんには、そんな残念で悲しい噛みっぷりなど、どうでもいいほんの些末な出来事のようで。

「……そっかそっか」

俺の恥ずかしいセリフにぱぁっと破顔したかと思えば、次の瞬間にはそのセリフを噛み締めるかのように、何度もそう呟き、うんうん頷いていた。

なんなのこの子、ちょっと情緒不安定すぎないかしらん？　と、恥辱で涙目な横目でチラチラ様子を窺っていると、

「……しゃ、しゃーないなぁ～！」

相模は形の良い胸をむんっと張り、まるで勝利宣言でもするかのように、にへっと微笑んで偉そうにこう宣いやがるのだ。

「じゃあしゃーないから、ウチもこっち座っててあげよっかな～」

「……そりゃどうも」

――その後無言で食った熱々とろとろドリアはとてもとても美味しかった……んだと思う。

でもさ？　このこっ恥ずかしい空気の中で、食ってる様子を超不安そうな顔でじぃ～っとガン見されたら、味なんて分かるわけないでしょうが……

続く

【特別編】バレンタインと相模さん　下

食事が終わると、そこは途端にまどろみの空間へと様変わりする。なんか眠いにゃー、朦朧として意識が飛んじゃいそうだにゃー。

てかぶっちゃけ、この後どうすればいいのか分からず、困惑で頭がくらくらしてるだけだったりする。

本日俺は、以前図らずも約束してしまったことを果たすべく、こうして相模家へと馳せ参じた。

だからどんなに落ち着かなかろうが照れ臭かろうが、目的を果たすという目標が目の前にあったからこそなんとか耐えられた。

だが今の状況はどうだ。

本日の目的――相模の手作りドリアを美味しく頂く――を達成した今、俺にはこの場所に留まる理由がない。

にも関わらず、なぜ俺は未だに帰れないの？　俺の目的は相模の手作りドリアを美味しく頂くのであって、決して相模を美味しく頂くではないのよ？

なのになんで相模家のリビングでソファーに座ってテレ東アニメ観てるんだってばよ。相模をソファーの隣にはべらせて……

「へー、ウチ普段アニメとか全っ然観ないんだけど、けっこー面白いんだー」

「……」

やめてぇ！　あんまり興奮して動かないでぇ！

キミがちょっと動くたびに、キミの髪から制服から体から、ほわんと甘くイイ匂いが漂ってくるんだよぅ……

てか近い。確かに隣の方が落ち着くとかおかしなこと口走っちゃいましたけども、このちっちゃめのラブソファーで隣に座るのはさすがに近いですってば。

食後のティータイムを、俺の好きそうなアニメでも観て過ごそうよと、こいつは食事が終わった途端に俺をリビングへと誘い込んだ。べ、別にアニメなんて好きじゃないんだからね！　普通の高校生よりはちょっと多めに観てるくらいなんだから！

食い終わったら片付けだけしてすぐ帰ろうと思ってたところに間髪入れずのソレだったから、呆気に取られた俺は拒む事も抵抗する事も帰る事も出来ず、あっさりとリビングへと連行された。

相模はテレビを点けて俺を強引に座らせると、コレ観て待っているようにと強く言い

聞かせ、キッチンから紅茶を持ってきて今に至る。
温かい紅茶が注がれたカップを両手で持ち、テレビ画面に集中している相模を横目に見て思う。
――こいつ、最近の相模にしては珍しく強引じゃね？――
と。
正直な話、俺はこんな状況に陥るかもしれないという覚悟がどこかにあった。
食事が終わる→じゃあ帰るわ→え……？　もう帰んの……？
という、いつもの抗い難い卑怯なルーティーンに阻まれ、なかなか帰してもらえないかも……という覚悟は確かにあったのだが、こんな形で足止めされるのはちょっと予想外だ。
どうしたのだろうか……ともう一度横目を向けると、相模は相も変わらずテレビに釘付け。そんなにアニメが面白いの？
「……」
いや違った……ここに来てまさかの面倒くさいやつだった……アニメに集中してんのかと思ったら、実は全然集中してなかった。

これはアレだよぅ……なんか俺に用事があるんだけど、言いづらくてこちらの様子をもじもじ窺いながらそわそわしてる例のアレだよぅ……

こいつ、テレビを観るフリして実は超そわそわしてやがった。

こうなってしまうと、俺には手の打ちようがない。

無視して帰っちゃうか、黙って相模が口を開くのを待つかの二択しかないのだが、前者を選ぶと心が傷んでしまうのでもちろん出来ません。なんならどんな顔をするのか想像しただけの今でさえ心が張り裂けちゃいそうまである。飼い馴らされすぎだろ。

――ああ、めんどくせぇなぁ……

そう思いながら、小説の文字列だけを追うかの如く、心ここに在らずでただ画面を見つめる事およそ一時間。長いな！

ついについに、ようやく相模が動きを見せたのだ。

「……ん！　んん！　あ、あー、……けふんけふんっ」

なんだそれ可愛いな。

わざと咳払いをして自身に注目を集めようとするこの行為。

なんだかとても見慣れた光景ではあるのだが、どこぞの熊男のげふんけぷこんおこぽーんとはエラい違いだ。

「……どうした。のど飴でも欲しいのか？」

そんなわきゃ無いんだけど、ここは一応咳払いに触れといてあげる優しい八幡です。

「飴!?　ほ、欲しい！　……って、ち、違うから！　い、今はそういうんじゃなくってぇ……」

……び、びっくりした。なにこの子、ほんの冗談で言っただけなのに、なぜにそこまで過剰に飴に反応したのん？　どんだけ飴に飢えてるのかしらん？　まぁ確かにこいつ飴が好きだったけど。

「そ、そのー……」

訝しい視線を不躾に送っていると、相模はまたもじもじしはじめる。

……おい、ようやく動き出したんだから、またスタート地点に戻らないでくれよ？　こっからまた一時間テレビの前で待機はさすがにキツいっす。

そんな願いを知ってか知らずか、相模は決してこちらを向かないように真正面を見据えながらも、唇を尖らせこっちをチラリあっちをチラリと目を泳がせつつ、なにやらソファーの肘掛けと自分の身体の間の隙間をガサゴソと弄り始めた。

ふむ。どうやらスタート地点に戻ることは無さそうで一安心なんだけど、こいつなにしてんの？　自分とソファーの間になんか詰まってんの？

すると相模はくるりとこちらを向いてきゅっと目を瞑ると、すーはーすーはー呼吸を整える。別に目を瞑ったからといって、これはまさかキス待ち!?　とか期待なんか一切

していない。してないったらしてない。

そして……

「……は、はいコレ！　あ、あんたにあげる……っ」

なんと自分とソファーの間から、ピンクのリボンでとても可愛くラッピングされたひとつの包みを取り出したのだ。

そしてこいつはその包みを俺の胸元にとんと押し付けてきた。

「……は？　え？　な、なにこれ」

てかいつの間にそんなところにこんなの仕込んであったの？　紅茶と一緒に持ってきて、ソファーに座る時にこっそり背中に隠してたのだろうか？

「そっ……そのっ……あ、明日……学校休み……だから……っ」

これはなにかと訊ねたのに、返ってきた答えがこれである。Ｑに対してのＡが成立してなくね？

「……あ」

え、えっと……マジで？　いやいやいやいや……そんなわけねぇだろ。だって相模だぞ？　あの相模が俺と一緒に聖ヴァレンティヌスの処刑された日を祝うとか、そんな

の有り得ないだろうが……

――有り得ない……か。

確かに有り得ないよな、ちょっと前までの俺とこいつの関係だったら。学校一の嫌われ者な俺と、そんな俺を蔑み忌み嫌う相模。

でも今はどうだろうか。本当に有り得ないと断言出来るのか？　……答えは否だ。有り得ないなんて事は有り得ない。

少なくとも今の俺と相模の間には、なんて言ったらいいのかは分からんけども、なんつーか……よく分からん変な絆くらいはあるように感じている。

毎日の生活のなか、決して必要以上の会話なんかはしなくとも、嫌々ながらも毎日隣で教科書見せて毎日のように飴を貰う。たまに隣で弁当食って、そしてこうして家に呼ばれて手料理だって振る舞われるのだ。

これでなんの関係性も無い、なんの絆も無いだなんて言ったら、こいつに……いや、こいつにも俺自身にも、とても失礼な事のように思う。

そしてこいつからのこの思いがけない贈り物を『貰う義理が無い』『貰えるはずが無い』だなんて勝手に否定するのも、また失礼だ。

「その……なんだ」

だから俺は、「なんで俺に?」などと余計な言葉を口にするのはやめておこう。

こんな捻くれ者の俺にだって、人様に迷惑をかけないという矜持がある。ならば渡す事を一時間も躊躇い、それでもこんなにも弱々しく情けない顔を向けて、震える手で頑張って渡してくれた相模の気持ちくらいは、素直に受け取ろう。

「さ、サンキューな……」

「っ……！　うん！」

素直に受け取った俺に一瞬驚いた表情を浮かべながらも、次の瞬間にはぱぁっと花を咲かせた相模南の素の笑顔に、俺は柄にもなく胸がぽかぽかと温かくなるのを感じるのだった。

×　×　×

リビングは今や嬉し恥ずかし桃色空間へと変貌していた。

相模からバレンタインの贈り物を手渡されてからというもの、お互い相手に視線を向ける事もなく、ただただ時間ばかりが過ぎていく。

この空間に響くのは、先程まではまったく聞こえていなかったはずのカチコチカチコ

チ喧しい時計の音と、もはや誰の注目も浴びていない、テレビの騒がしい音だけ。
ふぇぇ……この空気どうしたらいいのん？　俺からなにか話し掛けなきゃならないのん？　マジかよ難易度高すぎんだろ。でもこのままじゃ埒が開かないのもまた事実。
ではこちらから一体どんな話題を提供するべきか考えた時、ふとひとつの考えが舞い降りてきた。
――そういやコレって、なにチョコと考えればいいんだ？
と。
噂によるとバレンタインチョコには様々な種類があると聞く。本命チョコは語らずもがな、友チョコ義理チョコ自分チョコ。
ではいま俺の手に大事そうに抱えられているこの包みは、一体どれに区分されているのだろうか。
本命チョコ……うん、無いな。自分チョコ……いやいや俺さがみんじゃねーし。
ではやはり友チョコか義理チョコが相応しい区分なのだろうが、……うん、そういや俺と相模って友達なのだろうか？　友達って、お互いにこう……「俺とお前友達な――！」みたいな宣言とかって必要なのかな？　悲しい事に友達が出来た事がないから、ぼっちの人にはそれが分からんのですよ！
するとこれはやはり義理チョコってのが妥当な線だろう。てか考えるまでもなく義

理だろ。だって相模はあの日、サイゼで俺にこう言ったのだから。
ウチの大切なおとなりさん……と。
「……」
いやいや今更だけど大切なおとなりさんってなんだよ。どんなカテゴリーに入んだよそれ。
……でもアレだ。確かに意味は分からんが、これは相模に話題を提供するという目的においては、なかなかのナイスチョイスでは無かろうか？
これならばこの照れ臭い空気を一気に打破し、いつも通り軽く憎まれ口を叩きつつも苦笑し合えること請け合いである。
「そ、そういや……だな」
「ふぇ……!?」
なんだよふぇって。可愛いなおい。
「こ、コレってアレか？　義理チョコならぬ、隣人チョコとでもいうヤツか？」
……隣人チョコ。この日、また新しいバレンタインの形が生まれてしまった。これは流行る！　流行んねーよ。
しかしどうよ相模。この話題の振り方はなかなかのものだろう。
いくら義理チョコとはいえ、あの相模が俺にチョコを渡したという照れ臭さからこん

なにもむず痒い空気が漂ってしまっていたが、これならばこの義理チョコ騒動も笑い話で済ませられるだろうよ。

ほれ、早くしろ。「ぷっ、なによ隣人チョコって。あんたマジでバッカじゃないのw」って俺を蔑む返しからおしゃべりを開始してくれりゃいいんだよ相模！　そしたらこの嬉し恥ずかし桃色空間は一発で打破されるんだ！

さぁ、ばっちこーい！

――だがしかし、残念ながらそこには俺の望む答えは返って来なかった……

「……えと、そのぉ」

俺からの問いに、一瞬だけほんの少しの哀しみを滲ませた困惑の表情を浮かべた相模。

しかし、その目にはすぐさま力が宿る。「……んっ！」小さくガッツポーズを取って自身を鼓舞し、じっと俺を見つめてくる。近い近い。だからこのソファーじゃ見つめ合うには近すぎィ！

「そ、それっ、ぎ、義理チョコでも隣人チョコでもないから！」

……な、なんと相模は……隣人チョコには一切のツッコミが無かった……！

いや驚くのはそこじゃなくて。

「こっ、これはそのっ……！　ほ、ほん」

お、おい、ちょっと待て……！　なんだよこの、さっきまでのむず痒い桃色空間なんて目じゃないくらいの変な空気……！

え、嘘だろ？　さ、相模が俺に……ほ、本め……

「本……っ……くぅっ！　ほ、ホントは友チョコだから！」

デスヨネー。

やだ！　僕もう穴掘ってくりゅぅ！　これだから嫌なんですよ！　なんで期待しちゃってんだよ、バカ！　ボケナス！　八幡！

とまぁ冗談はここまでだ！（白目）

もちろん当然の如く本命だなんてちっともこれっぽっちも万が一にも思ってなかった俺は冷静に頭の回転をスタートさせる。

……友達、か。

本当は少しだけ期待していた。俺と相模って、最近友達みたいじゃね？　って。だからもしかしたら相模は俺の事を友達と思ってくれているのではなかろうか……って。

でもこいつ言ってたから。比企谷はおとなりさんだからって。だから俺も淡い期待はしないようにしていた。相模が俺を友達と思ってくれてるわけないだろう、と。

そんな相模がこうして直接友チョコをくれたのだ。正直、嬉しくないはずはない。嬉しくないはずは無いのに、俺はまた余計な事を考えてしまう。

本当に俺を友達と思ってくれているのか？　こんなに簡単に信用してしまってもいいのか？

「……あ、っと、その……ごめん！　勝手に友達扱いしちゃって！　ウチと友達なんて、嫌……だよね」

そんな、あれこれと色んな事を考えていたら、相模はまたもや不安そうに顔を強ばらせ、シュンと俯いてしまった。

どうやら俺は、難しい顔をしてしまっていたらしい。こんな時でさえ無駄に相手の言葉の裏を探ってしまう、俺の自己保身から来るしょーもない悪い癖だ。

「……すまん、別に嫌とか、そういうんじゃなくてだな……なにせあの相模が俺に友チョコってのが意外すぎて、ん、まぁ驚いてる、な。だってお前、あくまでもお隣さんって言ってたし」

相模は、別に嫌なわけではないという俺の言葉に少しだけ安心したのか、強ばらせていた顔を上げ、

「それは、ね……？　そのー……」
あはは～と頬をかりこりしながら、相模はなんとも言いづらそうに苦笑する。
「ほら、あとひと月ちょっとしたら、ウチらって三年になんじゃん？」
「おう、そうだな」
「そしたらさ、ウチと比企谷、違うクラスになっちゃうかも知んないし――」
「……おう」
「仮に同じクラスになれたとしたって……もうお隣さんになる確率なんて、天文学的なレベルで無いじゃない……？」
……さすがにそれが天文学的な数字かどうかまでは分からんけど、でも確かにたまたまた同じクラスになって、そしてたまたまた隣の席になる確率なんて、ほぼ無いに等しいだろう。
なんか今の生活――こいつが隣の席に居るという事が当たり前になりすぎてて、そんなこと考えてもいなかったな。
「……そこでウチは思ったわけ。あ、このままじゃあとひと月ちょっとで、ウチと比企谷って完全な無関係になっちゃうじゃん……って。……それはちょっと、嫌……だなって」
「そ、そうか」

なんだこれ。また妙にムズムズしてきちゃったんだけど。
無関係になるのが嫌とか、どうしようなんか超恥ずかしい！
「だからっ……ちょっと、関係を一歩だけでも進ませたいなって……お、思いましゅた」
「……そうですか」
あまりの照れ臭さに、向かい合いながらもお互い顔を合わせられない。これだったらさっき勢いでチョコ貰った時の方がよっぽどマシだったわ。
すると……相模は俺の手に抱えられていた包みをガサリと強引に奪いとった。
えぇ……？　まさかの没収？　人生初の肉親以外からのチョコがぁ！

「あのっ、比企谷！」
「ひゃい」
相模は両手で持った包みを、再度俺に向けてびしぃっと突き出す。
「もっかいやり直し！　順番逆になっちゃったけど……と、とりあえずウチとまずは友達になって下さい！　う、受け取って貰えますか……っ？」
〝とりあえず〟とか〝まずは〟とか気になる要素はたっぷりなのだが、相模はそう叫んで深く頭を下げた。その顔は、またも茹でダコのように赤く紅く染まっている。
そんなに何度も何度も真っ赤になれるなんて、キミはタコのフレンズなんだね！　す

ごーい！　あ、これ友達申告されてるから、同じように赤くなっているであろう俺もタコのフレンズになっちゃうんだね！　たのしーい！

「……ま、まぁ、その……なんだ」

そんな新しく仲間入りしたタコのフレンズたる俺は、相も変わらず頭をがしがしそっぽを向いて、バレンタインの贈り物をぶっきらぼうに取り返すのだった。

アレだ……俺は一度貰った物は、なにがあろうと手放さない主義なんだよ……

「よ、よろしくおにがしまっしゅ……」

比企谷八幡十七歳。

友達居ない歴が年齢と一緒だった俺が、十七回目のバレンタイン前日に初めての友達が出来ました。

終わり

☆オマケ☆

「あのっ、ホワイトデーのお返しの件なんだけど……」
「……え、もうお返しの話……？」
やだこの子ったらちょっと現金すぎやしませんかね。もしかしてお返しの為に友達になったのかな？　何倍返しをご注文でしょうか。
「……飴が……いい、なー。て、てか、飴以外ならお返しなんて要らないまである！」
飴……？
び、びっくりした。どんな金銭的要求が来るのかと思ってたら飴なんかでいいのん？
「は？　なんで飴なんだよ……ま、まさか飴じゃなくてアメジストじゃねーだろな……何十倍返しすりゃ許してくれんだよ」
「別に宝石なんか要求してないから！　あ、飴でいい。飴がいい。……言っとくけど、定番だからってクッキーとかマシュマロは論外だから！　……普通のでもなんでもいいから……！」

なんでクッキーとマシュマロは駄目なんだよ美味いだろ。
でもそういやこいつ、さっきもやけに飴に食い付いてたっけ。どんだけ飴ラブなんだお前。
「だからなんで飴なんだよ」
「べ、別にいいでしょ！　てかホラ、飴はウチのエネルギー源だって言ったじゃん！　授業中とか勉強中とか、脳の活性化……？　とかの為に、よく舐めてんだっての……」
「……ほーん」
教科書はあんだけ忘れるくせに、脳の活性化の為に糖分補給は忘れないとか、目的の方向性が間違ってませんかね。
「だから飴ね、飴。飴ちょうだい」
はぁ～……ま、何倍返しを要求されんのかと思ってたから、ただの飴玉で済むならこちらとしても万々歳だし、そんなんで喜んでくれるんならそれでいいか。このままだと飴がゲシュタルトしちゃいそうだし。
「……わぁったよ。じゃあ飴やっから」
「マジで!?　やっっ……たぁぁ！」
「……」

おいおい、こいつ本日一番の大喜びなんだけどなにこれ？　飴くらい自分でいくらでも買えんだろうに。

「約束だからね！　楽しみにしてるからね！」

「……お、おう」

飴ごときでのあまりの剣幕に軽くドン引きしつつも、初めて出来た友達の心底嬉しそうな真っ赤な笑顔に、俺もついつい赤くなって微笑んでしまうのでした。

☆おしまい☆

からかい上手の相模さん【攻撃編】

ぽよん、と。それは不意に肘に当たった。

とてもとても柔らかな感触のそれは、言うなれば、アンパンマンの唯一の友達でもある愛と勇気を、男の子に魂に深く刻み込んでくれる素晴らしき宝物。

不意にとは言ったが、正確には不意とは呼べないのかもしれない。

なぜなら先ほどからそれがずっと当たりそう当たっちゃいそう当たっちゃったらマズいよね？　と気を遣っていたからだ。気を遣っていたにも関わらず当たってしまった以上、それは不意にあらず。

一応先ほどから当たらないように気をつけていたのだが、こちらが一方的に気をつけていようとも、お隣さんが俺の気遣いに気付かず距離を詰めてくれば、当たってしまうのは致し方のない事なのだ。むしろ必然である。

いやまぁ、当たらないように無理な体勢のまま固まってたから腕がつりそうになっちゃって、力を抜いた途端にぽよんとむにょんと当たっちゃったんですけどね。

「……ちょっ？　い、いま比企谷、ウチの胸肘でつついたでしょ!?　し、信じらんない！　ウチらって友達なんだけど！　こ、こういう異性的なスキンシップとか、まだ許してなくない……!?」
「おいふざけんな、お前が近いんだよお前が。つついたとか人聞きの悪いこと言うな」
あとまだってなんだよまだって。いつかスキンシップ許してくれる予定なのん？
「だ、だってしょうがないじゃん！　近寄んないと教科書見えないんだから」
「……つかお前、いま授業中なんだからもうちょいボリューム下げろよ。マジで勘弁してくんない……？」
「……あ。……あ、あんたが悪いんじゃん！　人の胸触るから」
「おいさらに人聞き悪い言い方になってるぞ、ホント勘弁してください」
すみませんクラスの皆さん、お隣さんが騒がしくて。平身低頭土下座しますんで、お願いだからこっち見ないでください！
特に平塚先生と由比ヶ浜さん、目に、目に光をォ！　そんな目で見られたら、俺なんて簡単に死ねるからね？

――あの体感時間約一年前のバレンタインから約二週間が経ち、俺は今日も変わらぬぼっちライフを満喫している。だがしかし、そんな悠々自適なぼっちライフを送れてい

るはずの俺の毎日は、隣の席に鎮座する鬱陶しい隣人によって、今日も簡単にブチ壊されているのである。

なんというか、あれから相模との距離がやたらと近くなったのだ。いや、近くなったというよりは、相模が一方的に距離を詰めまくってきていると言った方が正解なのかもしれない。

あのバレンタインで俺と相模は友達になった。てかこの時点でぼっちライフを満喫とか言ってたら、全国のぼっち達を敵に回し兼ねないので、もうぼっちを気取る事はやめておこうね！

……そう。俺と相模は友達になったのだ。だからその翌日から相模との距離が妙に近くなったのは、それが友達の距離、という事なのだろう。

教科書見せれば腕と腕がくっつくとか日常茶飯事だし、それが見辛いページとかだと今みたいに相模がぐいぐいと身を寄せてきて、ふにょふにょバストを肘でつんつんしちゃったりする事もある。

いや、胸触っちゃったのは今日が初めてだよ？　嘘です、実は二回目でしたありがとうございます。

成る程これが友達の距離感なのか。なに？　こんなに近いものなのん？　友達の距離感って。

いや待て、俺ってば戸塚とこんなに近かったことないんだけど。やはり俺と戸塚は友達では無かったのかッ……！

驚愕の真相に胸がグイグイ締め付けられていると、不意にくいくい引っ張られる制服の腕。見ると、真っ赤な顔した相模が厭らしく口元を綻ばせ、俺だけに聞こえるようぽしょぽしょとこう囁いた。

「……ほんっと比企谷って油断なんないよねー。もう肘でつつかれたの三回目なんだけど。つかまだなんかニヤついてるし。キモっ。まーたなんかやらしい事でも考えてたんじゃないのー？」

「……アホか、そりゃお前が無駄に教科書忘れる回数と無駄に近すぎる回数だろ。お前が教科書忘れなければ起き得ない事故だ。むしろお前から当たってきてるだろこれ」

つかお前、いい加減教科書持ってこいよ。なんなら教科書一式もうひとセット揃えて、片方を学校に常備しといてもいいレベル。それと、どうやらパイタッチは三回目だったみたいですありがとうございました。

「はぁ？　女子の胸触っといて普通そういうこと言う？　マジ信っじらんないこいつ」

「だから触った触った言うんじゃねぇよ……」

もうなんなんだよこいつ……、死ぬほどうぜぇ……

隣の席になってからのしおらしい態度にすっかり忘れてしまっていたが、この相模南という女、元来とても調子に乗りやすい女だ。

勘違いして調子に乗ってやらかして痛い目に合う。こいつはそうやって文化祭や体育祭ですこぶる痛い目に合ってきたという、輝くような実績の持ち主である。

あのサイゼやバレンタインで話を聞いてみたところ、やはりこいつは今まで俺に対して何かしら思うところがあったらしい。罪悪感やら後ろめたさ、あとは友達でもなんでもない、隣の席同士ってだけの妙な関係性。

そういった負の感情やらなんやらが遠慮という形を成し、今まで俺に対しては相模南らしからぬ態度となっていたのだろう。

だが、そこへ来ての友達宣言である。それも今までの溜まった感情を全て吐ききってからの。要はもう相模の中からは『比企谷に遠慮しなきゃ』という文字が取り払われた、という事なのではないだろうか。つまり今この女、かなり調子に乗っていてとってもウザイ。

まぁ、こうやってニヤニヤとムカつく笑顔を向けてきているウザイ姿こそが、相模南が相模南である証とも言える本来の姿なのだろうし、ようやく俺にも本来の姿を晒すようになったのだと喜ぶべき事なのかもしれない。

……それは理解しているのだが、ホント鬱陶しくてたまらないんだよぅ……

それもただのムカつくニヤニヤではない。なんとも照れ臭そうに瞳を潤ませ頬をポッと染めながら、こちらの反応を窺うようにチラチラと視線を向けてくるのだ。なんだろうか、このからかわれている感は。ホントドキドキしちゃうんでやめてもらえないでしょうかね。

「やっぱ比企谷って、ウチの事やらしい目とかで見てんじゃないのー？」

「……うぜぇ」

――ああ、そういや鬱陶しいからかいと言えば、ちょっと前にこんなこともあったっけ……

× × ×

俺はあの日もいつもと同じように、四限目のチャイムと共に昼飯の準備を始めた。ちなみに準備と言っても、自分の席で飲み物を用意するだけである。

『はい、今日の』

『おう、さんきゅ』

なぜならこうしてお隣さんから仕出し弁当が配給されるから。

なんだよこの熟年夫婦みたいなやりとり。これをいつもの光景のように語っちゃってる時点でちょっとアレだよね。

でもこれがここ最近の俺と相模の普通のやり取りなのだから仕方ない。だから、クラスのあちらこちらから注がれてる生暖かい視線なんて、俺は知らない見えない気付かない。

その日のさがみん弁当はメインが肉じゃがだった。なんともあざといメニューチョイスではあるのだが、相模の肉じゃがは結構美味いので、弁当が肉じゃがの日は秘かにテンションが上がっているのは内緒だ。

俺に合わせてくれているのであろうかなり甘め濃い目の味付けで、ごはんがごはんがとってもススム君である。

その日も当然のように美味かったのだが、そこは流石に芋である。芋な以上は食べ進めていけば喉が詰まるのは仕方のないこと。さらに冷めきった芋であれば尚更だ。

もちろんいつか出来たてホカホカをこいつん家で食わせてもらいたいなぁとか思った事なんて、一度きりだってないんだからね！

そしてその日、今までにないくらい思い切り詰まった。それはもう盛大に。芋ってマジ恐い。死という物を簡単にイメージ出来ちゃうくらい命を取りにきたもん。

『ガハッ！　ゲホゴホ……ッ！』
『ちょ!?　だ、大丈夫!?　ほら、お茶、お茶飲んで！』
　ガハゲホ咳き込んでいる俺に、お隣さんは優しくペットボトルのお茶を差し出してくれたっけ。あまりの優しさに、危うく求婚して振られちゃうとこだった。
『あ、あぶねぇ……、死ぬかと思った』
『ちょっとやめてよね、マジでこっちがビビるから。いくらウチの肉じゃがが美味しいからって、慌てて食べ過ぎだっての』
　と、こういうところも自己アピールがウザかったりする。
　いやまぁ確かに美味いんだけど、目の前で喉詰まらせて死にそうになってる俺を見て、なんでちょっと自慢気で嬉しそうなんだよ。
『……別に慌てて食ってたわけじゃないんだが……。まぁとにかくお茶さんきゅな。助かった……わ？』
　そして俺は、そこまで言ってようやく現状がおかしいことに気が付いた。なぜ今俺の命を救ってくれた飲み物がお茶なのだろうか、と。
　なぜなら俺が用意しておいた飲み物は、当然マッ缶なのだ。
　余談ではあるが、弁当をマッ缶で流し込むとか、素人さんから見たら正気の沙汰ではないように見えるかもしれない。が、よく考えてみてほしい。

ほんの数年前までは、どんな物を食べるにしろ常に牛乳で流し込んでいたのだから、牛乳がマッ缶に変わっただけのお話である。そうおかしな事ではないではないか。むしろおかしいのは、給食に付いてくる飲み物が牛乳、という部分だろう。

今からでも遅くはない。全国の教育委員会の皆さん、給食に牛乳ってどう考えてもおかしいでしょ？　今すぐマッ缶に変更するべきです。

おっと、マッ缶愛の強さ故つい話が逸れてしまったが、今はマッ缶か牛乳かについて議論している場合ではなかった。

そう、俺を死の淵から救い出したのはマッ缶ではなくお茶。缶ではなくペットボトル。

不思議な事もあるもんだと思ったね。なにせ俺の身の回りにお茶のペットボトルなど無いはずだったのに、なぜか俺を救ってくれたのが、どこからともなく現れたペットボトルのお茶だったのだから。

……俺は恐る恐るお隣さんに目をやった。すると呆れたような、それでいて心配するような眼差しで俺を覗きこんでいたお隣さんの両手には、今まさに世間で話題沸騰中のペットボトルのお茶が握られていたのだった。

『……あ。……えと、そのお茶って、相模のか』

『え？　そうだけど。あれ？　なんか問題あった？』

『……特には』

ま、まぁ不測の事態ではありましたし不測の致すところでございますので、この件に関しては特に問題は生じなかったという事で有耶無耶のまま流してしまおうそうしよう……、そもそも高二にもなってこの程度の事でドキドキしちゃうとかキモいしねっ！

と、当時の俺はそう思っていました。

それなのにこの女、気まずそうに頬を熱くして、相模から目を逸らしたりペットボトルの飲み口をチラ見したりという俺の挙動不審な態度に気が付いてしまったらしく、頬をカァッと染め上げながらも、途端にニヤァと笑みを浮かべたのだ。とても厭らしく、とても陰湿に。

『……あ、そういえば、このお茶さっきウチが飲んだばっかだったっけ』

『……』

『あれ？　どうかした？　比企谷。なんか顔赤いけどぉ』

『……』

『え？　まさか高二にもなって、間　接　キ　ス　とか意識しちゃってないよねぇ？』

『は？　ば、ばっかじゃにぇ～によ……？』

『うっわ、マジで!?　間　接　キ　ス　だよ？　間　接　キ　ス　！』

なんでそんなに間接キスを強調するのん……？

『ちょ、マジ!?　もー、比企谷ってさー、ウチのこと異性として意識しすぎなんじゃないのー？　ウチら友達なんだし、あんま異性として意識されちゃってもねー。……と、友達って肩書きが邪魔なら、べ、別に取ってあげても、いいけどぉ？』

『……う、うぜぇ』

×　×　×

思い出しただけでもウザイ。とにかくウザイ。このクソ女、あの時も今とおんなじように、厭らしく口元を歪ませてやがったんですよ、ええ。

三学期始まった直後のしおらしいさがみんを返して！　いやまぁしおらしい頃はしおらしい頃でちょくちょくウザかったけどね。

結論、相模はどう転んでもウザイ。

そしてこういう調子に乗ったからかい癖みたいのが始まると、大抵こいつは決まって発する台詞がある。例えば、そう。ニヤニヤした口から今まさに出てくる、こんな鬱陶しい台詞。

「ホント比企谷、ウチの友達になる気あんのー？　あんま異性として意識し過ぎてると

友達にはなれないかんね？　……か、肩書き邪魔なら、別に友達じゃなくたっていいんだけどぉ……？」

「……」

ほらコレですよコレ。こいつは何かって言うと、すぐ友達だの肩書きだのと持ち出して、友達やめてもいいけどぉ？　なんて脅してくるのだ。異性として意識、という謎のワードをことさらに強調して。

そりゃ俺に異性として意識されるのはかなりキモいんだろうし、そうならないようキツく釘を刺しているんだろうというのはわかる。

でもさ、お前から言い出した友達申請だよね？　なんで俺が脅されてるみたいになっちゃってるのん？　これじゃまるで俺から友達申請した上、俺が友達じゃなくなってしまう事を恐れてるみたいじゃないですかやだー。

別にいいんだぞ、こっちとしてはお前と無関係になったって。隣同士で会話がゼロになったり教科書見せんのやめたり、飴がもらえなくなったりさがみん弁当が食べられなくなったって、俺は少しも寂しくなんてないんだからね！

……ま、まぁ？　この照れ臭そうなニヤケ面で言ってる時点で冗談だということくらい分かるし、別にそこまでイラつきはしないから、まだ友達は続けさせてやったっていいけども？

ただね、とにかくウザイ。ホントムカつく。なにそのこちらの一挙手一投足を見逃すまいと窺うような顔。あれでしょ？　ちょっとでも恥ずかしがる素振りでも見せようものなら、途端にぷぷって笑うんでしょ？

だから俺は相模ごときのからかいになど一切動じた様子を見せず、今日もいつものように適当にこう答えるのだった。

「……へいへい。そりゃすいませんでしたね。今後は気を付けまーす」

すると相模がこう返してくるのもまた、いつも通りの光景なのである。

「……はぁ～」

――なんでそこでやれやれ顔の深い溜め息を吐かれなくちゃならないのか、ホント意味わからないです。

どうすりゃ正解なのん？

×　×　×

しかしである。このからかったあとのしてやったりなニヤケ面といい、先日の間接キスネタといい、なんかとっても既視感あんだよね。ホントここ最近こんな光景よく見んなぁ、ってくらいにはデジャヴ。

なんなの？　この『今日も上手くからかってやったぜ』感いっぱいなドヤ顔。勝ち誇った顔してからかい上手を自称してる感じ。腹立つ。

だが、俺の記憶の向こう側にある光景は、確かに今の現状に酷似してはいるのだが、俺が知っているのはこんなムカつく光景ではなく、むしろ……こう、胸にムズムズきゅんきゅんくるような感じなんだよなぁ。

ああ、でもその既視感の中の光景にもムカついてたかもしれない。ただしそれは、からかってくる方にではなく、からかわれている方に対して。確か、からかわれている奴に対して『青春を謳歌せし者よ爆発しろ』とか思ってたような……

……からかうのが上手な可愛い女子と、からかわれるのがもはや職人芸な、うらやまけしからん男子。そしてその男に軽く殺意を憶えてしまう程の青春模様……

「……あ」

そうかアレか……

思い出してみればなんの事はない。からかうのが上手なＪＣとからかわれ上手なうらやまけしからん中坊が、ゲッサンと深夜で絶賛イチャコラしてるじゃねぇか。サンデーＧＸは読んでてもゲッサンは読んでないから、実はアニメでしか知らんけど。

そしていま俺の視界に映るこのロケーションはどうだ。現在の俺と相模の教室での

位置関係って、正にアレと一緒じゃん。

――こいつ、さてはアレ観てやがるな……？

続く

からかい上手の相模さん【反撃編】

　イマドキの高校生でリア充サイドの女。さらにその中でもカースト上位に位置する相模とは、通常であれば接点など存在しない深夜アニメネタ。男女が入れ替わって隕石回避しちゃったりパヤオアニメだったりと、一般人のあいだでも話題になったようなアニメ映画であればいざ知らず、地上波、それも深夜にやってるアニメなんて、相模のような正にイマドキ女子高生とは真逆の位置にあるもの。
　それ故こいつがアレを観ているなんて発想自体、普通ならありえない。常ならばそう思うところだろう。
　だがしかし今は違う。なぜなら先日ドリアをご馳走になりにいったあの日、二人でリビングのソファーに腰掛けている時に、確かに相模はこう言ったのだ。
『へー、ウチ普段アニメとか全っ然観ないんだけど、けっこー面白いんだー』
と。
　これはあくまでも推測の域に過ぎないが、多分相模はあの時アニメの魅力に気付いて

しまったのだ。そして目についたアニメを視聴するうちに、たまたまアレに辿り着いてしまったのだ、と。

そしたらどうだ。位置関係だけで言えば、画面の向こう側で楽しそうに男子をからかうヒロインの位置に座るのは自分。そしてそのヒロインにからかわれ、常に敗北感に頭を抱えている主人公の位置に座っているのは俺。明らかに相模はからかう側の立ち位置。そして俺はからかわれて悶える側の立ち位置である。

そしてその相模さんはと言えば、現在友達になったばかりの俺に対して絶賛調子乗り乗り中なのだ。

この公式から導き出される答えはひとつ。「ぷっぷー、比企谷の奴をからかって、照れさせて楽しんでやろう！　ざっまぁ！」……しか考えられない。

ではあの間接キス事件も胸触らせ事件も、全部相模の計画だったというわけだ。

くっそぉ相模さんめー！　してやられたぜ！　まんまとドキドキしちゃったじゃねぇか。あぶねぇ、もしこれが中学時代に折本にやられていたとしたら、ドキドキどころか簡単に落ちちゃってるとこだったわ。

別にこんなこと一切されてなかったのに、簡単に落とされていたどうも俺です（白目）

つーかやるならやるで徹底してやれよ。照れたら負けのからかいバトルだというのに、からかう側のお前がいつもいつもそんなに照れててどうすんだ。どんだけからかい

下手だよ。本家見習ってもっと飄々としてろよ。

……しかし、あっぶね！　幸いにしてまだバレンタイン以降雨は降ってないが、もし雨が降っていたとしたらこの女、傘を忘れたフリして俺と一緒に帰って相合傘させる気だったろ。そしてその帰り道、俺に愛してるとかアイラブユーとか言わせようと画策して嘲笑う気だったんだろう。な、なんと恐ろしい……

でも甘いよ、甘すぎるよ相模さん！　その程度の企みで、俺を陥れられると本気で思っていたのかい!?　（完全に陥れられてました）

危ないところだったが、気付いてしまえばどうという事はない。企みが露呈した以上、もう相模ごときのからかいなんかは気にしなければいいだけなのだから。

例えスカートで逆上がりしようと、例え消しゴムに『ろうかみろ』などと意味不明な文言が書かれていようとも、そんなものはもう児戯に等しいのである。

言っておくが、俺はあの中坊と違ってお子様じゃないんでね。別にお前のからかいに付き合ってやったりはしないぜ。

相模ごときにニヤニヤと勝ち誇られた面をされるのはちょっとだけ悔しいけれど、仕返しとかして相手にしちゃったらなんか負けな気がするから絶対やらん。

フッ、馬鹿め。勝手にやって勝手に照れてやがれ。

――ん？　消しゴム……？

そうか、その手があったか！

確かにあの中学生男子と違って、大人な俺は別にからかい返して照れさせてやろうだなんて、ガキ臭い反撃をしようとまでは思わない。そもそも反撃なんかしなくても、こいつ勝手にやって勝手に照れてるし。

やだ！　気付かなかっただけで、労せずして常に勝利していたのか！　負けを知りたい。

しかし反撃とまではいかなくとも、未然に攻撃を防いで相模にぐぬぬ顔をさせてやる事は十分可能なのである。

……そう、あの消しゴムネタを使って。

フハハハハ！　ざまぁみろ相模！　今この俺が、お前の姑息な作戦など事前に叩き潰してくれるわ！　せいぜい悔しがるがいい！

×　×　×

消しゴムドッキリ。それは、学生間におけるイタズラとしては、とてもポピュラーかつ効果的なイタズラであり狩猟方である。

何気ない会話の中に甘い罠を巧みに忍ばせ、攻撃対象を誘導し罠を発動させる、言わばハニートラップ。

「あ、そういえばさー、消しゴムに好きな人の名前書いて最後まで使いきれたら両想いになれるとか言うよねー」などという餌で獲物に自身の消しゴムケースの中身を意識させ、いざこっそり見てみるとトラップ（『バカが見るー！』等）が発動。そして罠に掛かり絶望の表情を浮かべる瀕死の獲物を陰から覗いて嘲笑うという、古来から伝わる恐ろしいハンティング方法である。

その例に漏れず、アレでも当然のようにその罠は仕掛けられ、そして当然のようにからかわれ上手が引っ掛かっていた。まぁそこは流石のからかい上手系ＪＣ。そのポピュラーな罠の中にも独自のアレンジを加えていたが。

まさか授業中にトイレ行ったフリをして廊下から様子を覗き、消しゴムに『ろうかみろ』と指示を書き込みほくそ笑んでいるとは、なんという恐ろしい女子中学生か。

仕掛けるのがとても容易で、かつ破壊力も抜群と言えるこの罠。アレを観た上で俺を

からかって愉しんでいる相模の事だ。もちろん俺にも仕掛ける気満々のはず。これから罠を仕込む気か、もしくはすでに仕込み済みで、トラップ発動の隙を窺っているのか。

いずれにせよ、この罠にはひとつ重大な欠点がある事をご存知だろうか？　それは、捕食者が餌を撒く前に消しゴムの中身を見てしまえば、その罠は無意味になるという事。

この罠は、あくまでも『もしかしたら消しゴムに俺の名前が書いてあるかもしれない！』と獲物に期待させておかなければならない。だからこそ捕食者は事前に前フリをしなければならないのだ。あ、そういえばさー……、と。

考えてもみて欲しい。そういった前フリが一切無い時点で先に獲物に『バカが見るー！』や『ろうかみろ』との文字を見られてしまったとして、果たして獲物は「やられたー！」と悔しがるだろうか？　否、なにも感じないのだ。それどころか食物連鎖上位者である自分が、ただ消費されるだけの被食者に「こいつ一人でなに書いてんだ？　頭大丈夫か？」と小馬鹿にされてしまう始末。つまり、策士、策に溺れる、だ。

そしてもし事前チェックでなにも書かれていなかった場合も、当然その罠は失敗に終わる。

なぜならこういったおまじないの類いは、消しゴムを卸したての時点で名を記しておかなければ効果は無いと云われているからだ。

つまりこの時点ではまだ何も書かれていないのに、たったの数日内に「あ、そういえばさー」との前フリがあったとしても、それはただの罠である――と、容易に判断する事が可能になるのだから。

だからこそ、餌を撒く前に先に消しゴムの中身を見られた事を捕食者側に知らしめる事が出来さえすれば、二度とその罠を発動する事が出来なくなるという寸法である。

自分の目の前で消しゴムを見られれば、調子に乗っているさすがの相模でも、この作戦は二度と使えないと悟ってぐぬぬと顔を顰めるだろうよ。

アハハハ！　ざまぁないね相模さん！　せいぜい悔しがればいいさ！

そうと決まれば善は急げ。都合がいい事に、現在授業は板書きの時間。今なら相模の消しゴムを奪うにはもってこいだ。

たまに黒板の方からチョークが折れる音……、いや、折れるというよりはパキョッと粉砕するような音が聞こえるのが気になるところではあるのだが、今はそれどころではない。とっとと相模の消しゴムの中身を拝んでやろうではないか。てか先生、なんでそんなにイライラしてるのかは知りませんが、あんまりイライラしてると小皺が増えちゃいますよ？

……おっと、どうやらチョークがもう一本犠牲になったようだ。あれかな？　俺と平

塚先生は通じあってるニュータイプかな？　やめて！　視線だけで精神攻撃してこないで！　精神崩壊しちゃう！

さて、カミーユとシロッコ遊びも程々に、そろそろヤツへと仕掛けるとしようか。

そしてこの仕掛けにより、もし今までの予想が正しいのであれば……

「……なぁ、相模」

「ん、なに？」

「悪い、消しゴム貸してくんね？」

「……え」

なにその間。ただ消しゴムを貸してくれとお願いしただけで、そこまで間が空くのはおかしいよね？

俺はほくそ笑む。相模には決して気取られぬように。

――フッ、やはりな。俺の予想は間違ってなかったようだ。

「……な、なんで消しゴム貸してあげなきゃなんないの……？」

「昨日家で勉強してる時、机に置いてきちゃったみたいなんだ」

嘘です。もちろんしっかりと筆箱に入ってます。

ぼっちはどこかの誰かさんみたいに忘れ物なんか出来ないんだよ。なぜなら忘れ物しても誰も手を差し伸べてはくれないからな！

「……え、やなんだけど」

「……おい、毎日毎日これだけ教科書見せてやってんだから、別に消しゴムくらいいいだろ」

「……ぐっ」

通常、隣の席のヤツにたかが消しゴムを貸すくらいの事で、ここまで抵抗したりはしないものだ。

ごめん、貸してくんない？

はい、どうぞ。

この程度の簡素なやり取りで済んでしまうのが、隣人同士の消しゴムの貸し借りなのである。

それは、俺の学生生活における隣の女子との今までの消しゴムの貸し借りを思い出してみれば、容易に分かる事だろう。

ＣＡＳＥ①！

『……ご、ごめん、消しゴム忘れちゃったんだけど、ちょっと貸してもらえない？』

『……え。……ま、前か後ろの男子に借りればよくない……？』

ＣＡＳＥ②！

『……ご、ごめん、消しゴム忘れちゃったんだけど、ちょっと貸してもらえない？』

『……ブチッ。……はい。……あ、それ返さなくていいから』

っべー、俺超見栄張ってたわー。全然簡単に貸し借り出来た記憶なかったわー。

涙ながらに後ろの席の津久井君から借りられたのは、まだいい方の思い出だったなぁ。

無表情で消しゴム（米粒サイズ）ちぎって机の上に投げて寄越してくれた座間さん、あの時は助かりました。本当にありがとうございました（白目）

ふぇぇ……でもあんなサイズにちぎられたゴムの欠片じゃ、どっちにしろ返すことなんて出来なかったよぅ……

どうしよう。なんか辛くなってきちゃったよぅ。八幡もうお家帰りたい。

……いや待て、いかんいかん。もうあの頃とは違うのだ。

相模は座間さんとは違う。なぜなら相模は俺の教科書とか余裕で触れるし、なんなら俺が食ったあとの弁当箱だって平気で触れる奇特な女の子なのだから。てかいつも弁

当箱は洗って返すって言ってんのに、相模さんてば「別にいい」の一点張りなのよね。アレかな？　帰ってからペロペロしてるのかな？　飼い犬か飼い猫が。

だから少なくとも座間さんみたいに、俺に触られた消しゴムには触りたくないとか、そういうんじゃないはず。な、ないはずだよね！

であるならば、こうも消しゴムを貸す程度の行為を嫌がるというのは、とても違和感がある……いやさ違和感しかないのだ。

そしてその違和感が指し示す答えはひとつ。そう、俺が貸してくれとお願いした瞬間から、お前が両手で強くＨＵＧっと、ＨＵぎゅ～！　っと握り締めているソレには、すでになんらかの罠が仕掛けられていることに他ならない！　つまりなにかの拍子に俺に見られてしまっては都合の悪い〝ナニカ〟があるのだ、その消しゴムには！

激しい動揺が見て取れる相模を横目で一瞥し、俺はまたもほくそ笑んだ。

「なぁ、早く貸してくれよ。板書き間に合わなくなりそうなんだが」

「……だ、だったらあとでウチのノート写せばいいじゃん……っ」

「いやそれ余計に手間でしょ……」

動揺もここまでくると最早滑稽でさえある。

消しゴム貸さないのにノート貸してやるとか、いくらなんでも無理ありすぎんだろ。

「ホント一瞬で返すし、なんなら使った分のゴムは返すから」

「い、要らないわよそんなの！」

なんだよ要らないのかよ。そういや座間さんも返さなくていいって言ってたっけ。女子ってみんな思慮深いのね！

……またも辛い記憶に苛まれて一人涙していると、相模がチラッ、チラッとこちらの様子を窺うような上目遣いで、消しゴムが乗った躊躇う左手をそっと伸ばしてきた。

「……ほ、ほんと一瞬だからね。変なことしないでよ……？」

本当に、本当に渋々ではあるのだが、ようやく消しゴムを貸してくれる事を決意したらしい相模。さすがに毎日毎日教科書見せて貰っといて、たかだか消しゴムを貸さないというのは無理があると悟ったのだろう。

「……別になんもしねーよ……。なんだよ消しゴムに変なことって」

鼻に突っ込むとか？　もしくはゴムに染み付いたさがみんエキスをペロペロしちゃうとか？　誰がするかそんなこと。ちょっとケースを外しちゃうだけですよふへへ。

「……じゃ、じゃあ、はい」

そう言って相模は恐る恐る消しゴムを渡してきた。

あ、軽々しく消しゴム貸してくれとか言っちゃったけど、よくよく考えたら手渡しされる瞬間って結構危険じゃね？　教科書とか弁当ならサイズ的に問題ないけど、これだけ小さな物だと、渡される瞬間にちょっと手が触れちゃうかもしんないじゃん。っ

べー、手汗かいてきちゃった。

「……おう、助かる」

少しでも相模の指に触れると妙に意識しかねないので、まるで宝石を扱うかのよう慎重に慎重を重ねて、相模がぎゅっと握り締めていた故ほんのりと温かい消しゴムを受けとった。

てかよくよく考えたら、いつも貰ってる飴玉の方が余程ちっちゃいのに、今まで手が触れたことなんてなかったわ。てへ。

ついに俺の手元へとやってきた相模の消しゴムに、口元はニヤけてしまうし、なんだかとってもドキドキしちゃう。

女子の体温が残る消しゴムを手にして興奮しちゃうとか、俺って完全に変態そのものじゃないですか。そりゃ相模も変なことしないでとか言うよね。

おっと、いつまでも消しゴムに欲情している場合ではなかった。消しゴムには欲情してねぇよ。

一瞬で返すと言ったからには、すぐ使ってすぐ返さなければならないのである。

しかし、借りた消しゴムのケースを何の理由もなく突然外すという行為は、通常であれば奇行ともいえる行為だ。普通借りた消しゴムのケースとか外さないもんね。貸し

た消しゴムのケースをおもむろに外しだしたら、え、なにしてんのこいつ、と危険人物認定されること請け合いである。

まぁそもそも俺の目的が『俺が相模の消しゴムの中身を確認した事を相模に見せ付ける』である以上、奇行と思われようと危険人物と思われようと一向に構わないのだが、計画実行中――つまりケースを外そうとしている最中に相模に阻止され奪われてしまっては元も子もない。

なにせこの消しゴムのケースというのは案外厄介なヤツで、いざ外そうとすると中々に抵抗するヤツなのだ。脱ぐのを抵抗するあまり、あーれーお代官様～と言わせたくなっちゃうレベル。

さらにこの相模の視線である。

こいつは俺に消しゴムを渡してからというもの、絶対に変な真似はさせまいと、俺から……てか俺の手元から目を離さない。それはもう穴が開くほど、警戒と不安が入り交じる瞳でジィっと見つめている。もしも消しゴムに両手をかけようものなら、即座に奪う気概なのだろう。

しかしこの俺に抜かりなどあるはずがない。

相模の目を盗んでケースを外し、さらにはなぜ人様の消しゴムのケースを外すのかと追及された場合の理由付けも、とっくに算段などついているのだ。

……まったく。やはりお前は所詮相模だな。どう転んだって、お前は高木さんにはなれないんだよ。

そうやって慌てれば慌てるほど、警戒すれば警戒するほど、この消しゴムにはなにかがあるという事が明白になるばかりだと気付かないのか？　あのＪＣならこんな不用意な態度は決して取らない。仮に予定外の事態に見舞われたとしても、次なるチャンスに備えて飄々と受け流すことだろう。なんなら慌てたフリして、それさえが罠まである。

やはり中学生にも劣る相模さんなど恐るるに足らず。その程度のメンタルで俺をからかってきたこと、後悔させてあげるよ！

俺はおもむろに相模の消しゴムを使いはじめる。ゴムの摩擦により、鉛筆の芯を紙から削り落とすのだ。

するとどうだ。強く激しく摩擦することにより、俺の机はガタガタと大きく揺すられる。それにより、中心に教科書を置くためにくっ付けられた俺と相模の机に、ほんの僅かな隙間が作られていくのは必然である。

机と机の中心に置かれた教科書。そしてその机と机の間で徐々に広がりつつある隙

間。そこに浮かび上がる答えはひとつ！

『バサッ！』

そう、重力の前には教科書だろうと鉄球だろうと抵抗は無意味。落体の法則により、物体は等しくは床へと落ちてゆくのである。

「ちょ、なにしてんのよ、机揺らしすぎだっての」

「おう、すまん、なかなか消えてくれなくてな」

なかなか消えてくれなくてな、じゃねーよ。どんだけ強く擦ったら机があんなに揺れるんだよ。もはや震源地（俺の机）は震度5強レベル。どんだけ筆圧強いんだ俺。

あまりの筆圧の強さに、相模はやれやれと呆れた様子で俺を一瞥し――

「ったくもー……」

落下してしまった教科書に手を伸ばした。

しかし、床に落ちた物を拾うのにそのままの体勢では届くはずもないので、当然屈み腰に。必然的に視線は俺から床へと注がれることとなる。

フッ、さすがはお間抜けさがみん。あれだけ俺と消しゴムの行方を警戒していたというのに、突如舞い降りたアクシデントに思考を全部持っていかれてやがる。まさに隙だらけ。

だからお前はあのＪＣと違って温いというのだ。

――そして俺はついに口にする。借りた消しゴムのケースを突然外すという奇行に対する理由付けの言葉を、俺の行動にすぐには対処できない体勢に入った相模の耳に届くように……

「……あー、やっぱこう丸まってると上手く消せねぇな。……カドで消すか」

そう！　なんの不自然さもなく消しゴムのケースを外す言い訳。それは、カド。

消しゴムってさ、ケースから出てる頭部分って、丸まっちゃってて細かな場所は消し辛いよね。そしてこの相模の消しゴムときたら、それはもう上手い具合に丸まっているのだ。目算で二ヶ月程度は使用しているのであろう消しゴムの頭は、黒ずんだ曲線を描いていた。

そうしたら次に取る行動など、もう決まっているだろう。そう、ケースを外して反対側のカドで攻めるのが定石。

これこそが他人の消しゴムのケースを自然に外す際の、完璧なる理由付けである。

「え」

俺の口から発せられた思いもよらない言葉に、相模は教科書を拾うことも忘れて慌てて身を起こし、必死の形相で阻止を試みる。その様はまるでスローモーションのよう。

だがもう遅いのだ。その頃にはもう俺の右手は、我が国初の色彩商標登録を認められ

た事でお馴染みの、青・白・黒で構成されたあのケースをすでに脱がしにかかっていたのだから。さぁ、今こそその白く透き通った柔肌を、公衆の面前に晒すがよいわ！

イレイザたん「あーれぇー！　ご無体なぁ！」

すぽんっ！

脳内にイレイザたん（消しゴム）の羞恥の悲鳴が響き渡る中、ついに彼女（消しゴム）の生まれたままの肢体があらわになった。

うへへ、大丈夫大丈夫、優しくしてあげるからね！

そして俺の予想通り、その白き魅惑のボディーには、とある文字が書かれていた。

さぁ、なんて書いてある？　バカが見るー！　か？　それとも廊下を見ろ、か？

だがなんて書いてあろうとも、捕食者が餌を撒く前に見てしまった以上、その文字はなんら意味を成さない。だから今からしっかり目に焼き付けてやるよ。しっかり目に焼き付けて、こんな下らないからかいを仕掛けようとしていた相模をぷぷっと笑ってやろうではないか。「お前消しゴムになに書いてんだ、ウケる～！」と。

そして俺は見た。相模が言い逃れ出来ないように、その文字をしっかりと網膜にも脳裏にも焼き付けた。

え。

「ぎゃーーー!!　ちょ、ちょっと比企谷なにしてんの!?　なに人の消しゴムのケース勝手に取ってんのッ!?」
「え、あ、や、……だ、だからちょっとカドを使いたいなぁ、と……」
「そ、それは聞いたけど！　で、でもウチに断りもなく勝手に取っちゃうとかあり得なくない!?　マジなにこいつ超サイアクなんだけど！　キモ！　マジキモ！　ちょっと死んでくんない!?」
「……お、おう」

想定してたよりもずっと激しく罵ってくるさがみん。
そりゃね、楽しみにしてたからかいを暴かれてしまったのだから、いくらかは怒ったフリして誤魔化すだろうくらいには思ってたけども、このまくし立てっぷりはそれはもう物凄い。

「そ、その……、なんだ、すまん」
「謝って済むなら警察いらないから！　てか謝んなくていいから警察に捕まれば!?　もうマジ最ッ悪！　一生塀の中に居ろ！　ばぁぁぁか！」
おうふっ……。こうして、今までの人生の中でも一、二を争うんじゃね？　ってくらいの激しい罵倒が続くのだが、しかし俺の心には、なんの怒りも悲しみも悔しさも浮かんではこない。
なぜなら、俺から強引にむしり取った消しゴムとケースを、先ほどよりも強く両手でHUぎゅ～！　っと胸に抱え込んでいる相模が、尋常じゃなく頬を上気させ、不安そうな涙目で弱々しく睨みつけているから。
そして消しゴムに記されたとある文字を見てしまった俺も、理解が追い付かずに頭がくらくらとしているから。

「……み、見た……？」
相模は消しゴムを胸に抱えてぷるぷると俯いていたのだが、しばらくしてゆっくり小さく顔を上げた彼女は、怒りの形相……とはちょっと違う、不安と不満が入り交じるような潤んだ上目遣いで、ようやくそう尋ねた。
「えと……」

見た？　と聞かれたら見たと答えてあげるが世の情け。

だから答えてやればいい。見たぞ、と。お前消しゴムになに書いてんだよ、と、小馬鹿にしてざまぁと笑い飛ばしてやればいい。

それでこのからかいに終止符を打ってやるのだ。

「……い、いや、見たもなにも、別になにも書かれてない普通の消しゴムだったが……？」

なのに俺ってばこう答えちゃう！　だって、見ただなんて口が裂けても言えませんもん。どんな顔して見たって言えばいいのん？

だから俺は二分の一の確率に賭けるのだ。ああいうのって、両面に書いたりはしないもんだよね？

「ほ、ほんと!?」

「お、おう」

「ほんとに、マジ……!?」

「お、おう」

「……そ、そう」

……と、どうやら賭けには勝ったご様子。やはり文字が記されていた面は片面だけで、俺が見ちゃった側はなにも書かれていない面だったという与太話を信じてくれたようだ。

「……よ、よかったぁ……、そっちかぁ……」

そして未だ胸元で消しゴムをぎゅうっと握り締め、真っ赤な顔で安堵の微笑みを浮かべる相模南は、どこの誰よりも耳聡い俺でなければ聞き取れなかったであろう小さな声で、ぽしょりとそう呟いた。

そんな相模のホッとした横顔にパニック寸前の俺ではあるけれど、ここで勘違いしてしまうようなヤワな鍛えられかたはしていない。エリートぼっちを舐めるなよ？

バレンタインから今日までのからかいっぷり、調子に乗りまくってるウザっぷり、そしてこの消しゴム騒動という一連の出来事を頭の中でゆっくり租借し吟味して、この事態を勘違いしないで済む道筋を脳内データベースの中から必死で検索する。

すると、いとも容易く答えが見つかりました。さす俺。

――ああ、そうか、これはまた騙されるところだった。

書いてあった文字が予想の遥か斜め上をいくモノだったから思いっきり面食らってしまったが、よくよく考えたら、からかう手段としてはそっちの方向性もあったんだよね。

……そう、書いてあった文字は『バカが見る―！』でもなければ『ろうかみろ』で

もない。そこには、とても可愛らしい文字で

『ひきがや』

とだけ書かれていたのだ。

うん、これはあれだ、あれに違いない。いざ罠を発動させた際は、自分の名前が書かれてて戸惑い悶える俺の様をにんまりと眺め、「なに？　本気にしちゃったのぉ？　ぷっぷー！」と嘲笑う作戦だったのだ。

であるならば、餌を撒く前に先に見られてしまったら、そりゃ焦るに決まっているではないか。だって作戦前にそれを見られてしまったら、俺の事が好きだと勘違いされてしまうのだから。

この勘違いは、軽く想像しただけでも恐ろしく屈辱的だ。だってなんの罠も仕掛けてない時点で先に見られちゃったら、もう言い訳のしようがないもん。

「いやいや、それただのイタズラだから！　あんたが見ちゃうように誘導しようとしてたのに、あんたが先に見ちゃっただけだからぁ！」とか言い訳を始めたって、ただただ必死に誤魔化してるようにしか見えないもんね。

例えば俺がこの類いのイタズラを材木座に仕掛けたとしよう。しかし先にネタを見られてしまい、材木座に「ほほう！　なーんだ、やはり八幡は我のこと親友と思っていたのだな！　モハハハハ！　よいよい、そう照れて誤魔化さずとも、我も八幡を親友ポ

ジに置いておいてやってもよいのだぞおっ!?」とか勝ち誇ったブタ面で言われると思ってみろ。

……すげぇな、想像しただけで殺意の波動に飲まれちゃったよ。よし、次の休み時間に殴りにいこう。

そう、つまりはそれだけのこと。

別に相模が俺を好きとか、そんな事があるわけがない。あのＪＣに影響されただけの、ただのからかいの一例でしかないのだ。

そもそもいい歳した高校生が、中学生でさえ「子供騙し」と一笑するような安いおまじないをするわけがないだろ。

だからあの消しゴムに書かれていたのは、あくまでもおバカで調子に乗った相模が、あのＪＣに悪影響を受けただけ。相模が偶然あのＪＣと液晶モニター越しに出会うことがなければ、決して消しゴムに文字など書く事は無かったのである。

「ほんっと比企谷とかマジ最悪ー。女子の嫌がることして喜ぶとか小学生かよって感じ！　比企谷ウチのこと好きすぎじゃない？　実はこうやってウチの気を引きたいんじゃないの～？」

「……」

……ほら見ろ。今泣いた烏がもう笑う、ではないけども、さっきまであれだけ涙目に

なって慌てふためいていた相模が、もういつもの調子を取り戻して、厭らしくニヤニヤと挑発してきやがってる。

つまり今の状況など、仕掛けた罠を先に見られていないのであれば、どうという事もない些末な出来事でしかないわけだ。さすがに潤んだ瞳とほんのり染まる桃色の頬は、未だ治まってはいないけれど。

普段は攻勢の自分が劣勢に立たされたからなのか、今の相模のニヤニヤ笑顔はいつもの三倍増しでウザイ。いつもよりも水分量が多めな潤んだ瞳と、耳まで赤くなった顔で精一杯からかってくるもんだから、その破壊力たるや、普段の三倍では済んでいないのかもしれない。

そしてこのウザさＭＡＸで下手っくそなからかいは、未だとどまることを知らないのであった……！

「もー、マジで比企谷には困っちゃうよねー。ウチらは友達だって言ってんのに～。そんなに友達のままでいるのがイヤなんだぁ？」

「……う、うぜぇ」

くそ、あのからかい上手のＪＣめ、相模なんぞに余計な知恵を与えやがって。おかげ

でドキドキさせられっぱなしじゃねーかよ。
だから俺は、この面倒くさい事この上ない事態を作ってくれたあのＪＣに、せめてものこんな恨み言をぽしょりと呟くのだった。

「……くっそう高木さんめぇ……！」

おしまい？

「へ？　だれよ高木って。うちのクラスに高木なんて居ないけど。てか、ウチ高木なんて人聞いたこともないんだけど、うちの学校にそんな人居たっけ？」
「え？」
「え？」

え？　さがみん高木さん知らないのん？　今までのって高木さんの模倣じゃなかったのん？　高木さんの見事なからかいっぷりを観たからこそ、真似してからかって楽しんでたんじゃなかったのん？

え、じゃあ今までのってなんだったの？　高木さん直伝のからかいじゃなかったの？

消しゴムのひきがやってどういうこと!?

……な、なるほど！　あっぶね！　高木さんなんて知らないフリして、こうしてさらなるドッキリを仕掛けてくるまでが相模のからかいだったのか！　またしてもやられちゃったぜ。

危うく、今までのって別にからかってたワケじゃなくて、ただ好き好きアピールしてただけだったの？　俺のこと大好きなの？　とか思いかけちゃったじゃないですかやだー。

……くっ、からかい下手だと思ってたのに、思ってたよりもやるじゃねぇか相模。

……くっそう、からかい上手の相模さんめ～！

おしまい☆